

佐為がアイドルに取り憑きます

雷雷バーガー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

佐為がアイドルに取り憑きます。

佐為が消えてから2年後の世界のお話になります。

アイドルの女の子は超有名人設定ですが、胸はあまり大きくなくすらりとした長身なので男装可能です。

主人公：中卒（年齢的には高校1年生）

ヒカル：中卒（年齢的には高校2年生）

アキラ：海王高校2年生

目次

佐為がアイドルに取り憑きます	1
佐為は再び蘇った理由が分かりません	8
アイドルVS芦原	14
佐為はネット碁をやります	21
アイドルはテレビで碁を打ちます	26
アイドルの握手会	32
和谷の指導碁	38
アイドルの休日、2度目の外出。	43
アイドルVS和谷	50
ヒカル編①	57
ヒカル編②	63
ヒカル編③	71
ヒカル編④	77
アイドル、人生2度目の碁	83
アイドルの休日、和谷く	90
アイドルは黒がいい!	97
アイドル、和谷と呼んでみる	104
アイドルの新しい日常	111
和谷のアパートにお邪魔します!	117
奈瀬と掲示板	124
アイドル、引導を渡さない	132
奈瀬の師匠は・・・	139
奈瀬とアイドル	145
アイドルモチベ0%? 100%?	151

ワールド囲碁ネットを手に入れよう①

ワールド囲碁ネットを手に入れよう②

ワールド囲碁ネットを手に入れよう③

ワールド囲碁ネットを手に入れよう④

クリスマスは誰と過ごす？

レギュラー囲碁番組、はじまります！

V S 塔矢行洋

158

164

169

177

183

189

195

佐為がアイドルに取り憑きます

——神はヒカルにこの一局を見せるため、1000年の時を生き長らえさせたのですね。

佐為は自らの存在意義を悟った。

それと同時に、もう自分が現世にとどまる意味などないと気付いてしまった。

そしてそれから一か月も待たずに、藤原佐為は消えたのだった。

※

それから2年後。

ヒカルは立ち直り、アキラとはいがみ合いながらも、よくやっていた。

碁の力も、まだアキラには及ばないまでも、急速に追いつこうとしている。

『俺の手の中に、佐為はいる』

ヒカルのそんな想いが、ヒカルの碁を強くしていく。

『アイツはこんなもんじゃない、アイツは……!!』

佐為とともに過ごした時間は3年にも満たない。

それでもヒカルにとってそれは大切な時間だった。

2年経った今でも、ヒカルの佐為に対する思いは色褪せないでいる。

ヒカルが佐為の消滅から完全に立ち直った一方、藤原佐為は——

——全く別の場所で——

——現世に蘇ったのだった。

※

溝口斜陰はアイドルだった。

斜陰と書いて、シャインと読む。

もちろん本名ではない。

芸名だ。

最初のオーディションのときに、『私は陰キヤなので裏方目立たないところが良いです!』と言ったせいだったりそうでなかったり。

そして光り輝く陰キヤという意味を込めて「斜陰」という名前になったとか。

彼女は16歳だ。

本当なら高校1年生となっている年齢だったが、中卒のまま高校へは進学しなかった。

そんな彼女は超有名人だった。

彼女の所属するアイドルグループは、国民的アイドルグループであり、彼女はそこでセンターを務めていた。

もちろんすごく忙しい。

どれだけ本人が『もつと休み頂戴!』って言っても週6は働かされる。とてもブラックだった。

「はぁ……」

斜陰はため息をついた。

斜陰は陰キヤなのだ。

はつきりいつて何万人という人の前でライブするより、家でゴロゴロしていたい人間だ。

もちろん他人からチャホヤされたいという欲求はある。

いや、正確にはあった、か。

毎日の過密スケジュールと、国民的アイドルという現実感のない状況に、斜陰の心は未だについていけないかった。

「……おうち帰りたい」

斜陰は呟いた。

※

今日は廃墟でテレビ撮影がある。
斜陰は本当にいますぐ帰りたいかった。
そもそも幽霊なんているわけないじゃん。
それなのに、わーきゃー言わないといけないなんて、本当にアイドルは大変だ。

「じゃ、シャインちゃん、怖いよね……」

斜陰について人気No. 2の子は、がくがくぶるぶると震えている。
る。

はあ……

内心ため息を吐く斜陰。

いつもいつも、本当に良い反応を見せてくれるよね、あんたは。
うらやましいよ。

斜陰は思った。

「はーい！ じゃあ二人で廃墟の中に入って貰いまーす！ 今回は、ちゃんとシャインちゃんを怖がらせられるように頑張ったので、良い反応期待しているよ☆」

ディレクターが二人に言った。

「ひいひいひい、あの人、絶対性格悪いよ！ ね、ねね！ シャインちゃん！」

「そうだね」

No. 2の子は震えまくっている。

こんな状態でまともに歩けるのだろうか。

でも、まあいつか。

この子が怖がつてくれれば私は何もしなくても “頼りがいのあるセンター” というキャラになれる。

斜陰は感謝した。

※

二人は廃墟の中を歩く。

正確に言えばカメラマンさんとかいろいろへつついて6人で歩いている。

でもここでは2人ということになっている。

「た、頼れるのはシャインちゃんだけだから！」

むにゅむにゅ。

そう言いながら胸を当ててくる。

斜陰はやっぱりこの子は天才なんじゃないか、って思った。

演技でも何でもなく、ド天然としてこの言動をしている。

もうカメラマンさんとか全く気にしていない。

ずっとビクビクしながら、床がきしむだけで、『きゃあ！』と叫ぶ。

その反応は同性の私から見てもカワイイ。

ついでに胸を押し付けて巨乳アピールをする。

す、すごい！

むしろなんでこの子を差し置いて自分がNo. 1なのかが分からないよ。

斜陰は冷静にそう思った。

※

廃墟の中を進んでいく。

もう撮影も終盤だろう。

しかしほとんど何も起こらなかった。

No. 2の子——春奈が何もなかったところで勝手に怖がり、何もなかったところで勝手に転んだりするので一応番組としては成立しているが。

もし斜陰一人だったら番組は成立しなかっただろう。

ただ真顔でてくてく歩いて終わるだけになる。

しかし斜陰は、ほとんど何も反応しないので、『もうちょっと怖がって。次で最後の部屋なんだから』という指示を受けてしまった。

斜陰は、

(やった！ やつとおうちに帰れる！ でも、どうしよう？ きゃー
とでも言えればいい?)

と内心、悩む。

しかしそんな気苦労は意味がなかった。

——そこには本物の幽霊がいたから。

そして月明りのみが窓から差し込む部屋に何か、一つのものだけが置かれていた。

「ここ、これ、なんなの???’」

「うくん、将棋か囲碁用の盤だと思うけど……」

「へ、へへ」

『碁盤です！』

斜陰の耳に何かが聞こえた。

「え？ 碁盤?」

「な、何、どうしたの?」

斜陰はカメラマンさんの方を見たりときよろきよろするが、誰かが声を出したような様子はない。

そもそも声質から違うし、その声はなぜか少し不機嫌そうだった。

『あなた！ 私の声が聞こえるのですね！』

また声がした。

斜陰はキョロキョロと辺りを見回す。

どこから声がしたかな?

大方、どっかにスピーカーがあると思うんだけど……

斜陰はそんな風に思いながら、ふと違和感を感じた。

(あれ? 春奈が反応しない??)

「しゃ、シャインちゃん、どうしたの??」

確かに春奈は怖がっているが、それはさっきの声に怖がっている様子ではない。

「え、聞こえてないの?」

「こ、ここ、怖いこと言わないでよー!」

ずっと斜陰にへばりついていていた春奈だが、ここにきて初めて斜陰か

ら離れた。

『私の声が聞こえているのはあなただけですよ』

「え」

斜陰はこの廃墟に来てから、初めて恐怖した。

春奈はいる。

カメラマンさんたちはいる。

私を騙しているような雰囲気でもない。

むしろカメラマンさんは感心して見ているようにも、見える。

私が演技をしているとも思っているのだろうか。

斜陰はドツキリの類ではないことを確信した。

そもそも天然の春奈がドツキリの企画側に参加するわけがないし、

もし参加していれば顔で分かる。

春奈の顔は斜陰を本気で怖がっている顔だった。

『聞こえているのでしょうか?』

「――」

斜陰は恐ろしかった。

震えた声が漏れた。

斜陰は泣きそうだった。

しかし、なんとか耐える。

「……だ、誰なの?」

『私の名は、藤原佐為。碁打ちです』

「碁打ち?」

『ええ……碁を打って生活する者のことです』

しかし声の主はいなかった。

声の主は、きつと生活する必要がある。

生活していたのは昔だけ。

そうつまり、生前が碁打ちの――

「――幽霊なの?」

斜陰は聞いた。

瞬間、ダン！ という鈍い音が聞こえた、
春奈が腰を抜かし、尻餅をついたのだ。

——そして月明りの中、何かが浮かび上がった。

それは烏帽子をかぶった美丈夫だった。

斜陰にしか見えていない。

彼はゆっくりと頷いた。

そして言った。

『次があるとは……神よ、感謝いたします』

直後、斜陰は意識を失った。

佐為は再び蘇った理由が分かりません

私は平安時代の都で、囲碁の指南役をしておりました。しかし指南役は二人もいらぬ。

そう言われ私は戦い——負けてしまいました。

私は入水しました。

しかしまだ神の一手は極めていない。

そんな私は江戸時代に虎次郎の心に蘇ります。

そして、神の一手を極めるための日々を送りました。

しかし虎次郎は病で倒れ、若くして死んでしまいました。

そして最後に出会ったのがヒカルでした。

私は初め、再び現世に戻ってこられたのは、神の一手を極めるためだと思ってきました。

ですがそれは違ったのだと、気付きました。

神の一手に最も近い男——塔矢行洋との戦いをヒカルに見せるために、神は1000年の時を永らえさせたのだ、と悟りました。そしてそれは正しかった。その戦いからほどなくして私は消えました。

ですが完全には消えなかつた。

2年という時を経て、今度はあなたの心に住まわせて頂けたのですから。

「へー」

斜陰は、囲碁というものが分からない。

「つまりそのゲームを極めるために1000年生きたけど、実はヒカルに戦いを見せるためだつたってこと？」

『はい……でも囲碁をゲーム呼ばわりなんて』

佐為は斜陰の心の中で、しくしくと泣いた。

「うっ……」

斜陰は口に手をやる。

やばい、吐き出しそうだ。

「……な、何をしたの？」

『囲碁を知らないという私の悲しみが、あなたの心を覆ったのです』
「は、はあ……でも、私ぐらいの女の子なら普通、碁なんて知らないと思うけど」

『でもあかりちゃんは真剣に碁をやっていましたし、平安時代でも清少納言殿や紫式部殿も碁を嗜んでおられましたよ！』

烏帽子をかぶった美丈夫は、必死な顔で言った。

「は、はあ……」

なんでたかがゲームにそこまで……

と斜陰は思ったが、佐為に対して悪感情はもっていなかった。

どんなことであれ、単純に一つのことを打ち込み続ける姿勢は、好ましいものであるし、何より佐為は美しかった。

芸能界でイケメンたちに見慣れているとはいえ、16歳の女の子。そんな子が、佐為のような美しい男に悪感情を持つわけがないのである。

だからと言って、特段好印象を持ったわけでもない。

斜陰の目は本当に肥えているし、何より疲れていた。

アイドルが恋愛すれば不祥事となるが、そもそも恋愛をしようとするエネルギーすらない。

斜陰はお家に帰りたいたい一心だった。

東京のとあるマンション。

その前までプロデューサーの方が送ってくれた。

「ありがとうございます」

斜陰は律義にそうお辞儀をした後、マンションの中へと入っていた。

それを見届けてから、プロデューサーは車を発進させた。

『……知ってます！ ビルっていうんですよね！』

佐為ははしやぐ。

斜陰はいつも通りに自宅の部屋へ帰った。

「たっだいま〜」

すってつてつて、ばたん！

斜陰は幸せそうにベッドに突っ伏した。

「おやすみ〜」

『え？』

「zzzzzzzz……」

斜陰は一瞬で寝たのだった。

※

次の日。

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

斜陰のプライベート用の携帯が鳴る。

朝を起さない斜陰のために、プロデューサーが毎朝電話をかけてくれるのだ。

斜陰はいつものように着信拒否を押した後、むくりと起き上がった。

一方の佐為は斜陰が寝ている間、家の中を見てみたが両親がいる様子はなかった。

普通、斜陰くらしいの女の子であれば両親と一緒に生活するのが普通であるところは、ヒカルとの生活の中で理解していた。

『ユウコさん、ユウコさん、ご両親は一緒に住んではおられないのですか？』

佐為は聞いた。

ちなみにユウコとは斜陰の本名である。

プライベートなどところまで斜陰の名前を持ち出されなくなかったので、ユウコと呼ばせることにした。

同じアイドルとして仲の良い子も、ユウコと呼ばせるわけにはいかない。いつ口を滑らすか分からないから……

そして本来ユウコと呼ぶべき家族とは、斜陰は離れて暮らしていた。

「まあね……ふわあ」

斜陰は何でもないことのように同意する。

地元は地方なので親元を離れて暮らすのは、斜陰にとって当然のことだった。

斜陰は両親とはすでに絶縁状態になっていた。

中学時代に稼いだお金が、親に勝手に取られていたから。

中学の内に稼いだお金は総額1億くらい。

——育ててくれたのは感謝してるし、1億くらいはあげてやる。

斜陰はそう思っていた。

実際、今の生活を続けければ、一年で2億くらいは稼げるだろう。

中学を卒業したことで、アイドル活動も児童労働ということにはならない。すでに親に縛られる意味もないし、斜陰は天下のアイドルだ。親がいなくなつて他の人が支えてくれた。

斜陰はいつもの朝のルーティンを行う。

水を飲んだ後、服を脱ぎ捨て、シャワーを浴びるのだ。

しかし今日はいつもと違う。

『あわわわわわ』

と慌てる佐為がいた。

※

『ユウコさん、心の片隅に住まわせてもらっている身ですが……やはり、女子として人前で裸になるのは』

2人は車に乗っている。

『事前に言っていただければ、見るような行為は致しませんから……』（ふふっ、佐為、顔を赤くしたもんね）

『そっ、それはっ……別につ……』

佐為は扇子を口に当てて、押し黙った。

か、かわいいっ！

その反応に斜陰は少しキュンとした。

天下のアイドルとして不動の心を持つ斜陰を、少しキュンとさせるとは、物凄まじいことだったりする。

しかし佐為にそんな自覚はない。

(ねえ、佐為。あなたが私の心に蘇った理由って何?)

『分かりません……ヒカルと出会う前でしたら迷いなく、神の一手を極めるため』と答えたと思いますが、今となっては』

(そっか)

『ええ。碁は未来につながっていくのです。師匠から弟子へと想いのバトンが繋がれ、そして弟子はまた、師匠となる——

——ヒカルは今どうしているのでしょうか?』

(ヒカルって私の前に取り憑いてた人のことだよ?)

『はい。今は高校2年生になってると思います……ああ、高校2年生のヒカルですか?どうなっていることでしょうか? あかりちゃんとは上手くやれているといいのですが……あ、でもヒカル、進学しないって言って言っていましたから、プロ一本で行くのかも』

(碁のプロなんだよね? 本名は?)

『進藤ヒカルです』

(分かった、調べといてあげるよ)

斜陰は何気なくそう言った。

しかし直後——

『——え?!?!?!? ホントですか?!?!?!?』

佐為の突然のハイテンションに、斜陰は驚きと同時に、少し困惑した。

それほどまでにヒカルという存在は、佐為にとって大きいのか、と思った。

佐為が囲碁というゲームに惚れ込んでいるというのは、分かってい

た。

神の一手を極めるために千年もの時を生きるのだから……

未だ16歳の斜陰に、千年という時は途方もなく長く、そしてそんな途方に長い千年間の間ずっと、囲碁をやり続けるなんて本当にすごいことだと思った。

でもその囲碁への想いと同じくらい、そのヒカルという人に対する思い入れはあるようだ、斜陰は見抜いていた。

——千年をかけた囲碁と同じくらい、ヒカルのこと大切なの??

こんなことを面と向かっていきなり聞けるほど、2人は仲良くないし、斜陰の心は強くなかった。

いや、正確に言う、斜陰は聞こうと思えば聞けた。

トップアイドルとしてメンタルの作り方は“習得できる技術”として、完璧だった。

しかし単純に疲れることはしたくなかった。

そうやって心に負荷のかかる質問をするのは、地味に疲れるのだ。

斜陰の心は陰キヤの心なのだから……

「あ、もしもし? 私、斜陰だけど……うん、進藤ヒカルっていう囲碁のプロがいると思うんだけど……うん、うん。その人のことを調べて欲しいんだ……え? 男だけど……うん、うん。え? 不祥事はダメだって? 大丈夫だって、このスケジュールじゃ恋愛したくてもできないでしょ……うん、うん。ありがと、じゃ」

ポチ。

パタン。

斜陰はガラケーを閉じた。

アイドルVS芦原

今日は、斜陰の休日。

いつもなら家の中で寝ているだけで終わるのだが、どうやら今日は違うようだ。

斜陰は髪の毛をキャップに仕舞い、マスクを付ける。

「よし」

鏡に映る斜陰の姿は、どこからどう見ても少年のそれだった。

斜陰は自分の男装姿に満足し、玄関を出た。

※

うわ、すごい。

たくさんの子供たちが、真剣な表情で碁を打っている。

大きなホールに、何百人という子供たちが一斉に並んで、真剣に戦っている。

その周りには保護者たちがいるようで、このホール全体の人数は1000人を超えているだろう。

斜陰はその光景に驚き、少し感動した。

——たかがゲームじゃないの？

——囲碁ってそんなに面白いの??

斜陰の心の中で、囲碁というものに対する考え方が変わっていく。そんな斜陰の心に、佐為は気付いていた。

そして思う。

——私がこうして再び蘇ったのは、ヒカルと同じように、彼女にも碁の素質があるからなのでしょうか？

しかし斜陰は未だ、碁のルールすら知らない。

子供たちの後ろを歩き、見て回る。

『その右上隅の攻防、打ち損じると黒が死にます。1の2が急所です』

そして対局者の子供は1の3に打った。

(佐為、 どういうことなの?)

斜陰は何のことを言っているのか、さっぱりだった。

『ユウゴさん、 あなたはまずルールを覚えるところからですね……』
ちなみに佐為は、 こうして蘇ってから数日経ったが、 一局も指して
いなかった。

もちろん、 打ちたい。

指したいが…… 神の一手を極める” という目標はもうすでに佐
為の中で一区切りついてしまっていた。

だからこそ、 ヒカルの時のように駄々こねるようなことはない。

(佐為、 指したい?)

しかし顔には出ていた。

斜陰に気付かれてしまう。

(は、 はい)

(そりやそうだよ。 1000年もの間ずっと囲碁をやり続けてきた
んだもんね。 大好きなんだよね、 囲碁が)

(大好き、 ですか…… 好きというより、 囲碁は自分の体の一部のような
感覚です)

(でも指したいんでしょ?)

(ええ、 もちろん。 すっごく打ちたいですよ)

(ここに私が今から参加することできないかな)

何も知らない斜陰はそんなことを言ってみる。

(分かりませんが、 やってみる価値はあると思います)

実は佐為も何も分かっていなかった。

2人は運営本部へと向かった。

※

「あの、 今からあの中に参加することってできますか?」

斜陰はなるべく低い声でそう言った。

今は男装中である。

「え? もしかして遅刻した方ですか? 今の時刻だともう不戦敗と

なつてしまったと思います。申し訳ありませんが……」

「いえ、遅刻ではなくて、飛び入りみたいなの？」

「飛び入りは受け付けておりませんので……」

係りの人は申し訳なきように言う。

(断られちゃいましたね)

(まあ普通そうだよね)

(仕方ない……ですか)

佐為はものすごく残念そうに言った。

——やつぱり佐為は碁が好きなんだね。できれば打たせてあげたいけど……

——今日を逃せば、次に打てる機会は一週間は先だ。

——だから今日しかない。

ネット碁のことなんて知らない斜陰は、そう思った。

——でもどうやって？

そのとき、一人のプロが現れた。

「どうしたんだい？」

「あ、芦原先生！ この子が飛び入りで参加したい、と言ってきましたが、無理なので断ったところですよ」

係りの男は芦原六段に言った。

「大会に出たかったのかい？」

芦原六段は少年斜陰に聞く。

「大会はどうでもいいんですけど、碁をやりたかっただけです」

斜陰は答えた。

ちなみに芦原六段は塔矢門下期待の若手である——塔矢六段の陰に隠れているが。

なお佐為が消えてから2年の間に、塔矢は六段まで昇段してしまっている。芦原も2年の間に六段まで上がった。昇段は僅差で芦原の方が早かったが、七段への昇段は確実に塔矢の方が早いだろう。なぜこの場にプロがいるかというと、指導碁のためである。

大会では勝ち上がり上に行く子がいる一方、2連敗をしてすぐに脱落する子もいる。

そんな子たちのために、プロの指導碁を受けられるシステムがあるのだ。

そんなわけでプロは今日、数人来る予定だ。

その中に進藤ヒカル四段の名前もあつた。

ただまだ、その姿は見えない。

まだ指導碁の開始時刻まで時間があるためだ。

真面目な芦原六段は早々と来ているが、ヒカルがそんなに早く来るはずもない。むしろ一番最後に遅刻ギリギリで大慌てでやって来る可能性が高い。

「なら、僕と少し打つかい？ まだ指導碁までには時間があるし」
芦原六段は、斜陰にそう返した。

※

打ち方はまるで初心者だった。

親指と人差し指で石をつまんで、置く。

だから芦原六段はすぐに指導碁に切り替えた。

しかし、打てば打つほど相手の実力があることに気付いていく。

——石の筋はしっかりしている。持ち方はあれだけど、案外できるのかな？

初めはその程度の認識だった。

しかし段々とその評価が変わっていく。

少し厳しめの手を打つても、全く動じない。

いやそれだけじゃない。

——石の筋が良すぎる。あまりに良すぎる。綺麗すぎる手ばかりだ。

過度に筋にこだわりすぎているようにも見える。

しかしそれでいて、形勢はずっと五分を維持されている。

—————どうということだ？ 俺がそんなに悪手を指しているのか？

実際には、芦原六段は悪手と呼べるほどの手は指していない。

しかし最善手ではない。次善手とか、最善手に限りなく近い手を指

している。

しかし最善手ではなかった。

だからこそ、佐為には凝った手を指す必要がなかった。

自然に自然に。

筋に沿って指し続ける。

しかし中盤。

一手だけ、趣の違う手を、その子は放った。

コトリ……

瞬間、芦原六段は気付いた。

——この子は……本気を出していない？

向かい側に座る少年は、マスクで顔が隠れ、表情までは窺いきれなかった。

芦原六段は、指導碁をやめたのだった。

※

芦原六段は指導碁として打つつもりだった。

コミなしの定先だった。

そして結果は、黒の2目勝ち。

自分の負けなのだが、指導碁としては問題ない。

しかしそうじゃない。

あの中盤の一手。

こちらの力量を図るような一手から、芦原は手を抜かなかった。

もちろん早碁だ。

プロの公式戦のような長い持ち時間ではなく、時間制限はないものの暗黙の了解として早碁ではあった。

しかしそれは言い訳にはならない。

早碁こそ実力差が出るものだから。

結果はこちらの2目負け。

コミがあれば2目半勝ちだとか関係ない。

あの局面の時点では、盤面互角だったはずだ。

なのに……負けた。

しかも初心者のような手つきの子に。

芦原六段はその対局者の顔を覗き込んだ。

しかし少年の素顔はマスクで隠れ、見えない。

「君は？…まだ中学生くらいだよね？」

芦原は聞く。

「え？」

斜陰には全く分からない。

芦原の表情の意味は分からない。

信じられないような、縋るような表情の意味は。

(えっと、どういうこと?)

(大方、私の碁の実力に驚いているのでしょうか)

(あ、そっか。1000年も碁をやり続けたんだから、そりゃ強いよね

……相手の人も強いのか?)

(相手の方はプロですね)

(えっ!? プロっ!?)

(ええ、まあ)

(じゃあ、そんな人に勝っちゃう私って絶対おかしいじゃん!)

斜陰は即座に席を立った。

(帰るよ!)

そして逃げ去るように、帰っていった。

——変装してて良かったあ。

と思いつながら。

※

「芦原先生、芦原先生、もうすぐ指導碁が始まりますよ」

「あ、ああ」

芦原は先ほどの碁の検討をしていたが、そろそろ時間のようだ。

「あの、どうかされたんですか？」

「いや……大したことじゃないんだ」

実際には大したことが起きた。

中学生くらいの子に早碁とはいえ、そして中盤から終盤のみとはいえ、負けてしまうとは。

アキラなら負けても仕方ないとは思えるが……

「はあ……さつきの子に負かされたんですよ」

「あれ？ でもあの子思いつきり初心者みたいな打ち方してましたよね？ 指導碁をしてたんですよね？」

「ああ」

「なら別に落ち込むことじゃないと思いますけど」

芦原は「途中から本気を出した」ことを言う気にはなれなかった。

佐為はネット碁をやりま

『ひどいひどい！ まだヒカルの顔も見えないじゃないですか！』

佐為がわめいた。

駄々っ子のように。

もちろん佐為にとつて碁を打てたことは嬉しかったが、ヒカルと会うことはそれとは別だった。

そもそも今回、こうやって大会にやって来たのは、ヒカルと佐為が会うためなのだ。

それなのに斜陰は逃げ出してきてしまった。

(でも素性は絶対、知られたくないし)

斜陰は思った。

もし国民的超人気アイドルがプロを負かした、ということが世間に知られれば——絶対面倒なことになる。

てか仕事増える。

ホント、嫌。

今でも無茶苦茶『仕事減らせ！ 仕事減らせ！』って言って、週6という事実。

こんな状況でさらに囲碁が滅茶苦茶強いことがバレたら、絶対週7になる。

それは受け入れがたいものであった。

「帰るよ？ ね？」

『ですが……まだヒカルと……』

「これやらせてあげるから……いいでしょ？」

斜陰の手には先ほど貰った囲碁のポスター。

その下部には——

これからの時代はネット碁だ！

ワールド囲碁ネットでは世界中の猛者たちと、競い合うことが出来る！ もちろん初心者も大歓迎！ レーティングシステムを採用し、さらに快適になったワールド囲碁ネットをやらない手はない！

広告があつた。

『あ、ネット碁ですね！ ヒカルともよくやりました！ ネット碁では世界中の碁打ちを一刀両断、百人斬りしたんですよ！』

「やらせてあげるよ」

『え!?! ホントですか!?!』

はしやぐ佐為。

そんな様子を、かわいいなあ〜と思ひながら見守る斜陰。

二人は会場から駅への道を歩く。

逆方向から、一人の青年が走ってくるのが見えた。

前髪だけ金髪に染めた青年。

「あっ!!」

——間違いない！ 進藤ヒカルだ！

斜陰はヒカルの顔をガン見した。

『ヒカル!!』

遅れて、ネット碁を打つ喜びに浮かれていた佐為も気付く。

『ヒカル!!』

佐為はヒカルの前に立つ。

しかし——

「もしかして俺のファン？」

——ヒカルが声をかけたのは、斜陰だけだった。

「でもごめんな！ 今、急いでいるから！ 今度会ったら色紙書いてやるから！」

ヒカルは走り去っていく。

佐為の体をすり抜けて。

『ああ……』

佐為は震えた。

『この身がないのが口惜しい』

佐為の涙が零れ落ちる。

「佐為……」

斜陰はどうすることもできなかつた。

佐為が泣き止むまでずっと、見守ることしかできなかつた。

「ん？ 今、佐為って聞こえたような？」

走り去ったヒカルは、後ろを振り返る。

ヒカルはチラリと時計を見る。

「やっべー！ もうこんな時間だ！ 急がねーと！」

ヒカルは気のせいだと思い、会場へと向かうのだった。

※

斜陰の家（というかマンションの一室）にはパソコンがある。

ほとんど使っていないが……

「パソコン動くかなあ」

久しぶりすぎて動いてくれるか心配になる斜陰。

半年前に買って以来、使ったのは最初の一週間だけだったような記憶がある。

大丈夫かな？

ういゝいゝいゝいゝいん

「……あ、動いた」

パソコンはゆっくりと起動する。

2019年のスマホ等に比べると本当に遅すぎる速度で起動する。

しかしここはまだXPの時代。

そのパソコンは最新機種のXP（）であった。

お茶を持つてくると、ホーム画面になっていた。

「よし！ やりますか！ ワールド囲碁ネットつと！」

『あ、文字を打てるんですね！』

「まあ、一応？」

斜陰はタイピングができる。

斜陰はバカじゃない。

可愛いのはそうだが、それだけじゃなく、聡明でもある。

もしアイドルじゃなかったら、地元でトップの進学校に通うはず

だった程度には賢かった。

「うーん、名前かぁ……どうしようっ。」

『昔ヒカルとやっていたときはsaiという名前でやっておりましたが……』

「安直だね」

一応、saiという名前で登録しようとしてみるが、案の定“この名前は既に使われています”というシステムメッセージが表示された。

ワールド囲碁ネットはこの2年間で少し変わっている。

まず、名前の被りは禁止。

“偽saiか？”

なんていう和谷の言葉が聞けることはない。

他にレーティングシステムが導入された。

「……でもどうしよう？」

斜陰は悩む。

Fujiwaraや自分の本名であるyukoは使えなかった。

「shineでいいかな」

しかし、どうやらshineは使えるようだ。

ちなみに語源は、

斜陰↓シャイン↓shine

というわけである。

『いいんじゃないですか、名前なんて。私は打てればそれで満足ですよ』

「ならいつか」

そしてsai改め、shineがネット碁の世界に再び現れた。

それは塔矢行洋との戦いから実に2年後のことだった。

※

シネ

初めて見たとき、ふぎけた名前の野郎だと思った。

— s — h — i — n — e

つまりシネ。

中卒の和谷に英語能力なんてあるはずもない。

しかしパソコンを使うので、s h iでシと読むことは知っていた。
シネ

そんな舐めた奴、この俺がぶったたいてやる！

しかしその30分後、和谷はパソコンの画面を見て、呆然としていた。

「そんな……バカな……」

その強さは、トップ棋士たちと遜色ない。

いや、遜色がないどころじゃない。

これは——

——自分が戦ってきた誰よりも強い

そんなことがよぎり、そして即座に否定する。

ありえない。

しかし——

——じゃあなぜ、4年前に現れた伝説の打ち手“s a i”のことが、脳裏にチラつくんだ？

しかし、今の碁を見返せば見返すほど、s a iがちらつく。

この手も、あの手も、その手も。

まるでs a iだ。

「まさか……」

和谷の声が漏れた。

アイドルはテレビで碁を打ちます

とあるテレビ番組。

斜陰はゲストとして出演していた。

それは某しやべくりなんとかみたいな番組であった。

「えー、今日のゲスト！ 溝口斜陰ちゃんの登場です！」

ブシャーーーーーー

煙が噴出する中、斜陰は前へ進む。

パチパチパチパチ

わーわー

わーわー

『うわ！ すごいですね！ すごい歓迎されちゃってますね！』

(……)

『すごいすごいー！』

斜陰は観客席を一瞥した後、中央の席に座った。

基本的に、斜陰がこういう場で気にするのは、頭を空っぽにすると
いうことだけである。

他のアイドルの子たちは自分を偽って無理して自分をなるべく良
く見せようと必死になっているけど、素でいる方が楽だから、斜陰は
全くしなかった。

素でいる方が、楽だし、その上楽しい。

頭をなるべく空っぽにして、子供のように楽しもう。

そうすれば自然と笑顔は生まれる。

——ま、子供を嫌うっていう人はあんまりいないし、まあいいで
しょう。

そんな斜陰の考え方は素晴らしすぎた。

結果として、斜陰がトップアイドルにまで上り詰める要因となっ
た。

そもそも斜陰は別に、テレビ画面のギリギリに映るような、ギリギ
リアイドルで良かった。

だから、素で行くということに躊躇いはなかった。

なのにこうして国民的アイドルにまでなってしまうている。

——この方法で上がってきたんだし、楽だし、変える必要はないよね？

そんな思考の下、今日も斜陰は頭をなるべくすっからかんにして、素を出していく。

「久しぶりだね、斜陰ちゃん。どう？ 変わりない？」

「はい！」

斜陰は何も考えず、純真無垢な子供のような笑顔を弾かせる。

「前の時は、趣味が睡眠だったけど、何か新しい趣味でも見つけた？」

司会の男が聞いた。

ちなみに斜陰はこの番組2度目であった。

前回の時では——

「趣味はっ……」

そう言つてシールをめくると、斜陰の趣味が出てきた。

「睡眠！ これはどういう？」

「私、睡眠が大好きなんです！ 休む時間があつたらずと寝てます！ 一昨日は時間があつたから12時間ぶつ通しで寝たんです！」

——なんていうやり取りがあつた。

そのお陰か、それ以降、ある程度睡眠時間には気を配られたスケジュールになり、その上、週6まで仕事が減つた。

プロデューサーが『やるわね！ シャイン！』と言つてきたが、斜陰には何のことか分からなかった。

斜陰は頭が良いが、天然でもあつた。

というかむしろ頭が良いけど、頭を使うのは疲れるので、なるべく頭を空っぽしているというのが正しいか。

だからこそ、斜陰はこんなトップアイドルになつても未だ、性格が捻じ曲がらずに済んでいると言つてもいい。

もちろん、本人は気付いていないが。

話を戻そう。

司会の男が、

「前の時は、趣味が睡眠だったけど、何か新しい趣味でも見つけた？」
と聞いてくる。

『碁です！ ユウコさんはほぼ毎日ネット碁をやっているんですから
！』

そんな佐為につられて、斜陰はふわりと笑って、

「碁です」

そう答えた。

佐為の実力を知られれば面倒なことになるかもしれないが、（仕事
が増えるかもしれないが、）

別に趣味としてやっていることを言うくらいは問題ないだろう。

「え？ 碁ってあの、囲碁のこと？」

「はい。白と黒を交互に打つゲームのことです」

「へー……シャインちゃん、趣味が渋いね！」

そして他の男たちが、

「趣味がお爺ちゃん！」

とか言って、からかってくる。

もちろん反発する——

『キー！ 囲碁は子供から大人まで平等に楽しめるゲームなんです！

ユウコさんもなんか言ってやってください！』

——佐為だけが。

「じゃあ、芝刈り行ってきていいですか？」

天然斜陰に怖いものはない。

頭空っぽモードの斜陰は、滑っても気にしないのだ。

だからこそ、テキトーな返しをして、そして受け入れられる。

そういう奴なんだな、と。

そして番組内で、囲碁の対局が設けられた。

相手はレギュラーのおっさんの一人で多少囲碁は齧ったことがあ

る程度の者。

自称アマ初段のおっさんだった。

もちろん佐為には楽勝過ぎる相手だった。

そんなこと斜陰にも分かっていた。

(ねえ、佐為、どうせなら、全部取っちゃってよ！)

『……え？ 今なんと？』

(だから相手のすべての石を取っちゃってよ！ この人どうせ初段とかいいながら実は大した実力ないと思うし。芸能界ではよくいるんだよね、そうやって自分のことを大きく見せようとする人が。だから大丈夫だよ)

斜陰はひどいことを言う。

いつもの斜陰ならこんなことは言わないが、今は天然モード。

子供のように、相手を傷つけることも平気でやってしまう。

『分かりました』

佐為は受け入れる。

そもそも佐為には受け入れないなんて選択肢はない。

斜陰がやれと言ってきたらやるのみ。

——それが例えどれだけ険しい道であっても！

そう。

佐為は碁バカなのだ。

碁のことで引けるわけない。

——相手の実力は最初の10手を見れば分かる。この者……予想外に強い！

しかし斜陰にとって想定外だったのは、その男が意外と強かったということである。

初段と言いながら実は二段くらいの実力があつた。

——これは大変ですね……すべての石を殺すとなると尋常ならざる手段で攻めねばならない。ハメ手のような手も使う必要がありま
すか。

ハメ手——相手に正確に指されれば、こっちが損をするような手。
しかし逆に相手が応手を間違えば、たちまち優勢になる。

コウやダメツマリを使って、複雑な戦いへと持っていく佐為。対戦相手のおっさんは、全く読み切れない。

——変化が膨大すぎる！俺にはさっぱりだ！

相手の陣地になりそうなところへと鋭く切り取り、ぐちゃぐちゃの戦いに持っていく。

——右下は正確に指されれば、相手の地になる。だから手を入れなくてはならない。しかしそうすると上辺の白字がほぼ確定してしまう。ならば、ここは上辺へと打ち込む一手!!

佐為は尋常ならざる手段で迫っていく。

ある程度囲碁を知ってるものから見れば、ハチャメチャな碁。

初心者同士なのかな？

と思うような碁であった。

その芸能人のおっさんは碁石を人差し指と中指でつまみ、正しい持ち方をするが、

斜陰は親指を使ってつまみ、コトリと置くように打っている。

だから碁の内容うんぬん以前に、その打ち方だけでも斜陰は初心者のようにしか見えない。

そしてその偏見を持ったままハチャメチャな碁を見れば、すぐに初心者同士の対局だと思ってしまうだろう。

しかし、世界でたった一人気付いている者もいた——

※

——その者は、棋院のテレビの前のソファで一服していた。

「ふおっふおっふお、面白い嬢ちゃんだ」

桑原本因坊である。

驚くべき妖怪性であるが、2年経った今でも、未だ本因坊のタイトルにしがみついていた。

執念に似た何か。

——本因坊のタイトルは小僧が来るまで守っておくつもりだったが、こやつは碁は……まさしく小僧の碁を思い起こさせる。

新初段シリーズの塔矢行洋VS進藤ヒカルの一戦。

あれは小僧が自ら大きなハンデを背負って戦っていると考えれば、説明がつく。

しかしこれはそれ以上――

――大方、すべての石を取り切るつもりじゃない、嬢ちゃん。

そして手を入れなくてはならない右下を放置して、上辺へと打ち込んだ。

院生クラスの実力があれば、右下に手を入れないといけないことは分かるだろう。

しかし相手はそうじゃない。

芸能人のおっさんであった。

「ふおっふおっふお。おもしろう嬢ちゃんじやのう」

桑原はそれは楽しそうに、タバコを吹かすのだった。

アイドルの握手会

進藤ヒカル四段 VS 和谷義高四段 の一戦が行われていた。
パチツパチツパチツとまるで早碁のような速度で進んでいく。

今日の和谷にはとある負けられない理由があった。
そしてなるべく早く、対局を終わらせたい理由もあった。

——今日の和谷は気迫がちげーぜ!!

ヒカルは和谷の気迫に驚く。

未だかつて、和谷がこれほどまでにヒカルに闘志をむき出しにしたことがあっただろうか。

——勝つ！ 今日には絶対に勝つ!!

和谷はヒカルの一手に、読み通りだ！ と言わんばかりにノータイムで応手を放つ。

気迫のこもった一手。

早指しで知られるヒカルだが、むしろ今日の対局は全く逆。和谷のノータイム指しのせいで、どんどん時間の差が開いていく。

——正直、心のどこかで和谷には勝てる気でいたぜ……ひどい……

ヒカルは冷静に盤面を見渡す。

悪い。

かなり悪い。

盤面で互角くらい。

ヒカルが黒で、和谷が白だ。

ヒカルはコミの分だけ負けていた。

ヒカルは深く読んでいく。

しかし結論は変わらない。

自分がかなり悪い。

——逆転するのは大変だ……こうなったら一か八か、早碁のまま進めた方がチャンスはある!!

ヒカルは脳裏へ浮かぶ逆転筋を目指して、石を放った。

——あめーぜ、進藤!!

和谷は、ヒカルが深く読んでいた時間、同じように深く読んでいた。

そしてヒカルのその手はその間に考えていた。
和谷、ノータイムの応手。

しかしヒカルもその手は読んでいた。
ノータイムの打ち合いが続く。

そして、昼食休憩前に、対局が終わった。
ヒカルは盤の前で俯く。

「和谷……俺が和谷にプロ試験で勝ったときさ……」

「ああ、あれか」

「お前、俺に『今日の一局は・s a i並みだったぜ』って言ったよな
……あれ、嬉しかった」

「ああ」

和谷はその時の碁を思い出す。

進藤の黒石を殺せば、プロ試験合格というところだったんだ。

そして俺は、黒石を殺せると確信した。黒の生きる道はないと。
しかしあつた実はひとつだけ。

険しい険しい道だけど、たった一つだけあつた。
今でも思う。

あの石を生かすには、s a i並みの実力がなければならない。

和谷はかつての記憶を思い起こす。

「……今日の和谷、s a iみてーな強さだったぜ。それも怒った時の
佐為だ」

ヒカルが思い出していたのは、かつて佐為と過ごした日々。

大抵いつも容赦ないが、特に怒ったときはひどい。自分の手がすべ
て読みの範疇だと言わんばかりの手を放ってくる。

「進藤……怒った時のs a iってどういうことだ？」

「そんなぐらい強かったってことだよ」

ヒカルは盤にうつむいたまま、答えた。

和谷は少し疑問に思ったが、

「じゃあな」

そう言つて、去る――

大切な握手券を握りしめながら。

そう。

和谷が急ぐ理由。

それは応援するアイドルと握手をするためであつた……

※

斜陰は天然だが、頭が良い。

だけど、斜陰は天然じゃなく振舞おうと思えば、普通に振舞うこともできる人間だつた。

ただしそれには、無茶苦茶疲れる、という注意書きが付くが。

逆に言うと、疲れないためには天然であるしかない。

なので斜陰はなるべく天然な状態でいたかつた。

何も考えずにぼけーと過ごしていたかつた。

でもそうも言つてられないときもある。

それが、そう。

握手会であつた。

長い時間、次から次に現れる男たちと笑顔で握手し続けるなんて、普通じゃできない。

無理だ。

もし天然モードの斜陰が握手会をやろうと思えば、

1人目で、笑顔がはがれ、

2人目で、握手が片手になり、

3人目で、露骨な嫌な顔をするようになるだろう。

ちなみに4人目はない。

逃げ去ってしまうから。

そもそも斜陰はド陰キヤなのだ。

他人と次々に握手していくなんて、そんな精神のすり削られるようなこと、できるはずもない。

もちろん、斜陰は抗議した。

抗議に抗議を重ねた。

しかし結局ゼロになることはなかった。

3時間の連続握手。

大変な重労働である。

ちなみに元は、90分の5部編成で7時間半である。

それをなんとか5分の2にして貰って3時間なのである。

そう言うところ3時間が少なく感じられるかもしれないが、斜陰にとって握手会の3時間は地獄のように辛い。

自分の素を出してしまえば、握手会なんてできない。

こういうとき、斜陰は逆に何かを考えるようにしている。

何かを考えれば、気持ちも紛れるから。

(あー、この人もサラリーマンなのかな？ でも今日は平日なのに……会社休んでいるのかな？ 奥さんはいそうな雰囲気だけど、私と握手なんてしていいのかな?)

『あー！ でも薬指に指輪はありませんよ！ これを付けてなかったら結婚してないってことなんですよね！』

(別に、結婚してるけど指輪付けていない人、結構いるよ)

『そうなのですか?』

佐為はテンション低めの斜陰と違って、なかなかテンションが高い。

(……次の人は典型的なドルオタ大学生かな。今日はそもそも大学がないのか、それとも休んだのか)

斜陰は次々に現れる自分のファンたちの普段の生活を考えながら、握手していく。

(あ、次の人は結構かっこいいかも。大学生かな？ 私と握手するために必死でバイトとかしたのかなー)

茶髪の男が現れる。

『和谷じゃないですか?!!!!!!』

ビクッ

突然大声を出した佐為。

斜陰は振り返って、心の中で佐為に苦言を呈する。

(いきなり大声出さないでよ！　びくってなっちゃったじゃん！)

『ああ、ごめんなさい。ですが和谷はヒカルの友人で、何度もヒカルと戦ってきた相手なんですよ』

そう。

佐為が消えるまでの間で一番ヒカルと指した相手は、和谷なのだ。

もちろん佐為は除くとして……

和谷は同じ森下門下として毎週研究会で一回は打つ。

それだけじゃない。院生の手合いやプロ試験でも当たった。

ヒカルと和谷は何度も戦ってきたのだ。

ヒカルの急成長の陰には、面倒見のいい和谷の存在も、一役買っていた。

(へー、ヒカルさんの友人……プロだったり?)

『ええ。和谷はヒカルと同じ年にプロになりましたね。年齢的にはヒカルの一つ上です』

(じゃあ高校3年生ってこと？　確かにちよつと大学生というよりは高校生っぽさもあるかも？　でもやっぱり、雰囲気は一般人とは違うよね)

「あの——」

和谷は恐る恐る声をかけた。

「あー！　あー！　ごめんね！　ちよつとぼーつとしてた！」

斜陰の意識が、佐為との話から戻ってくる。

「はー！」

斜陰はすぐに切り替えて、笑顔で手を差し出す。

「……」

「……あの、どうかしましたか？」

和谷は斜陰の笑顔に見惚れていた。

そのことを自覚すると一気に顔が熱くなる。

「あ……えー」

和谷は無茶苦茶テンパリながら手を差し出した。

そして斜陰の手をぎゅつと握って、そしてぱつと逃げ去るように

帰っていった。

『和谷もまだまだ若いですねえ』

佐為はそう呟きながら、ヒカルのそっち方面はどうなんでしょうか？ と疑問に思った。

——あかりちゃんと恋人関係になったのでしょうか？
そんなことを思った。

和谷の指導碁

溝口斜陰、初段を破る。

囲碁の記事を見てみると、そんな言葉がよく見られる。それともう一つ、よく見られるのは、

ネット碁に死神現る！

最高レート保持者！

勝率は驚異の9割5分！

そんな記事である。

佐為がネット後の世界に再来してからもうすでに3か月ほど。

shineの名は、囲碁界全体に広まっていた。

そしてこれをシネと読む日本人棋士が続出。

しかし、シネというのは口に出すのはあまりよろしくないということとで、通称『死神』と呼ばれていた。

そんな死神は、瞬く間に最高レート記録保持者となった。そして前人未到のR3000を超えた。現在、唯一のR3000代として君臨していた。

もちろんそうなると世界中の猛者たちがほっておくはずもない。

誰でもいいから受けていたヒカルとは違い、斜陰は、どうせやるなら佐為もなるべく強い人がいいでしょ、つて思っていたため、大抵戦う相手はその時アクセスしている中で一番レートが高い者との戦いだっただった。

日本のプロだけではなく、韓国や中国のプロもshineと打つためにネット碁の世界に参入し、そして対局を挑んでいった。

もちろんそれだけの猛者相手ばかりとなると、流石の佐為でも全勝とはいかなかった。

しかしそれでも勝率9割5分オーバー。

これがどれだけとんでもない記録なのか――

――そのことを斜陰は理解していなかった。

しかしこの幽霊がとんでもないレベルということだけは理解していた。

※

和谷は溝口斜陰というアイドルのことが好きだった。

その気持ちは、この前の握手会で、また一段と強くした。

——斜陰が俺を支えている

和谷は強い。

しかし終わりのない碁の世界でモチベーションを維持するのは大変だ。

そんな中で和谷が囲碁へと傾倒できているのは、ひとえに斜陰のおかげだった。

もちろんそんな斜陰大好きな和谷は、斜陰の出たテレビ番組はすべて見ている。

囲碁の対局は見た。

といっても、テレビに最初から最後まで映っていたわけではないし、棋譜も公開されていないようだった。

結果も、斜陰の圧勝だったが、すべての石を殺せたわけではなかった。

だから和谷が斜陰の実力に気付かなかったのは仕方のないところだろう。

むしろ桑原本因坊が気付いたことのほうがおかしい。

すべての棋譜を見せられても初心者同士の碁にしか見えないものなのに、その上、対局の様子は飛び飛びで映されただけ。はつきり言っただけ分かるわけもない。

和谷がそれを見て思ったのは、

——うわ、ひつでー碁だ。こっちのおっさんが初段っていうのも嘘だな、こりゃ。

それだけの感想だった。

——シャインちゃんが囲碁やってくれるのはすごく嬉しいし、これ

を見て囲碁を始めしてくれる人もいるかもしれないけど……肝心の碁の内容はな……

しかしそんな碁に影響される者もいる。

※

和谷は指導碁をしていた。

今は夏休み。

棋士にとっては、子供たちに囲碁を教える絶好の機会である。

和谷も例にもれず、子供たちに5面指しで指導碁をしていた。

一つの対局が終わると、和谷は良かった点や悪かった点を指摘していく。

「ここはすぐくよかったね。よく読めてる。あとこの石を捨てる判断もよかったよ」

和谷はなるべく優しく、を心掛けて伝えていく。

「一つだけ気になったのは、このときにここに打ったよね。これはちよつとやりすぎだったね」

悪かった点はどれだけ気になっても一つだけにする。

良かった点は気付いただけ言っただけあげる。

それが和谷のスタイルだった。

そして残りの対局に戻る。

最後の一局も終わった。

同じように良かった点と悪かった点を指摘する。

しかし同じようにやっても、結果はその子次第。

それで上手くないかないときもある。

その女の子は反発した。

「この手は、シャインちゃんならどうするかなんて思っただけです！ 私、シャインちゃんにあこがれて!!」

小学生くらいの女の子は少し泣きそうな眼差しで、和谷を見上げた。

「シャインちゃんに憧れるのは分かるけど……でもこの手はな……」
——なんて言えばいい？ シャインちゃんは弱いから真似するな、とか言っちゃうのか？

和谷は斜陰が好きなので、「憧れるな！」なんて言うことはできない。

「俺もシャインちゃんは大好きだよ」

「だ、だよねっ!!」

「でも、そもそもシャインちゃんはそこまで強いわけじゃ——」

「——ふおっふおっふお」

突然、白髪の老人が現れた。

「おい小僧、その手は面白い一手じゃぞ？ まるであの嬢ちゃんのような、な」

それは桑原本因坊であった。

「桑原本因坊!？」

和谷は驚く。

一方、その女の子は自分の手が認められたことが嬉しくて、

「でしよでしよ!!」

とハイテンションで言う。

——でもなんだ、その言い方は……まるでシャインちゃんが強いみたいなの言い方だな、こりゃ……

和谷には桑原本因坊の言い方が気になった。

「くくく、不思議か？ ならこっからワシが打ってやろう」

桑原本因坊にそう提案されて和谷が断れるはずもなく……

「よろしくお願いします」

そして和谷は負けた。

「まさか……この一手は右下の攻防との兼ね合いになっていたなんて……」

「ふおっふおっふお」

「でも、このとき、俺がここに打っていたら……やっぱり」
「ならそつから打つか？」

桑原本因坊は左目だけを開いて、和谷を見抜いた。
「よ、よろしくお願いします！」

また和谷は負けた。

「そうかこつちばかり気にすると、今度は地合いの勝負に持ち込まれるのか……」

「ふおつふおつふお、だからこの一手は面白いじゃろ？」

「おじいちゃんすごい！ プロに勝っちゃうなんて只者じゃないね！」

その女の子は桑原本因坊とはわからない。
というかプロに詳しくない系の子だった。

その女の子は席に座ったまま、特等席でその対局を見ていた。

もちろん、プロ同士の対局だ。

ギャラリーもたくさんついていた。

子供だけじゃなく、囲碁好きのおじさんなど、いろいろな人がその対局を囲んでいた。

その中で一人――

(和谷って人、プロの中でも弱いほうなのかな？)

男装斜陰が、見ていたのだった。

アイドルの休日、2度目の外出。

斜陰に佐為が取り憑いてから、3カ月ほど経った。

今日は斜陰の休日。

基本的に休日は家に引きこもるのだが、今日は珍しく外に出るようだ。

佐為が取り憑いてから、休日に外に出るのは今日で2度目である。ド陰キヤなので仕方ない。

ちなみに前回出たときは、男装し、芦原と戦い、そしてヒカルと会った。(あれを会ったと表現していいかは、微妙だが)

佐為はあの一件以来、『ヒカルに会いたいです!』と言うことがなくなった。

——ヒカルに私はもう、見えていないのですね。

佐為は諦めていた。

もちろん、佐為にとってヒカルの存在は大きい。

だからといって、佐為がわがままを言っているいい理由にはならない。もう前とは違うのだ。

——今、私はこの子の体を借りて、囲碁を打たせてもらっている。毎日とても忙しいのに、よく打たせてもらっている。休日になるとほとんどずっと私のわがままを聞いてくださっている……これ以上は望むまい。

佐為は幸せだった。

ヒカルとはたくさん打ったが、他の者とはあんまり打たせてはもらえなかった。

でも今はこうして世界中の猛者たちと打ち続けている。

最善の一手の追求。

神の一手を極めるといふ目標がなくなっても、囲碁への情熱は変わらない。

※

『それで、それで、今日はどこへ行くんです?』

(それはね、ここ)

斜陰は一枚のチラシを見せる。

『大盤解説会ですか! ヒカルと行ったこともありますよ! あ、もしかしてヒカルが出るんですか!』

(ううん、違うよ)

『え……じゃあなんですか?』

(それに行きたいのは、大盤解説会じゃなくてこっち)

斜陰はチラシに指さす。

『指導碁……ですか』

(うん)

『ヒカルはいないですね……じゃあなんで?』

斜陰が今日、こうしてやってきた理由。

それは――

(――和谷って人、見てみたいなって思っ

『和谷ですかあ……』

(ドツキリ的な? 絶対面白いでしょ? だってあの握手会に参加するほど、私のファンなんだよ?)

そう。

斜陰と握手をする時点で、ただのファンではない。

なぜなら、斜陰と握手するには通常の握手券ではダメだから。

プレミアム握手券という、通常の握手券の30倍の値段がするものが必要になる。

それでも一瞬で完売してしまうのが、斜陰の人気の凄まじさだったりするのだが……

(あ、でも、別に正体をばらしたりはしないからね?)

『しかし……和谷も、少々天然なところがありますから……全く気付かないかもしれませんよ』

(いいのいいの、面白ければ。休日だし)

そう。

休日だ。

疲れるようなことはしたくない。

なるべく自然体でいたい。

とはいえ素顔でいけば騒ぎになるのは必至なので、男装している。そういうわけでどうしても声を出さないといけないときは、なるべく低い声で喋るつもりである。

まあアイドルとして歌も歌う斜陰にとって、その程度のごことは造作もない。

男装斜陰は、会場の中を堂々と歩く。

そこにアイドルの片鱗は1ミリたりとも見えない。

全体的に黒っぽい格好で、髪の毛はキャップの中にしまっている。顔には大きめのマスクを付けていて、顔はわからない。

その姿は、“少年A”と言った感じで、とても没個性的なものだった。

これを見て天下のアイドルだと分かる人はいないだろう。

そんな男装斜陰は、指導碁のスペースに向かった。

すると何やら人だかりができていることに気づいた。

自分もその輪に入ってみると、中心には和谷と知らない老人がいた。

(あ、和谷だ！ それと……あのおじいちゃん、誰？ 指導碁のお客さん？)

男装斜陰は心の中で聞く。

『違います、桑原本因坊ですよ！ でもまだ本因坊にしがみついているようですね……ヒカルに取られちゃえばいいのに！』

(あんなおじいちゃんもプロなんだ！ それと……本因坊？ そういえば佐為も本因坊だったんだよね？)

『そうです！ あの人が本因坊だなんて、ちよつと嫌です』
(そっか)

斜陰にはよく分からない。

和谷と桑原の対局を見ながら、キャップのつばを整える斜陰。

斜陰はギャラリーの中にひっそりとしたのだった。
そして、対局が終わる。

斜陰でも分かる。

和谷の完敗だ。

(和谷って人、プロの中でも弱い方なのかな?)

『そんなことないですよ! あの老人が強いだけで!』

(本因坊? だっけ。それがあから強いってこと?)

『まあそうですね。本因坊の他にも、名人、碁聖、棋聖、十段、王座、天元というのがあつて、この7つをまとめてタイトルと呼びます。そしてタイトルを持っているのはトッププロの証です』

(へー。つまり上位7人の中に入っているってこと?)

『ええ、今は緒方という者が3冠のようですし、7人もいるわけではありませんが……』

(え? 7つしかないのに、一人で3つも取っちゃってもいいの??)

『そうですね……強ければ、どれだけでも』

斜陰は囲碁の世界のことなんて何も知らない。

今までは、暇な時間にネット碁で佐為に打たせてたくらいである。

「ふおっふおっふお、次の指導碁の時間が迫っているようじゃし、老いぼれはそろそろ退散しようかの」

「桑原本因坊、ありがとうございました!」

「なんのなんの、気にするな」

桑原が去ろうとすると、ギャラリーは道を空ける。

その様子に気付いた斜陰も慌てて、道を空ける。

「小僧、只者ではないな」

桑原は斜陰とすれ違う直前、足を止めた。

「え?」

「ふむふむ、ほお……小娘、と言った方がいいかのう?」

——ッ!? なんて分かったのッ!?

斜陰に衝撃が走る。

桑原のシックスセンスは、斜陰の男装を見抜いただけではなく、その中にただならぬ雰囲気を見つけた。

この雰囲気は——そう、かつて進藤という小僧とすれ違ったときと同じ。

桑原はその記憶を呼び覚まし、尋ねる。

「お主、院生か？」

「いえ、ボクは……ただの一般人です」

「ふおっふおっふお、なるほどのう。面白いガキじゃ」

桑原は「ふおっふおっふお」と言いながら去って行った。

そして斜陰は和谷との指導碁をする。

さつきまでは小学生以下対象だったが、今の時間帯は一般の部のよ
うで、他の人は斜陰以外に2人。おばさんとおじさんだった。

斜陰は右端の席に座ると、和谷が声をかけてきた。

「お前、桑原本因坊と知り合いか？」

いきなりタメ口であった。

和谷の性格上、敬語は極力使わない。

ぱつと見、中学生男子の男装斜陰に敬語を使うわけないのだ。

まあ——もし斜陰の正体に気付いていれば、絶対に敬語を使っただ
ろうが。

しかしそれは桑原がおかしかっただけで、斜陰の男装に気付くこと
はまず、ない。

ちなみに先ほどの桑原の発言で、“小娘”という部分はかなり小声
で言っていた。

だからこそ、周りの人はその部分を何と言ったかは聞き取れてい
ないし、斜陰の男装に気付く人もいない。

そんなわけで和谷が、桑原と斜陰が知り合いかと思っただのも無理か
らぬところであった。

一方、斜陰。

「全然、そんなことないです」

ときっぱり否定する。

「ふーん、進藤みたいなことか？」

「進藤って、ヒカル？」

「ああ、そうだ。あいつ、桑原本因坊に一度すれ違っただけで、目付け

られたんだぜ。ありえねーよな！」

「へ、へー」

斜陰はそう言いながら、内心ドン引きしていた。

(佐為。も、もしかして、あのおじいちゃん、幽霊が見えるの?)

『わ、わかりませんが……でも見えてはいないと思いますけど』

(そ、そうだよねっ)

「あ、そういえば、和谷さん」

「和谷さんって……」

和谷は斜陰の呼び方に、すごい違和感を感じた。

とはいえ、別に注意するようなことではないか。

そう思う。

「まあいつか」

『ユウコさん、こういうときは普通、和谷先生って呼ぶですよ』

(へー、そうなんだ)

——だが、断る！

「それで、どうかしたのか？」

「和谷く、実は私——じゃない僕、囲碁打つの初めてなんです」

「……え？」

もう素の天然がかなり出ちゃっている斜陰は、何も気にせず呼び捨てで話す。

「え？ えーと、今までに一度も打ったことがないってこと？ 初心者？」

「ルールは分かる？」

和谷は驚き、続けざまに聞いた。

しかし驚いているのは和谷だけではなかった。

『え!? ユウコさん!! どういうことですか!?!』

佐為も驚いていた。

(だって、ネット碁で一位なんだよ? そんな人がいたら絶対、騒ぎになっちゃうって! だから今日は私が打つ!)

『でも今まで一度も対局したことないんですよね?』

(まあ、そうだけど……でもどれだけ佐為の対局見てたと思ってるの

！ 私、一度も打っていないけど、かなりの実力だと思っただよね！
『見て学ぶのは、ある程度碁に触れてきた人じゃないと……』

佐為が取り憑いてから3カ月。

暇な時間はずっとネット碁で佐為に打たせていた。

その間、自分では一度も打たなかつたが、もちろんルールは把握したし、石の筋というのも分かるようになっていた。

「僕、ルールは全然問題ないよ」

男装斜陰は言う。

「そ、そうか」

「うん！ 打ったことないけど、多分まあまあ強いと思う」

「それは大層な自信のほどで……」

そして斜陰の初めての囲碁が始まった。

アイドルVS和谷

『ルールはコミなしの定先のようにですね』

(コミなし? あれだよ、黒が勝つには余分に6目ないとダメっていう)

『そうですね、コミは5目半です』

斜陰はコミを含め、ルールを理解していた。

(じゃあ盤面だけで勝てばいいってこと?)

『そうですね』

(それなら楽勝だよ!)

斜陰の黒。

右上隅、小目。

佐為が好んで使う初手だ。

斜陰は覚束ない手先で、コトリと石を置いた。

——うわ、思いつきり初心者の手つきだな……

和谷はかなり弱いと、予測し、それでも碁になるようにするつもりだった。

相手に合わせて、形勢に差が付きすぎないように打つつもりだった。

——ん? 手つきは初心者だが、石の筋は悪くない。もしかして強いのか? ……それに全体的に、手の雰囲気似てる——アイツに。

——saiに。

——そして、shineに。

shineが現れて3カ月、和谷は何度もその棋譜を並べた。そして確信した。shineとはかつてネット碁に現れた伝説の棋士、s

aiだ！と。

それはヒカルも認めているところだったし、アキラや塔矢元名人も『これはsaiだ』と口をそろえて言っていた。

saiのファンだった和谷は、もちろんアカウントが変わっても執着する。

何十局、何百局と見続けた。

——だが、前とは少し違う。なんだ？ 棋風改造でもする気なのか？

和谷は、佐為の中の少しの違いにすら気付いていた。全体的にちよつと凝った手が多い。

遊んでるような、一手一手。

良し悪しよりも、まるで面白さを重視しているかのような一手一手。

そう。

佐為にはすでに神の一手の追求という目標はない。

だからこそ、自由に、多分悪いだろうけど、でもちゃんとやろうとすると難しいような遊びの手を試していた。

——でも強くなっている。このたった3カ月で、saiはさらに強くなっている。

神の一手の追求という目標は、良くも悪くも佐為を縛っていた。

その枷がなくなり、一手一手が自由になった。

そしてダメだと思っていた手の中から、たまに新しい手のヒントが見つかる。

その度に、saiは強くなっていた。

神の一手を諦めた先で、神の一手に近づいていく。

そんなsai改め、shineの変化に和谷は気付いていた。

——そうだ。コイツの一手一手は、saiというよりshineに近い！ これは……!!

謎に包まれた shine。

それは sai でありながら、 sai よりも自由に指している印象だった。

そんな shine はチャットを全て拒否している。

それは斜陰からしてみれば当然のこと。

休日は家に引きこもってゆったりしたいだけなのだ。

佐為が喜ぶと和むからネット碁を打たせてあげているだけで、知らない人とチャットがしたいなんて思わない。

すべてのチャットを拒否し、相手側から何かを送っても、一瞬たりとも斜陰の目には入らない。

ド陰キヤで毎日週6で仕事がある斜陰にとっては当然すぎる。

しかしそれが shine という存在をさらに謎めいたものにして
いるのだった。

「60、70……75！」

「67目だな」

「あー、8目負けかあ……」

「いやあ、でも正直、予想以上に強くて驚いたぜ？」

「でもコミ入れたら13目半負けだよ？ 完敗じゃん」

斜陰は悔しがる。

「いやいや、そもそも俺、本気出してねーからな？ 指導碁だから」

「……あれ？ そういえば、指導碁って何？」

「あのなあ……指導碁受けといてそんな奴、初めて見たぞ」

和谷はこういう風に言いながら、

——まるで進藤みたいだな。

と思う。

それに手の感じが sai に似ているのも、そうだ。

「なあ、ホントに打つのは初めてなのか？」

「う、うん」

「じゃあどうやって囲碁覚えたんだ？」

「えっとパソコンで……」

「ネット碁か？ ネット碁ならやったことあるのか？」

「見てただけだよ」

「あ。わかった。【死神】の碁を見てたんだろ？ だから全体的に手が s a i っぽかった」

「——佐為ッ!？」

斜陰は驚いてしまうが、我に返る。

「こほん。ごめん、僕ちよつと驚いちやった」

「え？ s a i が当てられたことか？ s a i の棋譜とかネットに上がっているからそれ見たりしてたんだろ？」

「……」

（え？ そうなの、佐為？）

『ええ、そうですね。確かにホームページ？ とかいうものに載せられていると、ヒカルが言っていましたね』

（へー）

「なんだ？ 凄すぎて声が出ねーか？ 俺だつてプロなんだぜ？」

「和谷すごいね」

斜陰は本心から言った。

「だろ!？」

「でも、s a i の棋譜は見たことないかな？ あと、さっきの【死神】がなんとかとか、よく分からなかったけど、見たのは s h i n e の棋譜ばかりだね」

天然斜陰は喋る。

そして若干天然な部分のある和谷は、大好きなアイドル、シャインという言葉に引つ張られる。

「シャインッ!? でもシャインちゃんの棋譜は、そもそも公開されていないじゃねーか」

「え？ ネット碁で一番レートが高いやつだよ。シャインっていう」

「は？ 今一番高いのは【死神】だろ？ エス、エッチ、アイ、エヌ、イーで、〃シネ〃って名前のアカウントだよ」

「……は？」

斜陰は驚き、開いた口が塞がらない。

「それだって！　なんで『シネ』なんて読むの！　ひどいよ！　サイ
テーだよ！　和谷、サイテーだよ！」

「ええっ!?　どうしたんだ、急に」

「エス、エイチ、アイ、エヌ、イーでシャインって読むに決まってるじゃ
ん!!　バカなの!?!」

「バカじゃねーよ……」

「そんなだから中卒なんだよ！　英語能力ないんだよ！」

「なんで俺が中卒って知ってるんだよ……」

もちろん佐為情報である。

「あ」

そして我に返る斜陰だったが、ちゃんと声を作ってるべく低い声
で喋っていたことに気付き、ほっと一安心する。

「でも俺の中で、シャインⅡアイドルだからなあ……そっちが正式で
もシャインとは呼ばれないだろうなあ。てかオレが呼びたくねー。

saiには憧れるけど、斜陰とは全然別物だぜ」

そう。

超有名アイドルの名前と被りの時点で、大ファンの和谷には呼びた
くない名前であった。

和谷以外にも斜陰のファンは多い。

そんな人たちが、shineをシャインと読みたいと思うだろうか
？　否、読むわけないだろう。

shineのアカウントが「死神」と呼ばれる理由にはそうした事
情もあった。

「でも【死神】の碁を見ただけか？　ネット碁でも打ったことないのか
？」

「うん、そうだよ」

「まじか、今日がホントに初めてなのか？」

「うん」

「それを見始めたのはいつからだ？」

「えっと、3カ月前かな？　最初はルールはよく分からなかったけど、

たくさん見ていくうちに分かるようになった」

「お前、すげーぜ……始めて3カ月の上に、今まで一回も打ったことないのに——アマ2、3段くらいあるぜ？ 案外、桑原本因坊がお前に目を付けたのも、正しいのかもしれないな！ お前、碁のセンスあるよ」

「そ、そうっ？」

『ええー。私もそう思いました！ ユウコさんは初めて囲碁を打ったとは思えません！』

佐為にまでそう言われて、斜陰は嬉しくなる。

もちろん斜陰は褒められ慣れているが、そういうのは『かわいいー！』とかそういう類のものである。それも薄っぺらい褒め言葉ばかり。

ちゃんと心の底から思われたような、重い褒め言葉。

そして、囲碁という知的ゲームのセンスを褒められるということ。

そんなことは初めてで、斜陰は嬉しくなった。

だからいつもなら褒められても、軽く微笑んで流すだけなのに、勢い余って斜陰は喋る。

「でも、和谷みたいに綺麗な打ち方できないよ？」

「ああ。お前の打ち方、完全に初心者だもんな」

「したかないでしょ……こうかな？」

斜陰は碁石を人差し指と中指で挟む。

そしてそれを碁盤に打ち付ける！

ぺちよん

……ころん

碁石ではなく指が打ち付けられてしまう。

「こうだって」

和谷は何気なく、斜陰の指を取った。

『まあ……』

佐為は和谷の行動に驚く。

「この状態で打ってみな？」

和谷は大好きな超有名アイドルの手と触れ合っているというのに、全く意識していないようだ。

ムツと、斜陰は不機嫌になる。

——そもそも今日はドツキリのためにやって来たんだ。なのに和谷は全く気付く様子ないよね？ 私の大药房なら気付いてもいいと思うのに……

だから——

「——私の手に触らないで」

斜陰は声を作ることなく、素で言った。

『ユウコさん!! 声!!』

(わざとだよ)

そして、和谷は——

——もちろんバツと反応した。

そして斜陰をガン見する。

映るのはマスクにキャップをした少年——だったはずの人。

「またね、和谷」

斜陰は声を作ることなく、笑顔でそう言って、席を立った。

——まさかな……

斜陰の後ろ姿を見守りながら、和谷はバクバクと振動する心臓を押し返していた。

ヒカル編①

「おい、進藤！」

「なんだよ和谷」

「大ニユースだ！ 聞いて驚け！」

棋院のとある部屋。

和谷はハイテンションでヒカルに話しかける。

「s a iだ！ s a iがまた現れたんだ！」

「——佐為!? ……ってどうせネット碁だろ？」

一瞬大きく反応したヒカルだったが、どうせ偽s a iか何かかと思
い、すぐに冷静になる。

「ネット碁だが、違うんだ進藤！ あの強さは間違いない！ s a i
だ！」

「なんだ？ 和谷、ネット碁で負けたのかあ」

「あの強さは間違いなくs a iだ！」

「和谷、みぐるしいよ。確かに負けた相手が佐為なら納得だけどなく」
「ホントなんだって！ 進藤！」

そのときはまだ、ヒカルは全く真剣にとらえる気なんて、なかった。

※

一か月後。

様子が違うようだ。

ヒカルはアキラと、塔矢名人の碁会所で打っていた。

「キミならもう知っているとと思うが、ネット碁にs a iが再び現れた」
「はあくお前もか、塔矢。佐為がいるはずねーだろ」

「……キミが言うのならそうかもしれない。しかしあれは、雰囲気
の違いこそあれ、s a i本人だと僕は思っている」

「はあく」

——もし佐為がいるんだったら、真っ先に俺に会いに来るはずだ。

だから俺にも会わずに、ネット碁やっているなんてありえない！　そもそも俺以外のやつに取り憑くなんてあつてたまるか。

ヒカルは最近、確かにネット碁に強いやつがいるという話は聞いていた。

しかし（どうせもう、佐為はいねーんだ……）という気持ちからいつも話半分で聞いていた。

けれども、アキラの言葉でヒカルは真剣にとらえ始める。

「だが、ネット碁のレートは一柳棋聖を抜いて、一位となった。しかもまだまだ止まる様子はない。このままだと、前人未到のR3000を超すだろう」

「レート3000!？」

「ああ、だから今や世界中のトッププロたちがネット碁の世界に入り込んでいる。特に情報に目ざとい中国や韓国の若手はこぞつてネットの世界に飛び込み、saiに申し込んでいる」

「……」

ヒカルは黙った。

そんなに強いやつがいるのか、と。

そしてそのことを塔矢は確かにsaiだと言っている。

自分の中の佐為を見つけるほどのヤツだ、こいつは。

『昔のキミだ。キミの中にもう一人、いる』

塔矢の言葉が蘇る。

たった2度しか対局していないのに、言い当てやがった。

そんな塔矢が言うのだから、間違いはないはずだ。

——本当に？

ヒカルは若干の恐怖を憶えながらも、衝動的に言い放つ。

「パソコンだ！　すぐに確認するから！」

「あ、ああ」

アキラはノートパソコンを持ってくる。

「早く、早く！」

「ああ、少し待つんだ」

「わかってるって！　それでアカウント名はなんだ？」

s a iではないのは確かだ。

それはヒカル自身が持っているから。

「シャインだ」

アキラは a k i r a という名前でワールド囲碁ネットに入る。

「シャインか……英語なのか？」

もちろんヒカルに英単語の知識はない。

「そうだ。光り輝くという意味の英単語だ」

「光り……輝く？ ひかる？」

ヒカルはじとつと、嫌なものが頬を伝うような感触がした。

——ははっ、まさか、な。

ヒカルの顔色が少し悪くなる。

しかし、パソコンの画面を見ているアキラはそれに気付かない。

「……進藤、簡単な英単語はずだ。中学で英語は習っただろう？」

「忘れたよ、そんなの」

「まあ、一部の棋士たちはシャインのことを“シネ”と読んでいるよ
うだが……」

「シネ？ どういうことだ？」

「エス、エイチ、アイ、エヌ、イーで s h i n e だ。ローマ字読みするとシネと読めなくもない。芦原さんは、シャインちゃんと一緒にするな！ と言つて、断固としてシャインと呼ぼうとはしないが……」

「あはは、芦原さんもアイドル好きだったな、そういえば。和谷も碁に命かけているのか、アイドルに命かけているのか、分かんねーくらいだもん」

かなりの割合の人が、国民的アイドル溝口斜陰の大ファンだという事実。

しかしこれは別に、囲碁界に限った話ではない。

日本全体として、無視できない数の人間が斜陰の大ファンであった。

「だが、芦原さんはアイドルに傾倒し始めてから、かなり強くなっている」

「そうなんだよな！ 和谷もシャインシャイン言い始めてから、一気

に強くなった」

「もしかすると、アイドルのファンになれば強くなるのか？」

アキラは真剣な表情で言う。

ヒカルはその表情にぶぶつと吹き出してしまう。

「塔矢がアイドルのファンになるなんて、塔矢に彼女ができるよりもありえねーって！」

「……それは、どういう意味だ？」

「あはは。それに、村上三段もシャインのファンみたいだけど、全然強くなつてねーよ！」

「……くっ」

アキラはパソコンを操作する。

ちなみにアキラは彼女いない歴〃年齢である。

しかしまだ高校2年生。

——まだまだこれからだ、僕は！ それに今は碁だ！ 碁なんだっ！

そんな風に、できた傷を癒しながら、塔矢はパソコンの画面に意識を傾ける。

「進藤、どうやらシャインがいるようだ」

「本当か？」

「ああ、今は対局しているようだ」

画面が現れる。

shineは白。

レートは3150と表示されている。

相手は韓国国籍で、レートは2769。

かなり強いはずなのだが、shineの圧倒的な強さの前では、いささか力不足感が否めない。

「まだ始まったばかりかみたいだな」

「ああ」

「だけど、この布石は……何？ 見たことないけど」

「シャインは昔のsaiと違って、いろいろと新しい手を試しているようだ」

——ホントに佐為なのか？

ヒカルは疑う。

佐為はいつもバランスの良い布石を好んでいた傾向がある。

佐為の強さの根幹は、バランスの良さだ。

そしてそれを活かすだけの読みと計算。

ヒカルは「表面的な遊びの手」の裏に潜む、shineの実力を見抜こうとする。shineが繰り出す一手一手に注視する。

「その一手は……」

ピキリ……とヒカルの心に何かが刺さる。

「あ……あああああ」

ポチ、ポチと、一手が繰り出されるごとにヒカルの心は揺れ動く。

「——佐為だ。佐為がいる!! なんて? なんてなんだ!? なんて俺じゃない! なんて!!」

ヒカルの泣きわめくような叫び。

それに対して、パソコンは無情にも、shineの一手をヒカルに伝え続けていく。

「佐為だ。自分の中にいる佐為なんかじゃない! 本物の佐為だ!! うわあああああああああ!!!」

「進藤! 待て! 進藤!!」

ヒカルは逃げ出した。

パソコンに映る碁は終盤。

黒の逆転の目はもうほぼゼロというところだった。

※

ヒカルは自宅の自室に戻ってきた。

パソコンはある。

ヒカルは屍のように、暗い部屋の中、パソコンを見続けていた。

「佐為……どうして俺じゃないんだ。誰と一緒にいるんだ。なあ、佐

為!!」

誰も答えてくれない。

ヒカルはシャインがログアウトすると同時に、ベッドに倒れこみ、眠った。

ヒカル編②

「ヒカル！」

「なんであかりがうちにいるんだよ」

ヒカルは自室から降りてリビングに向かうと、幼馴染のあかりがいることに驚いた。

彼女は葉瀬高校2年生で、その制服を身にまとっている。

あかりが振り返ると、短いスカートが少し浮いた。

「今日は囲碁部に来るって約束だったでしょ？」

あかりは囲碁部に入った。

葉瀬高校には囲碁部はなかったので、あかりが作った。

しかし今ではなぜか、部員が13名もいる。

なぜか上級生もいるが、もちろん部長はあかりである。

そんな中で、あかりは幼馴染特権として、頻繁にヒカルを呼んでいた。

実際、まあ、ヒカルは高校に通っていないので、かなり暇なのだ。だから週一で行くことくらい、むしろ気分転換になってプラスくらいだった。

そして今日は、あかりに呼ばれた日だった。

「……ああ、そういうえばそうだったな」

一方のヒカルは本当に今、そのことを思い出したかのように言う。

「……わかった、明日行く。それでいいだろ？」

ヒカルは佐為がいるというだけで、もう自分が碁を打つ意味が分からなかった。ある意味、聞き分けがいい状態になっていた。

だからヒカルはいつもと違ったし、当然あかりには予想外となるわけ。

「えっ」

とあかりは困惑した。

そして冷静に思う。

「でも明日って、大手合の日じゃなかったっけ？ たしか相手は、冴木

五段？」

「なんであかりがそんなことまで知っているんだよ」

「別に？　ちよつと週刊碁を見ただけだよ」

そして流れる沈黙。

いつもの2人なら、このくらいの沈黙気にならないはずなのだが、この場合は違うようだ。

——ヒカル、何かを隠している？

あかりの疑惑が場を気まずくしていた。

「……え？　それで……大手合の日じゃなかったの？」

「あはははははは、大丈夫だって」

「急遽、変更になったとか？」

「ああ、そんな感じだ」

ヒカルの言葉に、あかりは割り切れないものを感じていたが、それで納得してしまうのだった。

※

塔矢はここ最近、ヒカルが碁会所に顔を出していないことが気がかりだった。

「進藤は手合いにも来ていないのか!？」

手合いにも来ていないことを知り、驚きをあらわにする。

「ああ、これでちょうど1週間だぜ、あいつ。冴木さんとの手合以来、一度も来ていない」

と和谷。

「みんなして、進藤、進藤って。そんなことは2年前にもあったじゃないか。前みたいに素知らぬ顔で戻ってくるさ」

越智はあまり気にしていないようだ。

「だが、どうしたんだらうか？　前の時は、俺と一局打ったとき、何かが吹っ切れたようだったけど」

伊角が言う。

「どうせ、彼女にでもフラれたんだろ？」

「彼女？ 進藤にいるのか？」

和谷と伊角の話が続く。

「ああ、前、明日うちに来ないかって誘ったら『明日は囲碁部に行くから無理』って」

「囲碁部？」

「あいつには女の幼馴染がいるんだよ。で、その幼馴染が作った囲碁部に行くってさ。週一くらいで行ってるぜ、あいつ」

「はあ」

「しかも一回進藤ん家行ったとき見たんだけど、その子、本当にかわいいんだぜ！ あのかわいさなら間違いないくクラスでトップとれるレベルだぜ？」

「でも、囲碁部に遊びに行っているだけだろ？ 彼女って決まったわけじゃ」

「いいや、彼女だ。だって週一だけ？ いくら幼馴染だとはいえ、週一で自分のためにもならない囲碁部に遊びに行ったりするか？」

「まあでも、プロになっても今までであった人間関係を捨てないのは、良いことじゃない？」

「そういう話じゃねーよー」

伊角はあまりヒカルのことを悪く言いたくないようだが、和谷に一蹴されてしまう。

「……あーあ、でも碁なんてどうでもいい！ っていうくらいの失恋か、考えられねーよな。だって俺たちって碁のことを考えない日なんてないだろ？」

和谷の中では、失恋説で決まっているらしい。

「まあでも、進藤も失恋くらいすぐに吹っ切れるだろからな、ずるずる引きずるタイプでもなさそうだし。素知らぬ顔で戻ってくるっていうのは、俺も越智に賛成だぜ」

一方、アキラはその和谷の言葉に気に入らない部分があった。

進藤が「碁なんてどうでもいい？」

「……進藤には深い事情があるはずだ。失恋なんかで休むような奴じゃないんだ！」

「じゃあ、なんだ？ 他に何かあるんだ？ 秀策めぐりとかか？」

「それは分からないが……進藤は失恋なんかで、碁をないがしろにする奴じゃない！ 進藤の碁への情熱は、僕と同じ！ 僕の生涯のライバルなんだから!!」

と熱くなる。

「はあ……進藤には同情するぜ。で、失恋を“そんなこと”扱いする塔矢くんには彼女はいるんですか？」

と和谷。

そしてその発言はクリティカルのように――

「……」

塔矢は顔を赤くしてうつむいてしまう。

「あつれく、もしかして、色恋沙汰なんて全くしたことがないのに、“そんなこと”扱いしたんですか？」

「……」

塔矢は顔を赤くしたままだ。

「おい、和谷！ そんなに塔矢をからかうな！」

「けつ、それにしも……わかんねーな、あいつ」

そうやって棋院では的外れな議論がされていた。

ヒカルの実情を知る者はいない。

※

ここはネット碁の世界。

ここでは日々猛者たちがしのぎを削っていた。

そんな中に、一人、Hikaruというアカウントがその戦いの渦中に潜り込んでいた。

その新しいアカウントは強い。

次々に強敵を倒していく。

圧倒的な早碁。

圧倒的なノータイム指し。

早々と相手を投了に追い込み、レートをもものすごい速度で上げてい

く。

——待つてろ！ 佐為！

ヒカルは佐為と一局、相まみえるため、ネットの世界で戦っていた。

——一局打てば！ 一局打てば、何か分かるかもしれない！

※

ついに来たヒカルと佐為との戦い。

それは佐為復活から2カ月が経とうとしていたころだった。

「佐為！ やっとお前と戦える……」

ヒカルの黒。

佐為の白。

ヒカルは待ちきれなかった。

この時を待ち望んでいた。

——佐為！ なぜお前がおれの前から消えたのか、そして別のやつ
のところまで今打っているのか、教えてもらおうぞ！

ヒカルはノータイムで進めていく。

しかしそれは佐為のほうも同じ。

斜陰も驚くほどの早碁。

否。

正確にはそうではない。

佐為は、ヒカルの手を見る前からもう斜陰に次の手を示していたの
だから。

だからこそ、斜陰は驚いていた。
相手の手を見ずに次の手を指し示していく。
それゆえの圧倒的ノータイム。
しかしそれは相手も同じようだ。
互いにノータイムが続く。

斜陰は疑問に思い、「これって……」と声を漏らす。

『これは、棋譜並べなんです』

佐為は楽しそうに答える。

『以前、ヒカルとは每晚打っていました。何百、何千という数のヒカルとの碁。その膨大な数の碁の一つなんです、これは。私は今でも覚えていません。ヒカルのおじいちゃんに買ってもらった碁盤で、初めて打った碁。院生になった頃の碁。プロ試験の最中の碁。そして、プロになってからの碁。すべての碁の石の並びを今でも鮮明に覚えていきます』

——相手はヒカルさんなんだ。

斜陰は思った。

——まあ、アカウント名そのまんまだし、そうかと思ってたけど

……

斜陰は佐為の手を素早くクリックしていく。

『む——ヒカルの手が止まりましたね』

いつまでも続くかと思われたノータイム指しが、突然終わった。

※

やっぱり佐為だ。

もちろん今までの対局を見てきても、佐為なのは分かっていた。
でも俺のことなんて、まるでみようとしないし、もしかしたら佐為は俺のことなんて忘れて新しい奴と楽しんでいるかもなんて思っていた。

「ちゃんと覚えてくれたんだな……幽霊なのに」

声を漏らすと、ヒカルは自分の目から涙が零れそうなことに気付いた。

ヒカルは涙をグツと堪えて、盤面を見据える。

——こつからは、佐為の知らない俺だ！ この2年間、遊んでいたわけじゃねーんだ!!

ヒカルは棋譜にない手を放った。

※

『はずれましたか。勝負はここからですね』

「佐為はその一手を冷静に見る。

パツと見は普通の手。

しかしプロレベルから言うと、若干ぬるそうな手でもある。

だが深く深く読んでいくと、うまい咎め方がない。

単純な咎め方をする、かえってこつちが悪くなってしまう。

『ふふっ、いかにもヒカルが好きそうな手ですね』

相手に誘って打たせるような、一手。

しかし悪手ではない。

以前のヒカルのそのような手は、大抵悪手ばかりだった。

——ヒカル、成長しましたね。

佐為は感慨に耽る。

——本当に、ヒカルの成長には驚かされます。やはり、私がヒカルの元に蘇ったのは、ヒカルのため。

佐為はその思いを深め、そしてヒカルとの碁を楽しもうとする。

一方、斜陰は二人の邂逅を黙って見ていた。

邪魔にならないように、声を出さない。

パソコンの画面を見ていると、しずくが、落ちる。

斜陰は佐為から零れる涙に気付いた。

気付いてないよ、気付いてない。

斜陰は見て見ぬふりをするのだった。

ヒカル編③

佐為とヒカルのネット上での再会。
それから一カ月の時が過ぎようとしていた。

「昨日もs a iと進藤が打ってたぜ」

和谷が住むアパートの一室で、和谷はぼやくように言った。

「でも、失恋ではなかったみたいだね」

と伊角が言う。

「うるせー。にしても解せないよな。今回のs a iはいつも一番レートの高いやつとやっていた。だからこそ、みんなs a iとやるために、レート上げてたつていうのに」

そう。

今回のs a i——つまり、s h i n eは、常に一番レートの高いやつとやっていた。

だからこそ、世界中の強者——日中韓のプロ棋士がこぞってワールド囲碁ネットに参加してレートの奪い合いをしていたのだ。

それなのに最近のs a iはおかしい。

大抵がH i k a r uと打っている。

H i k a r uよりもレートの高いアカウント——例えばo g a t a s e i j iなんか居ても見向きもせず、H i k a r uとばかり打っている。

この一カ月で何十という数を打っている。

もしかしたら100局近いかもしれない。

もちろん、H i k a r uというアカウントが進藤のことなんてすぐわかった。

「けっ、やっぱり、進藤とs a iには何かあったんだ」

「弟子とかかな？」

「そうだろうな……最初はs a iが子供だと思った。その子供は進藤のことだったんだ」

和谷は確信を持ったように言う。

「でも、進藤の碁では……」

「ああ。つまり、s a iが子供ってというのは、半分正解で半分間違っていたってことだ。s a iは何かしらの原因で、一人では碁ができない。だから進藤が夏休みの時に、現れたんだ」

と和谷は推理する。

「一人で碁ができないというのは、何故なんだろう?」

「なんかの病気とかなんじゃねーの? で、進藤がネット上で打っているのは、今は海外の病院に行っているからとか? で、別の弟子の手助けで、今は碁を打っているとか?」

「国籍はJ P、日本だけだ」

「あー、そんなの知るかよ!」

和谷の推理は鋭いのだが、細かいところを突っ込まれると弱かった……

※

ここ一カ月ほどは、s h i n eは、ほとんどH i k a r uとばかり打っていた。

斜陰は、ワールド囲碁ネットにアクセスするといつでもH i k a r uがいることに疑問を抱く……

「そうだ、佐為。今度の休み、ヒカルさんが出るイベントがあるみたいだけど、行ってみる?」

と何気なく、言ってみる。

『いいんですか!?!』

「いいよいいよ」

『なんと、お忙しいのに……ユウコさんは聖母のごとき優しさを持っておられますね』

そこまで言う!?

でも、佐為にとってヒカルはすごく大事なことかな。

そして迎えた休日。

とある囲碁イベントに出向いていた。

もちろん服装は男装スタイルである。

この参加棋士は数名いて、その中に進藤ヒカルの名前もあった。ついでに和谷の名前も。

平安な服装の佐為は、そわそわと周りを見ている。

少年斜陰もきよろきよろとしてみるが、ヒカルの姿が見当たらない。

「あ、和谷〜」

代わりに和谷を見つけてしまったようだ。

手を振って駆け寄っていく。

「お前はいつぞやの中学坊主」

「中学坊主？ 僕のこと？」

「そりゃそうだろう」

と和谷。

「和谷〜、ひどくない？ 僕は中学生じゃないし」

「えじゃあ、えっと」

と迷う素振りを見せる和谷。

なら、高校生か？ でも、この生意気さなら小学生の可能性も——と逡巡する。

「なんで迷ってるの!？ 年齢的には高校一年生だよ」

「見えねー」

「むう……」

一方、斜陰は、和谷の明らかに下にみる態度に、ちよつと不満だった。

最後に別れた時は、私の本当の声を聞いただけで顔を赤くしていたくせに、と思う。

「そういうえば、僕の名前知らないでしょ？ ユウって呼んでくれればいいから」

斜陰は敢えて、本名ほぼそのまま。ユウコだと女性バレしてしまうので、ユウと名乗る程度の違いにした。

「はいはい、ユウくん」

特に気にせず、明らかに年下扱いしてくる和谷。

「ユウでいいよ、和谷」

「はいはい、ユウね」

名前呼びさせても、全く動じた様子もなかった。

いや、私を男と誤っているだから、当然だけど……

「むう……」

だが、斜陰は不満に思った。

せっかく大好きなアイドルの下の名前を呼び捨てで呼んだというのに、何もなさすぎない？

んー、ちよつともやもやするけど、まあ、いいや。

本題に入ることにした。

「ヒカルさんって、どこにいる？」

今回の目的はそれだ。

和谷は指導碁で来ているわけでもないみたいだし、本当にヒカルさんを見に来ただけだった。正確には佐為にヒカルさんを見せに、と言った方が正しいけど。

「お前、進藤目当てかよ……」

「だって、和谷の指導碁、今日ないし」

「うわっ」

いきなり頭を帽子の上から、押しつけるように斜陰の頭を触った和谷。

「へいへい、また指導碁来てくれるのを楽しみにさせていただきますよつと」

とおちやらけて言う。

「それで進藤だが——」

といきなり、真剣な表情になる。

「——多分、今日も来ねーよ」

「え？」

「あいつ、一カ月前から手合いもイベントも全部さぼってんだ」

「え？ 病気、とか？」

と斜陰は咄嗟に答える。

「ちげーよ。元気にワールド囲碁ネットをやる時間はあるんだ」

「確かに」

斜陰がログインすると大抵、H i k a r uはいて、佐為と打っていた。

「和谷、知ってたんだね」

「そりやs a iを追わないわけないだろ？ 進藤だつてすぐに分かったぜ」

そんなに簡単に分かるものなんだね。

確か、ヒカルと一番関わりがあつた人だつて、前に佐為が言つてたし、当然なのかな？

「というか、ユウ。お前が知っていることの方が驚きだぞ？」

「え？ いやでも僕は囲碁はワールド囲碁ネットを見てただけだから」

「あー、確かに。そう言つてたなお前。進藤も名前そのままだし」と和谷。

そこで、佐為が突然、突拍子もないことを言い出した。

『ユウコさん、ヒカルを見に行きましょう！』

（え？ 見に行くって？）

『ヒカルの家に行くのです！』

※

佐為に案内され、少年斜陰は住宅街を歩く。

『ヒカル……どうしちゃったんでしよう？ 一カ月前つてことは、私と打ったあたりからですよね』

（まー、佐為のせいじゃないよ。もう子供じゃないんだし）
『で、でも……』

佐為はあわあわと落ち着きがない様子。

——進藤！ 出てくるんだ進藤！

遠くから声が聞こえる。

——クソッ！ 明日も来るからなっ！

ズカズカズカと不機嫌を露わにしながら、おかつぱへアの男が歩いてくる。

『搭矢アキラ……』

(つて誰?)

『ヒカルの目標であり、ライバルでもあった人です。ヒカルの目覚ましい成長は彼のおかげでもあります』

塔矢アキラとすれ違い、入れ替わるように斜陰は家の前に立った。

(ここがヒカルさん家?)

『ええ、懐かしいですね』

ピンポンと鳴らす。

「はーい……あら、またお客さん？」

お母さんらしき人が出迎えてくれる。

「ヒカルさんに佐為が来たって伝えてもらってもよろしいですか？」

「サイ……さんですね。ヒカルー、サイって方がお見えになつて——」

その時、ものすごい慌てたような音がした。

ドタドタドタつと、ヒカルさんが下りてくる。

「さ、佐為？ 佐為なのか!？」

ヒカルさんは肩で息をしながら、客人を見た。

一方の男装斜陰は、帽子のツバを軽く押さえながら、コクリと頷くのだった。

ヒカル編④

斜陰はヒカルの部屋にお邪魔していた。

本当に佐為がいるか確かめたい、一局打てば分かる、とお願いされて対局することになった。

斜陰はただ佐為の導くままに、石を置く。

ヒカルは、パチリと石を打つ。

そして、斜陰はコトリと置く。

親指と人差し指でつまむように持って、置く。私だけが初心者みたい……実際、私は初心者だ。和谷は才能あるって褒めてくれたけど、この二人からみれば、一人だけ赤子が混じっているようなものかな？ 佐為もヒカルさんもまっすぐに盤面を見ている。

……私も、盤面を見ているのは同じ。

けど、この中で私だけが傍観者だ。

ヒカルさんの目には、佐為しか映っていない。

佐為の目には、ヒカルさんしか映っていない。

盤面を通して、互いが互いの姿を見ているんだ。

斜陰は、この場で自分だけが、ひどく浮いているような気がした。けれど、どうしてだろう？ 不思議と嫌な気分ではなかった。佐為に導かれるまま、石を置いていくのは、心地よかった。

しつかり寄せまで打ち切って、白と黒の宇宙は完成した。

終局だ。

ふとヒカルの方を見ると、目線は盤上に注いだまま泣いていた。

「……佐為」

ぽつりとヒカルは呟く。

目の前に佐為がいることを理解して。

「佐為っ！ なんていなくなっただよ！ 佐為ー！」

ヒカルは、斜陰の存在なんて気にせずに話し続ける。

「お前がいなくなっって、広島まで行ったんだぜ？ それで、お前が本因

坊秀策だった時の棋譜もすごい並べて！ この間なんか、公式戦で塔矢に勝ったんだ！ あと、お前と打った棋譜も全部、紙に書いたんだぜ？ まあ、公開はできないけどさ。それと、そう和谷がさ——」
そう、ヒカルは佐為の消えた2年間であったことをずっと喋り続けた。

そして、ひとしきり話したところで、
「話すことがいっぱいだ……」
と締めた。

佐為はヒカルの持つ扇子を指し示す。

(……佐為?)

『ちゃんと受け取ってくれたのですね……』

佐為はしみじみと呟くように言った。

「なんか言えよ！ 佐為！」

しかしその声はヒカルには届かない。
しようがない。

斜陰はヒカルの持つ扇子を指さした。

「ちゃんと受け取ってくれたのですねって、佐為が」
「っ！」

ヒカルは自身の持つ扇子に目線を落とす。

「……夢の中で扇子をくれたのは、ただの夢なんかじゃなかったんだ」

ヒカルは、右手に扇子を握りながら、涙を流した。

『私だって、消えたくなかった。ヒカルの傍にいたかった。けれど、役目は終わったんです』

佐為が言った。

これもヒカルさんに伝えるべきかな。

「それと、佐為も消えなくなかった。ヒカルさんの傍に居たかったって言っているよ？ 佐為が私に取り憑いた時も、ヒカルさんを調べてあげるって言ったらすごく喜んでたし」

斜陰は言った。

「そっか……そりゃそうだよな！」

ヒカルは吹っ切れたように顔を上げた。

そしてその後、2局目が始まった。

しかしそれは対局と呼べるようなものではなく、棋譜並べだった。ヒカルも佐為も丁寧に一手一手確認するように打っていく。

斜陰もなるべく丁寧に打っていった。

『これは塔矢行洋との一戦です。この碁をヒカルに見せるために、神は私に千年の時を永らえさせたのです』

佐為がこの棋譜並べをした理由とは何か？

もちろん、ヒカルがこの碁を覚えているか確認するためなんかじゃない。

佐為はこの碁を通して、ヒカルに問うべきことがあったからだ。

パチリ。

コトリ。

黒のヒカルと、白の佐為。石が盤上を少しずつ埋めていく。

そしてあと少しで終局というところで、ヒカルの手が止まった。

盤面はぱつと見、白が僅かに勝っているように見える。

実際、黒を持っていた塔矢行洋は、この碁に敗れ、プロ引退までしたのだ。

でも実は、この局面、唯一の逆転の一手があった――

――佐為は問いかける。

過去に縋り、本来の棋譜と同じように負けるのか。

未来に向け、神の一手を目指すのか。そして、佐為に勝ち、佐為を超えるつもりがあるのかを。

ヒカルは、盤面を見つめる。

その目に迷いはなかった。

「俺だって神の一手を目指すんだ！」

黒石が力強く、放たれる。

それは、本来の棋譜にない手――オキだった。

そんなヒカルの一手に、佐為は満足げに頷いた。

……実は、佐為がこの碁を並べたのには、もう1つの理由があった。佐為は斜陰の方を覗き見る。

——ユウコさんにも感じるものがあつたようですね。

斜陰は佐為に導かれ石を打つ度に、とても美しい盤上の宇宙を感じ取っていた。

佐為の千年の碁の集大成とも言えるものに、ただのゲーム以上の何かを感じたのだった。

「ごめんな、付き合わせちゃって」

気付けば日は落ちていた。

棋譜並べをした後は、佐為とヒカルは何局も打ち続けた。

たまに斜陰が佐為の言葉を伝えて、ヒカルが泣く。

そんな風に時間は過ぎていった。

「佐為もごめん、心配かけるような真似をしちゃって。俺、手合いに出るよ。そしていつか佐為のように、未来に碁をつなぐんだ」

ヒカルさんの言葉に、佐為は満足そうに頷いた。

『でも、1つだけ。ユウコさん、伝えてもらってもよろしいですか?』
(何?)

『私が見ただけでも、塔矢アキラや和谷に迷惑を掛けました。おそろくもつと。ですから謝るべきは、現代に生きる彼らに謝ってほしいんです』

そして、斜陰は最後にその言葉を届けることにした。

「ヒカルさん、佐為が謝るべき相手は自分じゃないと、そう言っていますよ」

「っ！ そうだなっ！ よっしや！ 善は急げだー！」

ヒカルはバタバタとリュックサックを持つてくる。

「母さくん、ちよつと行ってくる〜」

「ちよつとヒカル、こんな時間からどこへ〜?」

「じゃあな……っつと、名前も聞いてなかったな」

ヒカルは、男装斜陰の姿を見た。

斜陰はしかし、首を左右に振る。

「まだ、佐為が必要なのか？」

斜陰は尋ねた。

今日の私は佐為の碁を見せただけ。『私』という存在は、二人の会話に参加していなかった。

だから、今ここで私の名前を答えることは、佐為のオマケとして答えることに他ならない。斜陰の返答はそのような意味が込められていた。

ヒカルは首を振る。

斜陰の意思は伝わったようだ。

そして、ヒカルはニツと笑った。

「佐為！　またネット碁やろうぜ！　それにお前も、プロを目指すなら師匠になってやってほしいぜ？」

そう言っつて、ヒカルは飛び出ていった。

……へ？　プロ??

確かにヒカルさんはプロになったかもしれないけど、私がプロになることは絶対はない、と斜陰は思う。

「あの子は……最近は落ち着いてきたかと思っっていたけど、まだまだねえ」

とヒカルのお母さんがやってきて、ため息をつく。

ヒカルは行った。

斜陰も帰ることにした。

「僕も失礼します」

「ごめんね、せっかく来てもらったのに」

「いえ、気にしないでください」

これは社交辞令じゃない。

本心でそう思っている。

ヒカルさんは吹っ切れたみたいだけど、それは佐為も同じなんじゃないかな？

佐為の消え方は、双方にとって不満の残るようなものだった。

それが今日、溶けてなくなった。

『さあ、ユウコさんもプロを目指しますか?』

佐為が見たこともないような挑戦的な笑みを浮かべている。

まさか佐為までそんなこと言ってくるとは。

(佐為だって、もう終わりでいいの? 神の一手、目指してもいいんだよ?)

秋の夜。

私と佐為の関係は再スタートしたような、そんな気持ちだった。

アイドル、人生2度目の碁

碁を打ちたい。

あれからというものの、碁を打ちたくて仕方ない。

けれど、なんとなく、ネット碁の有象無象とはやりたくなかった。もしひどい碁を打たれたら？

それでこの気持ち汚されたら？

なにより、佐為とヒカルの碁を汚されるようで。

もちろん、佐為と打つのは選択肢の一つではあった。

でも、斜陰は、なんとなく、それも嫌だった。

というか、一人二役とか、普通はあんまりやりたくないだろう……ヒカルだって、最初始めた時は、佐為の打つ場所がないからという理由で仕方なくだった。

「ということ、最近碁にハマっているということですが、何かキツカケとかあったんですか？」

とあるテレビの番組で、MCに質問される。

今までは、この類の質問は困っていた。

佐為という碁が大好きな幽霊が現れてくなんて言えるはずもないし、適当な嘘を言うしかなかった。

けれど、今回の斜陰は本心で答えることができた。

「やっぱり、美しくて広い宇宙のようだと思うからです」

「というと？」

「あの19×19の盤上に、無限の宇宙が——無限の可能性が広がっている。それはとても美しいことだと思っただんです」

脳裏に佐為とヒカルの石の並びを思い浮かべながら、斜陰は答えた。

「そうなんです。そんな斜陰さんにはですね、今回ゲストが来れます。どうぞー！」

ぶしやー。

わー、ぱちぱちぱち。

現れたのは、斜陰よりも少し年上——正確には3つ年上の美人の女性、奈瀬明日美だった。

『奈瀬じゃないですか!』

(うわっと。佐為、知ってるの?)

『彼女もまた、ヒカルや和谷と同じくプロを目指し切磋琢磨した者です』

(へー、じゃあ今はプロってこと?)

『そこまでは……私が消えた時にはまだ院生でしたが』

(院生って?)

『プロの卵のことです』

と斜陰と佐為はやり取りする。

そして、奈瀬がプロかどうかはすぐに分かった。

それはMCが奈瀬の紹介をしたからだ。

「えー奈瀬明日美さんは現在、囲碁のプロを目指しておられます。ここでちよつと囲碁のプロになるには、ということでお話させていただきます」

パネルを取り出して、MCは説明する。

囲碁のプロ試験は夏に毎年1回行われ、その上位3名だけがプロになれるとか。

その内容に斜陰は驚く。

(毎年3名だけ!?! そんなに厳しい世界なの!?!)

『ええ』

佐為は同意する。

「——奈瀬さんは前は6位ということで、残念ながらあと一歩届かなかったのですが、その実力はプロと遜色ないものもあります」

MCはそう言った。

『そうですか、奈瀬はまだプロにはなれてないのですね……』

(でも、テレビもなかなかやるじゃん! 次の休日まで待つしかないと思ってたけど、今日碁が打てるとは!)

斜陰は内心テンションが上がる。

ついでに奈瀬に対する好感度も勝手に上がっていく。

「今日は私のために来てくれて、ありがとうございます！」

斜陰は本心からのアイドルスマイルで、奈瀬に感謝を伝える。

「か、かわいい……」

本気100%のアイドルスマイルを喰らった奈瀬は、ついそう言うってしまう。

「ありがとうございますっ！ 奈瀬先生、もしくは明日美先生とお呼びしても？」

「え、あ、はい。どちらでも大丈夫です」

「では明日美先生とお呼びしますね！」

斜陰、ウツキウキである。

「斜陰ちゃんも喜んでくれたようで、頑張つてなるべく年の近くて碁が強い人を探した甲斐がありました」

MCがそういうと、テレビスタッフたちが、わはは、と一斉に笑う。その様子に、奈瀬だけがビクツと反応する。

奈瀬はテレビ慣れしていないので、当然であった……

特に置石なしで、コミありかコミなしかも言われぬまま、対局は始まった。

斜陰は黒、奈瀬は白を持つ。

——右上隅、小目！

斜陰は、佐為がいつも用いている初手を採用。

一方の奈瀬。

碁盤の前に座ると、精神がだいぶ落ち着いていくことを自覚した。やっぱり自分は碁打ちなんだね、と内心苦笑いを浮かべながら、反対側の隅の星に打った。

そして、右下隅に小目と、斜陰。

結局未だ持ち方は、初心者つまむような持ち方だった。

奈瀬は思う。

囲碁好きって聞いてたけど、持ち方は思いつきり初心者ね……
とりあえず、ちゃんと碁になるようには頑張ろう！
と。

がしかし、数手後に疑問を感じ、20手ほど進めばおおよその力量
が分かってている。

——強い。少なくとも初めてちよつとの実力じゃない。この子、子
供の頃から囲碁をやっていたのかな？

奈瀬は対戦相手の少女を覗き見る。

その視線は真剣そのものであると同時に、とても楽しんでいる様子
が伝わってくる。

奈瀬が一手を放つと、斜陰は面白い一手を返してくれる。

なんでそんなつまらない碁を打ってるの？

指導碁を打っている自分に、まるでそんな風に問いかけて来ている
ようにすら錯覚する。

思えば、最近碁を楽しめているのだろうか。

高校を卒業し、院生ではなくなってしまった。

けれどプロになることを諦めきれず、進学も就職もしないで碁に打
ち込んだ。

そして今年のプロ試験。

このタイピングで合格できればまだ傷は浅かった。

伊角さんと同じタイピングだし、全然胸を張れると思っていた。

でも、落ちてしまえば、地獄だった。

結果も6位。

昨年の7位から、一応上がってはいるが、まだ合格には遠い。

親には少しくらいはバイトしなさいと言われてしまったが、まだ甘
やかされているという実感はある。

でも、それも来年まで落ちるようなら、話が変わってくるだろう。
もう19歳。来年受かっても20歳でプロデビュー、本当にギリギ

りだった。

だから、囲碁を楽しむとか、そんなのは関係ない。まず、受からないと始まらない。楽しむなんて、どうだっていい――

――盤上に黒い石が放たれる。

はっとした。

一目で好手と分かった。

……まずい。

その手が成立してしまえば、5目……いや、10目は損をする。しかしうまい咎め方もない。

嫌な気分になった。

たった一瞬、この一瞬だけではあるが、こんなアイドルの女の子に上回られた。

すべてを持った子。

でも、碁だけは負けなくなかった。

もちろん指導碁なんだから、今の好手だって別に問題はない。

もしその好手を見つけれなかったら、終わった後で教えるつもりだったとでも言えればいい。

でも、そうじゃないんだ。

一瞬でも上回られたと心が認めてしまっていた。

だから、私のプライドが許さなかった。

何より――

奈瀬は斜陰を覗き見ると、相変わらず本当に楽しそうなことが分かった。

――楽しそうに打っていることが一番気にくわなかった。

奈瀬は本気で打つことを決めたのだった。

*

やってしまった……

奈瀬は後悔していた。

何、年下相手にムキになっていたのだろう。

アイドルにしては強い言っても、奈瀬の本気に耐えられるはずもなかった。

それでも、斜陰は最後まで楽しそうに打っていた。

——そもそも、楽しそうなのは演技だったの？

奈瀬は思う。

そりや、アイドルがつまらなそうに碁を打つわけがなかったのだ。奈瀬が本気を出してから、斜陰の地になるはずだったところがいくつもなくなっていた。

そんなことが繰り返されれば、誰だって楽しいはずがない。

なのに、この子は自分の仕事を全うした。

私にはずっと楽しそうにしていたようにしか見えなかったほどに。

「あの、えっと……ごめんな——」

「——すごいです!!」

しかし、奈瀬の謝罪は、斜陰の言葉にかき消された。

「明日美先生！ 本当に強いんですね！ 美人で強いなんて最強だと思えます！」

「え、えーと。でも、本当に強くて、ちよつと本気出しちゃつてごめんなさい」

「いえいえいいんです！ 前半は指導碁、後半は本気の明日美先生。一局で二局分も楽しめましたし！」

斜陰は奈瀬の手を取った。

「明日美先生はどうでしたか？ 私との碁は楽しかったですか？」

奈瀬は、思い返す。

本気の私相手に、手が縮こまることなく、工夫した一手で返してきたことも。

面白いと感じる手もいくつもあった。

そして、その手にどう返すかを考えるのは——そう、悪くなかった。

「ええ」

「それは良かったです」

と頷く斜陰。

「斜陰、さんは……子供の頃から囲碁をされて？」

奈瀬は、気になっていたことを聞いた。

「いえ、全然初心者ですよ？ 始めたのは3か月か4か月前つてくらいです」

「えー!? それでこんなにも打てるんだ！ えっと……普段はプロに習ったりとか？ よく打つんですか？」

奈瀬はさらに質問を重ねた。

「いえ、普段はネット碁で観戦ばかりしています。実際に打つのは今日で2度目ですね」

と答える。

「は、え、は……？」

奈瀬は開いた口が塞がらないのだった。

アイドルの休日、和谷く

斜陰にとって、人生2度目の碁は、非常に楽しいものであった。奈瀬は演技だと思っていたが、そんなことはなかった。ただただ、子供のように自分の気持ちに正直になっただけであつた……

(楽しかったな)

『ええ、私もユウコさんが楽しそうであつたですよ』

テレビ収録が終わり、佐為と心の中で話す斜陰。

(また、明日美先生と打ちたいな)

『それならご自宅かどこかに呼べばよろしいかと』

(え!! そんなことできるの?)

『ええ、ヒカルと切磋琢磨した越智という者は、よく自宅にプロを呼んでいたとか』

(そうなんだ! なら次の休日は明日美先生を呼んで、打ってもらおう!)

そうして、マネージャーをお願いして、手配してもらおう斜陰。

数日後。

「斜陰ちゃん、例の囲碁の先生をお呼びしたいという件だけど、断られちゃったわ」

「……え?」

マネージャーにそう言われて、驚くが、普通に何か予定があつたのかもしれない。

そう思つて、斜陰は一か月分の休日すべてに、依頼するのだつた。(今更だけど、私、一カ月に休み5日っておかしくない?)

『ユウコさんは働き者ですね』

(いや、心外なんだけど? それにこれでも前より休みが増えてるつていうんだから意味わかんないよね……)

ひどいときは休みが月イチとか月ゼロなんてこともあつたのだ

……

最近は多少は改善されたものの、前よりマシとは思えなかった。

(あと一年、いや半年でアイドルなんてやめてやるから！)

斜陰は心の中で、ファンが聞けば悲鳴を上げそうな決意をしているのだった。

*

(それで今日はどうしようっかな)

迎えた休日。

斜陰の中で囲碁をやることは決定事項だったが、どうやって囲碁をやるかは考えてなかった。

『碁会所はどうでしょうか』

(ゴカイジヨ?)

『そうです！ 碁好きの者が集まって、碁を楽しむ場所があるんです！』

と佐為。

そして、佐為の案内で、碁会所に向かった。

ちなみに、ヒカルは和谷と伊角と一緒に碁会所巡りをした時があった。

佐為の記憶力は、特に囲碁に関することについては驚異的だった。

佐為はヒカルとともに訪れた碁会所の中から、女性が入りやすくなるべく近い碁会所を案内した。

……とは言っても、斜陰は男装斜陰だけでも。

「うわー、ここが碁会所！」

とあるビルの1フロアに、碁盤が並んでいる光景に、斜陰は目を輝かせる。

「ここは初めてかい？ 学生なら500円だよ。名前と棋力を書いてくれ」

受付はスムーズに終わった。

棋力は佐為に言われたものを書いたし、名前もユウコではなくユウ

にただけの、本名を書いた。

「って！ 和谷〜！」

「うわっ、ユウ!? なんでここに」

「それはごっちのセリフだよ」

斜陰は、おじさんたちの中に混じって和谷がいることに気付いた。

『まあ、まるで運命ですね』

(ちよ、変なこと言わないで)

『え? でもこの前もヒカルに会おうとして、和谷に会ってましたよね?』

(でも運命とかないから!)

と斜陰は全否定する。

そして和谷の方に向かうと、和谷はおっさんたち相手に多面打ちをしているようだ。

(一人で3人同時?)

『ええ、強い打ち手にとっては何も難しいことはありません。私ほどの打ち手になれば、100人同時にだって——』

と佐為が謎の対抗。

「俺はたまにこの碁会所には来るんだよ」

和谷は打ちながら、答える。

「僕の方は、初めての碁会所だよ。でも、せつかく和谷がいるんだし、和谷打とうよ!」

と男装斜陰は言った。

「いいぜ。ユウ一人増えたくらい問題ねーよ。好きなだけ石を置きな」

「言ったね! 後悔しても知らないから!」

マスクに隠れた口元を満面の笑みにしながら、盤面の4隅——4つの石を星に置いた。

「和谷がプロでも、最初っから4隅取られてたら無理でしょ〜?」

斜陰は流石に4隅全部は卑怯すぎたかと思いつつ、そう聞いた。

しかし——

「は? たった4子でいいのかよ」

——和谷の反応は真逆だった。

斜陰は置き碁というのはやったことはない。

しかし、今まで佐為の碁を見てきて培った感覚というのはある。

その感覚からすると、4子というのはとてつもなく大きな差だ。

実際、それは正しく、佐為レベルや奈瀬レベル相手なら、4子のハ
ンデを覆すのは不可能というほどのものだ。

しかし、それはあくまで、プロレベルから見えた時の話。

囲碁には他のボードゲームと比較にならないほどの選択肢が常に
ある。

これは実力差が非常に出やすいことを表している。

つまり、斜陰が和谷と戦いたいなら、もつと置石を置かねば勝負に
ならない。

「4子もあれば十分だから！」

でも斜陰はそこが分からなかった。

「ま、お前がいいならいいぜ」

そういつて、和谷は初手、星にカカリを打っていった。

斜陰の黒と和谷の白が交互に放たれる。

最初にあった貯金はすでになく、形勢不明の状況にまでなつてし
まっている。

「ほらな。4子じゃ足りねーだろ？」

他の対局との多面打ちをしながら、和谷は言った。

「ん？ ユウ？」

「……」

和谷は、少年から返事がないことに疑問を持つ。

——まさか。こいつも進藤みたいな、周りの音が聞こえないほどの
集中を？

結果、斜陰の大敗した。

「うゝ、くやし〜！」

斜陰、初めて囲碁でくやしいと感じていた。

「お前、強くなったな。あー、まあそりやそうか。前の時が初めてだつて言つてたもんな」

「強くなったつて言われても、僕、今まで一度も勝つたことないんだけど?」

「え、嘘だろ……」

「うん、と言つても、今日で3局目だけどさく」

と何気なく、斜陰は言つた。

ガバツ!

「うわつ」

和谷が斜陰の両肩をガシツと押さえつける!

「ちよ、えつと」

和谷の顔が近づく。

「それは本当か!?!」

「え、あ、うん。最初と最後は和谷で、2局目はプロの卵的な人とやつて……」

「お前——」

和谷がそう言つて、じつと見つめてくる。

な、何!?!

なんで突然止まった!?!

まさか!?!

マスクに、つばのあるキャップをしているとはいえ、これだけ近づかれたら流石にバレた、とか??

そんな考えが脳裏によぎつた。

「——すごい才能あるぞー!」

そう言つて、和谷の両手が離れた。

和谷は席にほすつと座る。

(はあく、びっくりした。バレたかと思つた……バレてないよね?)

『ええ、純粹にユウコさんの才能に驚いていただけだと思います』

(そっか。よかつた)

『ふふつ、ユウコさん、顔が赤くなっていましたよ?』

(うるさい! バレるかと思つて緊張しただけだから!!)

男装斜陰は、佐為にぷいっと顔を背けた。

「もしよければ、俺が教えてやってもいいぜ？」

「え？ 和谷が？」

「ああ。お前高校生って言ったか？ 1年だろ？」

斜陰は、なんでそう思ったー、と思いつながら、年齢的には高校一年生なのでコクリと頷く。まあ実際には中卒なんだけどね……

「囲碁のプロになる場合は、子供の頃に碁を覚えるんだ。小学生になる前から碁をやっている奴も多い。遅くとも小学生、それも低学年の間には覚えなきゃ、プロにはなれない——普通はな。でもお前は才能がある。もしかしたら、高校生から始めてプロになれるかもしれない。それほどの才能だ」

「僕は別にプロになる気はないけど？」

最近、ヒカルや佐為に言われたけど、プロになる気なんてない。というかアイドルやりながらは絶対無理に決まってる。すべてのエネルギーを碁に注いでどうかっていうレベルなことは分かるし、あんなに強い明日美先生ですらプロになれていないのだから、その厳しさは分かっているつもりだ。

「プロを目指して言っているわけじゃねーよ。才能のある奴を教えたら、俺が伸びるかもしれないねーって思っただけだ」

和谷は思う。

思い返せば、進藤にいろいろ教えていた時期が一番棋力が伸びていた。まるで進藤の棋力上昇速度に合わせるように……アイツは、結局、出会ったときからプロになってからもずっと凄まじい速度で成長してやがるが。

「……ま、お前のためってわけじゃねーから」

「む、それはそれでひどくない？」

「で、どうするよ？」

「まあ、僕が暇な時間なら、教えてくれてもいいよ？」

「ユウめ、言うじゃねーか！」

「和谷が先に言ったんだよ！ それで、和谷は最初に何を教えてくれるの？」

斜陰はマスクの中でニヤつきながら、和谷に聞いた。
和谷は白石をパチンと、盤に打った。
「そりゃ、まずは碁打ちの持ち方を教えてやるよ！」

アイドルは黒がいい！

「え？ 打ち方？」

「ああ、そんなコトリコトリじゃ、様にならないからな」

そうして和谷の手が伸びる。

やばい！

斜陰の脳裏に、前に和谷が自分の手を触った時のことが浮かび上がる。

咄嗟に、

「そんなぐらいできるからー！」

と言い、人差し指と中指で石を挟んで、一息つく。

ふーっと息を小さく吐いて、石を盤に打ちつけた。

ぺちよん。

指が先に盤面にぶつかって、しよぼい音がした。

「できてねーじゃねーか」

和谷は無言を言わず、斜陰の手を取る。

「ほら、これで打ってみろ」

「う、うん……」

『和谷ってば、大胆』

和谷の手が斜陰の手に触れてしまっている。

そして、和谷に正しい手の形を作ってもらってから、盤に打ち付ける斜陰。

パチリと音が鳴った。

「……も、もう余裕だからー！」

そして斜陰は自分一人で、もう一度、石を盤に打ち付ける。パチリと音が鳴った。

「ほらー！」

と斜陰。

パチ、ペシ、ペシ……

パチ、パチ、パチ

連続で石を打つ斜陰。

たまに失敗するが大体成功している。

「よし、あとは数をこなせばできるようになるだろ」

（よかった〜……というかさっきの肩掴んできた時も、和谷遠慮なさすぎない??）

『和谷はそういうやつなんです。ヒカルの時もすぐ仲良くなってましたよ』

*

「次は実戦だ！ 碁は勝てなきや面白くねーからな！ 置石なしで勝ってこい！」

「分かった、和谷〜」

「師匠とかなんか呼び方ないのか……?」

と言われたが当然スルー。

碁会所のおじさんたちと斜陰は打つことになった。

「ほらさっさとニギれよ」

対局相手が決まり、相手のおっさんがそう言ってきた。

（ニギリって?）

『手番を決める方法のことです。白石を持った方が石をいくつか手に握り、黒石側はその石の数が偶数か奇数を当てるというものですね。ほら見てください、右手を握ったまま盤の上に置いていきますよね？』

あれはユウコさんが黒石を置くのを待っているのです。黒石を1個か2個置くのです』

（じゃあ私が黒を持つには?）

『当てれば、黒になりますよ』

（えー）

つまり、外せば白になってしまうということ。

それは不満だった。

「僕、黒が好きなんだけど?」

と斜陰は対戦相手に言う。

「ええでええで、なんか黒で試したい打ち方でもあるのかな？ 別にええよ」

対戦相手のおっさんは快諾する。

(これが、アイドルの力だよっ！)

『アイドルは関係ないかと』

斜陰は黒石がいつぱいに詰まった碁笥を、大切そうに撫でる。

(黒く輝くってまさしく『斜陰』って感じじゃない？ だから、私は黒が好きかも。佐為はどっちの石が好き？ なんとなく白を持っていくことが多いイメージだけど)

『白石と黒石、どっちが好きか、ですか。あまり考えたことはなかったですね……』

斜陰は碁笥に指を入れる。

親指と中指で、黒石をつまんだ。

そして、すくい上げるようにして、人差し指と中指に持ち替える。

——右上隅、小目！

斜陰は強く打ち付けた！

力みすぎて、ぺちよんと指を叩いたのはご愛敬……

そして、碁が進行していく。

(相手の人——弱いね)

斜陰は相手の実力を感じ取っていた。

今まで戦ってきた和谷や奈瀬とは比較にならない。もちろん、ネット碁で見えてきた猛者や佐為とも比べるまでもない。

『ええ。ですが、わずかに、黒が押されていますね』

(……うるさい)

相手の実力を感じ取っても、実際に勝てるかどうかは別である。

押したり引いたりを繰り返し、意外にも拮抗したまま、進行していく。

盤面左下から、戦いが勃発。

その戦いは、盤の半分ほどに及んでいた。

——ユウコさん、よく読めます。

佐為は斜陰の打ちまわしに、感嘆していた。

基本、斜陰は見えていただけ。

たくさん見ていたことで、石の流れを感じ取り、碁の筋というものをとおよそつかみかけているというのは分かっていた。

しかし、一方で、碁に必要な読みの力は圧倒的に不足しているはずだった。

相手は、力自慢の棋風だった。

多少強引なところからでも、力勝負に持っていくタイプ。

石と石とのぶつかり合い、つまり戦いの碁になれば必要不可欠な読みの力は、主に詰碁や実戦で鍛えられる。斜陰の実力が発揮されにくい展開だった。

——でも、予想以上に善戦していますね。それに……ふふ、楽しんでますね。

男装斜陰は、マスク越しでも分かるくらい、楽しんで打っている。左下から盤の半分に波及した戦いは、若干の白ペースで進んだ。

しかし、戦いに一区切りがつき、手番は斜陰。

斜陰は、上辺の大場に、パチリと人差し指と中指で挟んで打ち付けた。

神の一手か。

打たれてみれば、盤面これ以上はないと思えるほどの一手だった。

「ぐう」

リードしている白も、簡単ではないと思いなおす。

(まだまだここからでしょ?)

*

気付けば夜。

「ユウ、メシでも行くか?」

「いや、僕は帰るよ」

「親がメシ作ってんのか?」

「まあね」

実際はそんなことはなく、問題はマスクを外さないといけないところ

ろにあるのだが、和谷に分かるはずもない。

「あー、一局目、負けちやったよー」

「お前、その後は勝ちまくってたじゃねーか」

碁会所での互先の対局は、最初こそ負けたものの、それ以降斜陰は3連勝した。

「やっぱりちよつと悔しいかも」

「そう思うなら、ユウはもっと強くなれるぜ」

和谷はニツと笑った。

「じゃあ和谷に勝てるようになる？」

「てめー!」

「うわっ」

斜陰の頭を帽子の上から押さえつける和谷。

「俺に勝てたら、プロ目指せるぜ？」

「……忘れそうになるけど、和谷もプロだもんね」

「おい、どういう意味だ」

(プロの威厳みたいなものがなー)

と内心思った。

「そうだ、ユウ。プレゼントだ」

和谷が手渡してくる。

「へ? ……本?」

「ああ、詰碁の本だ」

「詰碁? ……なんか碁に関係する本ってこと?」

「お前、詰碁すら知らないのか……なんとなくそんな気もしてたけどな。この本は初心者レベルからプロレベルの問題まで載ってるからお前にちよつどいいんじゃないか? まあ、後ろの方の問題は解かなくていいぜ」

「えつと、わた——僕にこれを解けと?」

「ああ! ……お前は読みの力が足りてねーからな。読みを鍛えるには詰碁が最適ってわけだ。あと、基本死活が怪しい部分もあるからな」

斜陰は受け取る。

『塔矢選詰碁集』と書かれていた。

(これって楽しいの?)

『ええ、ユウコさんならきつと楽しめますよ』

パラパラとめくってみると、碁の部分図がいくつも載っている。

とりあえず、最初の方の問題を見てみる。黒先白死と書かれており

(これはここでしょ?)

『ええ、お見事です』

(これが難しいの?)

『難しいものは』

後ろの方の問題になるととても難しくなっていく。

(これも黒先白死ってことは、この白を殺す手段があるってこと?)

……全然わからない)

「あー、お前そもそもルールは分かっているのか?」

「多分?」

「はあ、まあ、分からないことがあれば聞けよ。ってことでほら」

和谷が何かを差し出してくる。

「ケータイ? くれるの?」

「なわけあるかよ! 連絡先交換に決まってるだろ?」

「へー、僕の連絡先が欲しいんだ。和谷のえっち」

「どういうことだよ……ほら、お前の師匠になったんだしな」

「うえー、和谷が師匠かあ」

「なんで嫌そうなんだよ」

「まあ、はい」

斜陰はプライベート用の携帯を取り出すのだった。

「僕と連絡先交換できるなんて、すごいことなんだから。光栄に思っ

てよっ。」

「へいへい」

そうして、交換したのだった。

帰り道。

(今日は帰ったら、詰碁やろうかな? あ、佐為はネット碁やりたかった?)

『いえ、一緒に詰碁をやりましょう!』

(……全然話変わるけど、今日の和谷、私を触ってきすぎじゃなかった?)

『和谷は年下相手にはそんな感じなんですよ。無意識でやっているんじゃないでしょうか』

(むう……なんか反撃したいなく、あそうだ!)

斜陰は、メールを送る。

『今度の握手会って参加する?』と文字を打つ。

(送信つと!)

マスクの中で、ニヤついているのだった。

アイドル、和谷と呼んでみる

アイドル斜陰の握手会は、本人の要望でかなり時間が短い。

つまり、握手券の絶対数が少ないのである……人気No. 1で一番需要があるのに、そんな状態なため、ファンたちの間で握手券のために熾烈な争いが繰り広げられていた。

「CD買いきすぎて、今月も金がなくなっちゃった」

「和谷ってかなりイベントにも出ているから、稼ぎも相当あるんじゃないのか?」

和谷のパートで、伊角が疑問を口にする。

プロ棋士の収入源は、大手合いの対局料が基本だがそれだけではない。

特にあまり勝ち進めないような棋士にとって、一番大きな収入源は、囲碁教室や各地で行われる囲碁イベントへの出席なんてこともよくある。

和谷は頻繁にイベントに出ており、稼ぎも多い。

しかし、貯金なんてまるでできていなかった。

「斜陰ちゃんの握手券を甘く見るんじゃないよ。俺は後悔したくないからね。やれることは全部やって握手券を手に入れられる確率は少しでも上げておきたいんだ」

「それで、握手券は手に入ったのか?」

「ああ、バツチリだぜ!」

和谷は握手券を見せつけるのだった。

*

会場にはたくさんの方が詰めかけていた。

それぞれのメンバーの前には長い列ができています。

その中でも、一番そわそわと緊張感漂う列は、超人気アイドル斜陰の列なのを言うまでもない。

(あー、苦行が始まる……)

『誰もがユウコさんと会うのを楽しみにしてきたんですから、そんなこと言わずに……』

(じゃあ、佐為、変わってよ)

『え?』

(ほら、私に乗り移ってさ)

『私にそんな力はありませんよ』

(はあ、つらい……今日は帰ったら速攻で寝るから)

つまりネット碁の時間はないということである。

『ええ、ええ。もちろんです』

しかし、佐為は怒ることなんてない。

むしろ忙しい日々なのに、ネット碁をさせてくれていることに感謝しかなかった。

(ま、でも今日は和谷が来るし)

『そういえば、何かするつもりって言っていましたよね?』

(格付けだよ、か、く、づ、け。和谷って『僕』のこと、下に見てくるし)

と答えた。

そして、苦行が始まった。

貼り付けたアイドルスマイルで対応し続ける。

服装は、アイドルらしいフリフリの衣装であるが、同時に斜陰らしさも表現されているような黒を基調としたものだった。

(あれ……もうすぐ終わる時間じゃない?)

『あと10分ほどでしょうか』

前半は終了し、後半も残り10分ほどに迫っていた。

(え? 私のファン辞めちゃったとか)

斜陰はファンと握手しながら、佐為と会話する。

『いえ、今日は来るって言っていました……そんなことはないでしょう』

と言っている時だった。

ついに、和谷が現れた。

ばあつと斜陰の心が晴れ渡る。

斜陰は両手で和谷の手を包んで、超完璧なアイドルスマイルを見せつける。

そして――

「――来てくれてありがと、和谷くんっ！」

「あつ、えつと」

名前を呼んでみた。

知っているはずのない名前を。

反応は劇的だった。

そう言ったが直後、面白いくらいに顔を赤くしている。

――やっぱり和谷はこうじゃないと！

ユウの時の雑な扱いも、許せるというものだ。

いつの間にか、アイドルスマイルが崩れて、素でニヤついてしまっている斜陰。

一方の和谷は顔を赤くして固まっている。

「お客様、お時間です」

係りのスタッフが言うのと、固まった和谷は動き出そうとする。

しかし、動けなかった。

「あ……つと」

なぜなら、斜陰の両手が和谷の手をしっかりと包んでいるから。

和谷が乱暴に振りほどけるはずもない。

しかし、係りのスタッフには、そんなことは分からない。厄介な客だと思っただけだ。

「お客様」

再度、スタッフは和谷に言った。

――このくらいが限界かな？

「あつ！ ごめんね！」

斜陰は、たった今気付きましたと言わんばかりに、手を離す。

そして舌を少し出して、てへぺろ、と美少女のみに許された表情をした。

もちろん、和谷のハートにぶっ刺さってしまったのは間違いない。

「あ……」

「和谷くん、またね！」

和谷は返事すらできずに、顔を赤くしながら去っていった。

一方。

（和谷が来たし、今日の握手会、多少意味あったかも）

『ふふ、そうですね』

（決めたよ、佐為。今度会ったとき、からかってやるから！ どー、からかおうかな？）

*

あれから。

和谷の頭の中は、握手会のことではいっぱいだった。

「おい、和谷ア！ 何、ぼーっとしてる！」

定例の研究会で、森下九段が声を荒げる。

「あ、すみません」

「ははは、アイドルの斜陰にお熱なんですよ」

と白川。

「和谷ア！ ネット碁のシャインの方に熱を出せ！ 冴木もネットの

死神を倒しに行け！」

「うええ、とばっちりだあ……というか、師匠でも勝てないような相手に」

「なんか言ったか!？」

「いえ、なんでもありません！」

森下の研究会では、ネット碁の——正確にはshineの検討もよく行っている。

以前森下は和谷にお願いされ、アカウントを借りて対局をし、見事に負けた。それからというもの、shineの碁はよく検討されてい

た。

さらに森下は以降、自身のアカウントを作つてまで対局していたりもしているのだが、未だに勝ったことはない。

「ははは、冴木君だとしてもそもそもシャインとやるにはレートが足りんじゃないかな？ 僕でも一回しか対局できていないし」

盤面に並んでいるのは、ネット碁の棋譜。

白は韓国のトップ棋士。

黒は、ネットの死神 shine だった。

初手天元から始まった碁は、既に僅かに黒良しになっていた。

「ここまで進むと、いつの間にか黒が良くなつていやがる……じゃあ、白に悪手があったはずだ。冴木イ！」

「はいい！」

「どこかわかるか？」

「えっと、ここでしょうか」

「なるほど。では、どう打つ？」

「えっと、こことか？」

冴木が一手を示す。

「それは、こうしてこうで……」

「白が悪いな」

白川と森下で検討が進み、冴木の一手では白が悪くなることが確認された。

一方の和谷。

(斜陰ちゃんに、和谷君つて……)

完全にトリップ状態だった。

「おい！ 和谷はどう思う!？」

「えっ!? あ、はい。自分も白の悪手は同じところだと思います」

和谷は咄嗟に答える。

しかし、これも当然。

和谷はプロ界でも随一、死神 shine を追っている棋士だった。今までの shine の棋譜はすべて何度も並べているし、細かい検討も少なくとも一人では行っている。自分のアパートで開く検討会で

もよく検討を行っているというのもあり、今回はまさに「それ進○ゼミでやったところだ！」状態だった。

「じゃあ代えてどう打つ？」

「……こことか、どうでしょうか」

和谷は、伊角たちと検討した手を示す。

その一手は、森下を唸らせる。

「悪くない」

そのとき、ドタドタドタと足音を立ててやってくる者が一人。

扉を開け放し、現れた。

「はあ……はあ……はあ……」

「進藤オー！ 遅いぞー！」

「遅れてごめんなさい！ 塔矢が大真面目にアイドルの勉強をしないか、とか言い出してさ！ あ、それこないだの佐為の棋譜！ ……で、白の手を検討してるんだろ？」

「よし、進藤はこの局面、どう打つ」

森下は問題の局面に戻り、聞く。

「元の手も悪くはないけど、佐為ならこっちに打つと思うんです」
「ほう」

「そうすると、こうしてこうしてこうなって、展開は激しくなるけど、ここまで進めばひと段落」

ぱっぱと並べるヒカル。

ヒカルもまた、shineの棋譜検討には余念がなかった。

検討が一区切りついた後、対局を行うことになった。

和谷はヒカルと戦うことに。

心あらず状態の和谷だったが、碁が始まるといつの間にかちやんと集中できていた。

それどころか、いつも以上の集中力を出せていた。

ヒカルは和谷の読みの深さに驚く。

——そうか、こうなってみると……っ！

ヒカルは既に形勢が悪くなっていることに気付く。

「ありません」

「ありがとうございます」

勝ったのは和谷だった。

「和谷ア！ やるじゃねーか！ ぼさつとしたのは帳消しにしてやるー！」

森下は和谷の圧勝と言ってもいいくらいの内容に、内心かなり驚く。

「進藤オ！ 休んでのはよくないが、ちゃんと死神との連戦でさらに一段階強くなってる。ただ、今回は和谷が上手だったな……」

森下はヒカルの力が大きく伸びていることも分かっていた。

「今日の和谷は今までで一番強かったぜ？」

ヒカルは言った。

「あ、ああ……」

対局が終わり、和谷の心は早くもトリップしていたのだった。

「和谷、さっきの集中はどこ行っただんだ!？」

そして、研究会が終わり、和谷は携帯を確認する。

『明日、予定はある?』

ユウからのメールが来ているのだった。

アイドルの新しい日常

とあるアイドルの撮影現場。

そんなところで、一人、本を読んでいるアイドルがいた。

「斜陰ちゃん、何読んでるの?」

「碁だよ」

答えたのは人気No. 1アイドルの斜陰だった。

「へー、最近やってるって言ってたけど……碁って一人でもできるんだっけ?」

もう片方は、人気No. 2のアイドル春奈だった。

「一人じゃできないけど……これは本で、詰碁っていう碁のパズルがたくさん載ってる感じ?」

「へー! なんか、すごそう!」

「分かってないでしょ」

「でも、碁? すごい頭良さそうな感じだよね?」

「確かにそうかも」

『いえー! 碁に頭の良さなんて関係ありません!!』

「うわっ!!」

佐為に突然大声を出されて、驚く斜陰。

「うわっ!! ど、どうしたの斜陰ちゃん!」

「いや、こっちのセリフ」

「え?」

「いえなんでもありません」

「ええ? 斜陰ちゃんって不思議系キャラだったの?」

「あー、えっと、碁に頭の良さは関係ないって」

『ヒカルは学校の成績は散々でしたが、碁の才能だけは素晴らしかった』

「なんか、プロになった人でも、高校にすら行けなくらいのバカもいたって」

と斜陰は言う。

『ユウコさん……何気にひどいですね。私もそこまでは言っていないですよ』

(でも事実じゃん。ヒカルさんも和谷も中卒だし)

『その理論で言うとな、ユウコさんも中卒ですよね』

(私は中学の成績良かったし)

「じゃ、じゃあ、私でも碁をやれたりするのかな？」

「あ、うん。できるんじゃない？」

と話していたら、撮影準備が整ったようだ。

「はあ、仕事かあ」

斜陰は名残惜しそうに本を置いた。

「撮影嫌いななの？」

「うん」

まあ、仕事は全部嫌いだけど。

「えー、そうなの？ 私は好きだよ！ 本当に私？ ってくらいに綺麗に撮ってくれるし」

「確かに。いっつも、誰これってなる」

「でしょでしょ？ だから、最高に輝かせてくれるこのお仕事は、すごく好きなんだ！」

うわ、まぶしっ！

思わず目を閉じてしまうくらいに、春奈の笑顔は眩しかった。

そして。

ぼよよん！

春奈が上着を脱ぐと、水着姿が露わになった。

出るところはしつかりと出て、しかしウエストは細い。

(私なんでこの子より人気なわけ？)

斜陰も上着を脱ぎ、自身の胸元と比較する。

ないとまでは言わないが、小さい。

いや、冷静に見れば、斜陰の年齢から考えれば、ある方なのかもしれない。

しかし、目の前の特大火力を前にすれば無力と言わざるを得ない。
(やっぱり今日の仕事も憂鬱だ)

斜陰は嫌いな仕事を今日も頑張るのだった。

*

今日の仕事は、早めに終わって嬉しい

タワマンの自室で、帰ってくるなりネット碁にログインする斜陰。

『それにしても嘆かわしいことですね』

「え、急に何？」

『あの春奈という者、碁をやったことないのではないのでしょうか』

「ああ……そゆこと」

佐為は今日の春奈とのやり取りを気にしているらしい。

『碁に熱中している子供がたくさんいるのは知っています。けれど、この時代の普通の子供というのは、碁をやらないうらしいですね』

「やらないどころか、大抵は碁って何？　みたいなレベルだと思うよ。まー面白いテレビゲームなんかもあるし。将来もっと面白いゲームなんかがたくさん出てきたら、碁をやる人はいなくなっちゃうかも……うっ！」

斜陰は急に吐き気を感じた。

一方の佐為はメソメソと泣いているようだ。

『すみません、私の碁が消えてしまうかもしれないという悲しみが、あなたの心を覆ったのです』

「ちよつと言ってみただけ、冗談！　冗談だから」

『……本当ですか？』

「う、うん。消えるってことはないと思う。まあ、さらにマイナーになっっていくかもしれないけど」

『うううう……』

「ちよつとっつ！」

斜陰は再び吐き気を感じた。

「いや、もしかしたら、すごいメジャーなゲームになるかもしれないし！」

『かもしれない、ですよね』

「未来はどうなるか分からないから！」

『それはそうですが』

「碁ってすごい面白いし……休日の私が碁会所行くななんてすごいことなんだよ？ だから大丈夫！」

『そう、ですよね』

「そうそう！ 碁って最高に面白いから。佐為もそう思うでしょ？」

『ええ、その通りです！ ええ、ええ。今の子供はやったことがないだけなんです！ 碁を一度打てば、その魅力に取りつかれるのは間違いないですよ！』

さつきまで泣いていたのは嘘だったかのように、立ち直る佐為。

「取り憑かれるって佐為が言うと、冗談では済まないかも？」

『私が取り憑けたら、それはそれでいいんですが……私に次はないでしょうし』

「そうなの？」

『ええ』

佐為はなんとなく、今が最後だろうと、理由は分からないが確信に近いものを持っていた。

同時に内心想う。

——もしかしたら、私がこうしてユウコさんの元で蘇ったのは、ユウコさんの才能だけが理由ではないかもしれないかもですね。囲碁を世界に広めるため……でも私は強要させるなんてするつもりはありません。碁をたまにやらせてもらえれば、それ以上は望むまい……

斜陰がカチカチとパソコンを操作すると、ネット碁の世界に shine が降臨した。

いつものように一番レートが上の相手——もちろん、shine を含めれば2番目の相手と対局が始まる。

対局が始まると、瞬く間に観戦者は1000人を超え、1000人に到達。中盤に差し掛かる頃には1万の大台に乗った。その後も観戦者の数は衰えることなく増え続けている。

国籍も年齢もバラバラな数多の碁打ちたちは、佐為の一手一手を見

るために集まっている。

(佐為くらい強ければ、プロになるのも余裕?)

『ええ、当然です』

(そりやそうだよね、ヒカルさんにもほとんど勝ってたし)

『私がプロになれば、本因坊——いえ、タイトル独占だってやってやりましょう!』

そうして、佐為の示す一手一手が、斜陰の手を通して世界に広がっていく。

ピロリとディスプレイに、投了と表示された。

気付けば、中押し勝ち。

ネットの猛者を相手に、流れるような完勝——しかも、今回もまた、遊びの手をいろいろと試している。

「佐為、ここで相手はここに打ったけど、こっちに打ってきたらどうしてたの?」

斜陰は対局が終わった後、棋譜を戻しながら、佐為に聞く。

以前はこんなことはなかった。

ヒカルと佐為の再会、そしてこの前の碁会所の経験によって、斜陰の何かが変わっていた。

対局後はもちろん、対局中にも斜陰は遠慮なく聞きまくっていた。

『ここはですね——』

佐為は嬉しそうに答える。

「そうだ、佐為。前々から気になってたことがあるんだけど」

『はい、なんででしょう?』

「初手天元ってどうなの?」

『ふふ、そうですね、では次に黒を引いたらやってみましょうか』
次局。

いつものように、一番高いレートの者と戦う。

実は今回の相手は中国のトップ棋士の一人だったが、黒を引いた佐為は初手天元を打っていった。

『初手天元なんていつぶりでしょうか』

(やっぱり、あんまりいい手じゃないの?)

『いえ……どうでしょうね。難しい手であるのは事実ですが、悪い手とは言い切れません』

そして、非常に複雑な碁が始まっていく。

(えー、複雑すぎて全然理解できないよ)

『大丈夫。今のユウコさんなら理解できますよ』

佐為は一手一手、手の意味を解説していく。

すると、斜陰も盤面で行われている高度な駆け引きを理解できた。

(楽しいね、佐為！)

『ユウコさんが楽しんでくれているなら、なによりです！』

佐為と斜陰のネット碁は、より一層楽しいものになっていった。

和谷のアパートにお邪魔します！

斜陰は今回の休日も外出していた。

(あく、こんなに外出していたら過労死しちゃうよ)

『でも昨日はあんなに楽しみにしていたじゃないですか』

(いや、別にそんなことないし。帰ってきたら、交渉して休み増やしてもらうしかないね！)

とある駅。

斜陰はいつものように男装して、ある人を待っていた。

「おーい、ユウ！ やつと見つけたぜ」

「遅い。和谷のくせに、僕を待たせるなんていい度胸だね」

「いや、お前が北口と南口間違えなけりや」

「別に僕は間違えてないし……周りが悪かったただけだし」

「いや、それは無理があるだろ……」

「……」

そう。

今日の和谷は、自身のアパートで研究会を開く予定であり、斜陰も飛び入りで参加することになった。

2人で歩いていく。

「そうだ、あれから碁を打ったりしたのか」

「え？ 別にしてないけど？」

「なんとなくそんなような気がしたぜ……」

「でも詰碁はやったよ！ ほら！」

斜陰は和谷から貰った詰碁集を取り出して見せつける。

「お、ちゃんと使ってたみたいだな」

和谷は受け取り、パラパラとめくってみる。

書き込みはないが、明らかに新品ではない様子のものであった。

「このことが明らかに使った感があるよな」

「どっどっどっどっ？」

和谷はそのページを見せる。

「げ、そこは……」

『ユウコさんがやってる途中に寝てしまったところですね』
(やっぱりそうだよね……)

「ん？ なんだ？」

「な、なんでもないから！ ちよつと水をこぼしちやっただけだから！」

「とかいいつつ、よだれなんじゃねーのか？」

「んな……」

「ベコベコになっているしなあ」

和谷は、斜陰曰く水がこぼれたところを、触る。

「あ、わ、わ……和谷の変態っ!!」

チョップが和谷の頭に吸い込まれる。

「いった……くはないけど、何するんだよ！」

「……別に？」

「頭はやめてくれよな。碁打ちに一番大事なのは頭だからさ」

「じゃあ今度からはお腹にグーパンする」

「なんでそうなるんだよ……」

「……」

2人で、和谷のアパートまでの道を歩いている。

(なんか私ばかりボロが出てるような)

(ここまでの会話で、斜陰の失敗ばかりが話に上がっていることに気付く斜陰。

(和谷は私の下なはずなのに……これは仕掛けるしかないね！)

男装斜陰は、何気なく口を開く。

「そういえば、和谷ってこの前の握手会行ったんだよね？」

すると反応は劇的だった。

和谷は一瞬で顔を赤くして、

「ふ、普通だったしー！」

と叫ぶように言った。

「え？ 普通だったってなんのこと？ 行っただってこと？」

斜陰はあえてすつとぼける。

「あ、あ、ああ。そう。普通に行って、普通に帰ってきたってことだ」「握手はした?」

「そりゃ、そうだろう。握手会、に行って、握手しない奴なんて、いねーだろ」

「へーじゃあ、どんな感じだったの?」

「ど、どんな感じって言われてもな……」

和谷の脳裏にこの前のことが思い出され、顔がさらに赤くなつてしまった。

「和谷く、赤いよ」

「は、はあ!? ちょっと厚着しすぎただけだ! そもそもユウに言う意味ねーだろー!」

「そっかー、恥ずかしいんだ」

「は……なんでそうなるんだよ!?!」

「恥ずかしくないなら言えるよね」

「和谷くんって……いや、やっぱなんでもねーぜ!」

「なにになに? どうしたの、和谷くん?」

「だから言わねーって!」

「へえ、やっぱ恥ずかしいんだ」

「そんなことねーけど、まあ、そういうことにしてやるよ」

和谷はそう言つて、歩く速度をかなり上げた。

『和谷の顔本当に赤いですね』

(うんうん、これならやった甲斐があったよ)

斜陰は満足げに、和谷の後を追うのだった。

*

アパートに着いた。

他のメンバーは既に揃っているようだ。

「紹介するな。こいつはユウ。プロ志望ってわけじゃないし、へっぴこだけど、成長速度は進藤以上かもしれないから呼んでみた」
「ユウです、よろしく」

斜陰は帽子のつばを深く下げて挨拶した。

メンバーは、斜陰、和谷に加え、伊角、フクともう1人、佐為も知らない人がいて、計5人のようだ。

『奈瀬の姿はありませんね』

(前はいたの?)

『それは分かりませんが、和谷がこのような研究会を開きたいという話は私がヒカルに憑いていた時からありましたから。その時の話だと、奈瀬も参加していても不思議じゃないのかと』

と佐為は言った。

斜陰も気になったので、聞いてみることにした。

「あ、そうだ。和谷って奈瀬明日美って知ってる?」

「知ってるが……なんでお前が知ってるんだよ。って、この前のテレビか」

斜陰と奈瀬の対局は数日前に放送されている。

「で、どうなの? プロ目指しているんでしょ?」

「俺が聞いてーよ。あいつは、プロをまだ目指しているみたいだが……俺が開いている研究会にも来なくなっちゃったし、あーあ、どうすんだらうな」

「来なくなっただのは、この前のプロ試験中だったかな?」

伊角が会話に入る。

「ああ、受かる可能性がなくなったタイミングで来なくなっただ。一時的なものかと思っただが、それからずっとだな」

「プロにはなれると思う?」

斜陰は何気なく聞いた。

和谷は率直に答える。

「なれねーよ」

悲しい声色だった。

「……もしかしたら言っただけやるべきなのかもしれねーな」

「え?」

「お前はプロにはなれないってさ。あー、やっぱ、俺から言うことでもないか」

和谷の言葉に、斜陰は内心ショックを受ける。

(そう……なんだ)

『このままだとなれないという話だとは思いますが』

(あんなに強いのに、プロに比べると全然なの?)

『いえ、ユウコさんとの対局を見る限りではそんな風には……ほんのあと一步、いえ半歩でプロに届くというところまでは来ているようには見えました。勝負の巡りがよければ今の実力のままでも上がれる可能性はあると思いますし』

(プロ試験のことだね)

『ええ、調子が良かったり、タイミングよく相手の調子が悪かったりすれば……』

(そうだよね)

『ですが、このままではプロになれる可能性はごく僅かというのも事実でしょう。実力がもう少し伸びれば……』

「じゃあさ、和谷が強くしたら?」

「俺じゃーな。多分だけど、奈瀬が今必要なのは明確な師匠の存在だと思うんだ」

「そうだね。この研究会には来ていたけど、上下関係って感じじゃないし、伸びは悪かったのかもしれない」

和谷が答え、伊角もそう言った。

「そっか……明日美先生かわいいし、僕的にはプロになって欲しいけどなー」

「お前、あのテレビ番組で奈瀬見たただけだよな?」

「そうだけど」

和谷の質問に堂々と答える斜陰。

テレビ番組の撮影で見たわけだし、嘘は言っていない。

「はー、確かに美人かもしれないけど、あれ見てそうなるか? 斜陰ちゃんの方が100倍かわいいだろ」

「ふえっ!」

「確かに。奈瀬も引き立て役に見えた。ただ、そう見えるように撮っているだけかもしれないけど」

「いや、あれは素の魅力の差だって！」

(べ、別に私がかわいいとか知ってるし……言われ慣れているし)

「わ、和谷が斜陰のこと好きなんて知ってるし……それは置いといて、和谷が奈瀬の師匠をするつもりはないの？」

「いや、年下の俺がやるのはな……それに別の理由でもやりたくねー」
「別の理由？」

「ああー！ 斜陰ちゃん相手に、途中から弱いものいじめみたいな碁を
してたんだぜ？ あれで斜陰ちゃんが碁を嫌いになっただろうして
くれんだよ」

「そうなの……？」

「ああ、最初は指導碁を打っていたのに、一手ミスしてから本気でつぶ
しに行ってる」

「奈瀬もプロ試験に落ちて、追い詰められているみたいだし……」

「にしてもあれはねーよー！」

(佐為、そうだったの？)

『ええ、あれはあまり上位者の打ちまわしとして褒められたものでは
ないですね……』

(そうだったんだ。でも私は楽しかったけどね)

「話を戻すと、和谷は師匠する気ないみたいだけど……えっと、伊角さ
んは、師匠やってあげないの？」

「やっぱり僕らにとって奈瀬はライバルって感じで、弟子とは見れな
いかな」

そして、研究会が始まった。

と言っても、斜陰は研究会に参加しているという感じではなく、部
屋の隅で和谷に指導碁を打ってもらっているだけだったが。

多面打ちも余裕な和谷は、斜陰と打ちながら研究会でトッププロや
shineの棋譜、またそれ以外にも直近の伊角の対局など、いろん
な局面の検討に参加していた。

「和谷ー！ もう一局ー！」

「はいはい、分かったって」

斜陰の4子局が行われている。

本来ならもつと差はあるが、和谷は検討の方にメインで参加している。ギリギリ勝負になっている。

「うわー、あと一步で勝てたのに！」

「最後のここの損がなければ、勝ってたな」

「くやしー」

そんな感じで、時間が流れていった。

*

時刻は夕方に差し掛かろうとしていた頃。

ピンポーン

和谷のアパートの呼び鈴が鳴った。

「誰だ？」

和谷が扉を開けると、そこに立っていたのは意外な人物だった。

「……奈瀬」

「みんな……久しぶり」

奈瀬が立っていた。

奈瀬は玄関に立ったまま、大きく頭を下げて、その状態のまま言った。

「みんなにはお願いがあるの！ 私に引導を渡してください！」

奈瀬と掲示板

時系列が少し戻ります。

~~~~~

奈瀬はもう院生ではない。

和谷のアパートで定期的に開かれる研究会も、行かなくなった。プロ試験の終盤での2連敗。

あれで合格の目が限りなくゼロになってしまっただけから、もうどんな顔でみんなに会えばいいか分からなくなってしまう。

外で碁を打つ機会も人と話す機会も極端に少なくなった。半ひきこもり状態。

親から言われて仕方なく、週に1〜2日バイトしていること以外に外出することはない。

実戦はネットだけ。

碁の勉強としては他に、詰碁や棋譜並べ、戦術本を読んだりするくらい。

「私、これじゃあ強くなれない……」

奈瀬は自室で、碁石を打つ。

たった一人、一日何時間も打ち続ける。

結局は、今までやってきた勉強法と何も変わっていない。

ただ費やす時間が長くなっただけ。

「こんな時に師匠が居たら……引導を渡してくれるのかな」

奈瀬は自室で打ち続ける。

強くなっている実感がなくても、これ以外の方法なんてもう残っていないのだから。

「はあ……」

気分転換は、ネット掲示板だけだった。

奈瀬は棋譜並べをやめて、パソコンの前に座り、カチカチと慣れた操作をした。



【囲碁】【ネット碁最強！】死神スレpart102【人類最強？】

1：名無しの碁打ち

ここはネットの碁打ち shine（通称死神）に関するスレです。

・  
・  
・

32：名無しの碁打ち

hikaruと打つのもやめたみたいで、またレートの高い人と優  
先的に打っているな

33：名無しの碁打ち  
てか結局、shineって誰なわけ？

34：名無しの碁打ち

▽33

分からん

35：名無しの碁打ち

現役最強の緒方三冠にすら大きく勝ち越してるからなあ・・・

36：名無しの碁打ち

ワイ、正体に気付いてしまう。

もしかして↓塔矢元名人

37：名無しの碁打ち

▽36

それはない

4年前に現れたsaiと同一人物と言われているからな。そして  
saiは2年前塔矢行洋と戦ったのを最後に、姿を消した。ちなその  
ときはsaiの勝ち

38：名無しの碁打ち

∨ 37

はえり、サンガツ

39：名無しの碁打ち

だけど、最近は明らかに遊んでいるような手が多いよな

40：名無しの碁打ち

∨ 39

前からやで

41：名無し碁打ち

いや、初手天元とか、隠す気もなくなったなって

42：名無しの碁打ち

もともと隠す気はないで

43：名無しの碁打ち

トッププロ相手でも初手天元で勝ちまくってるという事実

44：名無しの碁打ち

∨ 43

勝率は下がっている定期

45：名無しの碁打ち

∨ 44

勝率高すぎて、勝率考えるのが意味ない定期

46：名無しの碁打ち

トッププロが会心譜レベルの手を打ててやつと5分に戦えるとか

いうバグ

47：名無しの碁打ち

Do you know who shine is?

48：名無しの碁打ち

うわ、外国人ニキ降臨

49：名無しの碁打ち

◇◇ 47

誰も知らないと思われ。

進藤四段が一番の手がかり説はある。

50：zelda

◇◇ 49

進藤に聞いても答えてくれねーんだよ

51：名無しの碁打ち

ゼルダさん、ちつすちつす

52：名無しの碁打ち

ゼルダさんの予想は誰なわけ？

53：zelda

◇◇ 52

多分、病気か何かで一人では碁を打てないんだと思う。

で、saiの時は進藤が補助していた。進藤は否定しているが。

今のshineは進藤とは別の奴が傍にいて、そいつのおかげで碁を打っている。あと、ハンドルネームから分かるように、斜陰の大ファンだろうな。ライブとか握手会とかイベントとログインしている時間が被っていることはない。これはおそらくshineの付き

人の方の趣味だろーが

54：名無しの碁打ち

◇53

ひええ

55：名無しの碁打ち

◇53

合ってそうなのがやばい

55：名無しの碁打ち

お巡りさん、こつちです

ここでレスは止まっていた。

奈瀬はなんとなく、最近会っていないかつてのライバルにレスをする。

56：名無しの碁打ち

ゼルダはまだ斜陰のファンなわけ？

57：zelda

◇56

そりやそうだ！

明日の握手会にも行くしな！

ディスプレイに表示された文字列が、奈瀬の瞳に映った。

楽しそう……

私はこんなにつらい思いをしているのに。

「はあ」

ネット上には shine の棋譜を集めたサイトがある。

奈瀬はそのサイトを見ながら、リアルな碁盤——もちろん、足つき碁盤を使って、棋譜並べをしていく。

ogata sei i ji と shine との戦い。

現役プロで最強と言われる緒方三冠。

それなのに、 shine は負けないどころか、優に上回っていく。

「この感じ……今更だけど……」

shine は碁を楽しんでいることが伝わってくるような碁だった。

奈瀬の脳裏にとある碁が思い起こされる。

——アイドル斜陰

あの子の碁は、 shine 以上に、すごく楽しんでいることが伝わってくるようなものだった。

でも、深くその石の流れを見てみると、 shine と非常に似ている手が多かったことに今更気付いた。

「楽しんだ方が強くなるの？」

奈瀬の中で答えは出ていた。

楽しんだ方が強くなるに決まっている、と。

子供の頃は毎日碁が楽しくて、それで棋力も伸び続けていたんだから。

「……でもどうやって楽しむの？」

碁の楽しみ方なんて忘れてしまった。

というか無理。

今の状況で楽しめるとは到底思えなかった。

プロ試験というものが、心に重しのようにのしかかっている。

こんなものを背負っていたら、楽しめるわけがない。

——なら、カラオケとかシヨッピングとかで気分転換をする？

そんなことが脳裏によぎる。

でも、これもダメだ。

一度遊ぶことを肯定してしまえば、碁の勉強をやめてしまうかもし

れない。

碁を楽しみたい。

碁で楽しみたい。

最近一番楽しめたのは——アイドル斜陰との対局だった気がする。

じゃあ、彼女と打てば何か変わるのだろうか。

あんな碁を打っておいて、今更どんな顔で会えばいいのだろうか？

よくわからないけど、なぜか彼女から指導碁の依頼が来てた……すぐに断っちゃったけど。

『今の私が、今をときめくアイドル斜陰と会う』ということは、奈瀬の心には負荷の大きいものでもあった。

プルルルルル、プルルルルル

電話が鳴っている。

今はお母さんはいないんだっけ。

奈瀬は電話を取る。

「もしもし、奈瀬です」

「もしもし！ 和谷だけどき！ 斜陰ちゃんとの碁を見たぜ！」

あ、今日が放送日だったっけ。

「奈瀬っ！ お前、なんて碁を打っているだ！ 碁は一部だけだったが、それでもお前が途中から弱い者いじめみたいなのを打ってることぐらいは分かったぜ！」

電話越しでも、怒っているのは分かった。

和谷が本気で怒っていることなんて、今まであっただろうか。

「これで斜陰ちゃんが碁を嫌いになったらどうするんだ！」

「あ、ごめんなさい……」

「それは俺に言うことじゃねーだろ!! まあ、今後会う機会もないだろうけどな！」

「あ……」

「じゃあなっ！」

プー、プー、プー

と電話が切られた。

「私、どうすれば……」

奈瀬は床にぺたりと座り込んで、体を抱きしめるのだった。

\*

心は限界だった。

たった一人で孤独に学び続けること。

次のプロ試験で必ず合格しなければならぬこと。

友達とも会わず顔がなく、誰とも喋らない日々。

ネット碁だって思うように勝てない。

苦しい。

苦しい。

泣きたいほど苦しくて、けれど涙は出なかった。

そんな状態のまま、ひとり碁を打ち続けることは、人生で経験したことのないような苦痛だった。

トドメは、和谷の言葉だった。

自分の碁まで否定された。

もう私は、碁に打ち込み続けることはできない。

奈瀬の心は限界を超えてしまった、

\*

それから数日後、奈瀬は和谷のアパートにいた。

「私に引導を渡してください！」

奈瀬は、碁打ちになりたいという心を吹き飛ばすように、叫ぶようにそう言ったのだった。

## アイドル、引導を渡さない

奈瀬の突然の宣言に、最初に反応したのは伊角だった。

「引導って……奈瀬、本気で言っているのか？」

「……」

奈瀬は伏せたまま、何も言わない。

「前回だって、あと一歩だったじゃないか。今ここで諦めるのか？まさか、親に何か言われたのか？」

「……違う」

「じゃあ、なぜだ」

「……」

奈瀬は理由を言わない。

「伊角さんがやらないなら、俺がやってやる」

「和谷……何を」

和谷は手早く1つの碁盤から石を片付け始めた。

「分かったよ、奈瀬。俺が引導を渡してやる」

「和谷ー」

伊角は咎めるように言ったが、和谷も考えを改める気はないようだ。

「あんな碁を打つようならプロになるべきじゃない」

「あんな碁って……」

「斜陰ちゃん相手の碁のことだよっ！ 弱いものいじめのような碁だったんだ！」

「それは確かにそうだが、しかし、何か理由があったんじゃない」

「どんな理由があっても、お客さん相手にあんな碁を打つていい理由にならねえ……プロならな！」

和谷は碁盤の石を片付けた。

「奈瀬、ここでやる」

「……はい」

「互先でいいな？」



そして、和谷が白、奈瀬が黒になった。

「おねがいます」

「……おねがいます」

対局が始まった。

伊角や他のメンバー、そして斜陰もその対局を観戦する。

碁打ちの性か、対局が始まってから口出しするようなことはなかった。

黒の奈瀬は、初手星打ち。

白の和谷は、小目に構える。

和谷も奈瀬もぼやくようなことはなく、碁石の音だけが聞こえるような、静かな空間だった。

互いに、激しくならないような定石を選択し、黒の奈瀬が大場を打ったところで、もう大場は残っていない。

和谷の手が止まった。

——手が難しいんじゃないかな？

奈瀬はここまで、互角、いやこの局面で手が難しいことを加味すれば、若干のリードを奪えていてもおかしくない。そう思っていた。

和谷は少し考えて、カタツキを選択。

——ここでカタツキ……？

奈瀬は一目、ありがたい手のように感じた。

しかし、相手は和谷。いまや明確な格上というべき相手。しっかりと読みを入れていく。

読んで読んで読んで……それでもなお、真意は分からない。少し疑問に思いながらも、奈瀬は第一感の対応を選択する。

ひと段落して、再び和谷の手番。

バチリと、和谷は迷いなく打った。

——ここでもカタツキ!?

奈瀬は驚く。

カタツキ……しかも、今まで打っていたところとは別のカタツキ。

「……………」

奈瀬から声が漏れた。

思った以上に対応が難しいことに気付く。

——いやでも、ここは押さえれば……

奈瀬は打つ。

これで大丈夫だと思っただが。

和谷はノータイムで、さらに別のところに打っていった。

——ここで三々!?

この交換は利かしとみて、初手奈瀬が打った星の裏側、三々に入っていく。

どういうこと!?

いやでも……この石の流れは、ネットの死神 shine が試していた手法の一つだったように思える。

難解すぎて、自分では理解しきれていないものを使ってきている。

これは新しい碁だ。

今までの古い碁に捉われている私は、この古い碁で戦っていくしかない。

奈瀬はあくまで自然に対応していった。

そして、十数手進んだところでやっと奈瀬は気付いた。

——そっか、こう進んでみると、最初のカタツキも、2回目のカタツキもすごくいいところにいる。

同時に脳裏によぎる。

すでに悪いかもしれないという考えが。

奈瀬は長考に入らざるを得なかった。

伊角は観戦しながら、思っていた。

——この手順は、死神をよく研究している和谷らしい面白い手順だ。一方の奈瀬はあくまでもオーソドックスな対応。和谷の読み通りの展開だろう。ここで奈瀬の手は広そうだが、どれを選んででも和谷が少し良さそうだ。

斜陰もまた、観戦していた。

(ここで明日美先生の手が止まった? もしかして手がなにか

……)

『ふふ、面白い局面ですね』

(佐為、形勢はもう和谷の方がいいの?)

『……ええ、奈瀬の次の一手次第でもありますが、平凡な手では基本的には奈瀬が悪いです。大きくは離れていないので、まだまだ勝負はここからでしょうが……』

(平凡な手では? って何かあるってこと?)

『とある一手だけ、奈瀬が良くなる順があります』

(え!?! じゃあ、その手順を打てれば)

『ええ、ですがそれは非常に難解な手順です。途中で一手でも間違えれば、むしろ奈瀬の方が悪くなってしまおう。そんな手でもあります』

奈瀬の長考は続いた。

——この局面がまだ悪くないとしたら、一手だけ、ある。

しかし、読み切れない。

自分の実力では、まるで読み切れない。

それでも奈瀬は、その手を打った。

「これしかない!」

「それはっ!?!」

和谷は考えてもいない一手に、一瞬はつとした。

「いや、しかし……」

少し考えて、対応する。

奈瀬も一手一手時間を使いながら、手を進めていった。

(佐為、この手つてもしかして)

『ええ、最善手順ですが——奈瀬が一手一手時間を使っているのが気になります。確認のために時間を使っているならいいのですが……』

そして、佐為の不安は的中した。

『いけません!』

(え?)

奈瀬がとある一手を放った時だった。

『そこではなく、もう一路遠くに打たないといけないのです!』

(もう一路? でもそれじゃあバラバラに……)

『深く読むと、ギリギリで繋がっているのです。やはり、見えていないとしたらこの手だとは思っていましたが……おそらく、この手は誰も見えてないのでしよう。それほどに難しい手ではありました』

(え、でもじゃあ明日美先生が間違えたってこと?)

『そうなります。この手順を読み切れぬままに打ってしまった代償は重くつきますよ』

(そんな……)

そして、和谷は奈瀬の一手を完璧に咎めた。

それはもうすでに逆転の余地がないほどに。

「……ありません」

奈瀬は、力なく告げた。

「ありがとうございます」

「……和谷、ありがとう。私はプロになれないって分かったから」

そう言って、ふらりと立ち上がり、玄関に向かった。

伊角はその弱弱しい背中に、言葉をかける。

「奈瀬! 本当に諦めていいのか!」

「じゃあ今日みたいな碁でプロになれるって本気で思っているわけ!?!」

奈瀬は振り返り、そう言い放った。

「それは……」

言葉に詰まる伊角。

奈瀬の瞳からは、涙がこぼれていた。

「……みんなもありがとう。じゃあね」

奈瀬は力なくそう言って、帰っていった。

一方、部屋には沈黙が流れた。

その中で沈黙を破ったのは、男装斜陰ユウだった。

「和谷は本当にこれでいいと思っっているの?」

「いいも悪いも、奈瀬が決めることだしな」

「違う……」

「え?」

「違うよ！ 才能あるのに引導渡しちゃダメでしょ!？」

「才能って……そりゃ、あるかないかで言えばあるだろうが」  
直後。

斜陰は黒石を持って、

パチン！

と、とある地点に叩きつけた。

そのまま、急いで部屋を出て、奈瀬の後を追うのだった。

「ユウの奴、あんな熱い奴だったっけ？」

和谷は斜陰が出て行った後の玄関を眺めながら、そんな風に呟いた。

「あ、もしかして、奈瀬のこと好きになったとか？」

「……和谷、この手」

伊角は、その黒石が打たれた場所を呆然と見ていた。

「ん？」

「これ」

「ああ、なんかユウが叩きつけて行ったけど」

「この手って、奈瀬が暴発した手順で……この手があるなら」

「は？ そんな手があるかよ」

伊角と和谷で局面を再現する。

「こうしたら？」

「それならこうで」

「……じゃあ、こうなら？」

「それもこれで問題ないんじゃないか」

「……」

和谷はその手が成立していることに気付いた。

「まさか」

「ああ、この手があるならむしろ和谷の方が悪い」

斜陰は奈瀬の後を追った。

（読み切れなかったのに打ったっていうことは、読み切って打つより

も才能が必要だと思う！ それに、明日美先生にはまた一緒にテレビに出てほしいから！)

「待って！」

奈瀬を呼び止めたのだった。

奈瀬の師匠は・・・

斜陰は呼び止めた。

黒髪美人の奈瀬が振り返る。

「明日美——じゃなくて、奈瀬さん！」

「あなたは……もしかして、さっきいた子？」

「そうなんだけど、えつと……」

呼び止めたのはいいが、どう声をかけていいか分からない斜陰。

沈黙が場に流れる。

先に口を開いたのは、奈瀬だった。

「……もしかして、諦めないで、とかそんな感じ？ でもごめん。もう無理なんだ」

そう言って、奈瀬は背を向けようとする。

「——楽しかった？」

「え？」

「あの時、えーと、斜陰とテレビで打った時、楽しかった？」

「……でも、私、あの時は、弱いものいじめみたいな碁を」

「僕は楽しかったかを聞いてるんだよ？ 和谷はああ言ってたけど、

斜陰は本当に心の底から楽しんでいたと思うよ？」

「……」

奈瀬は顔を伏せてしまった。

男装斜陰はそのままの状態で話しかける。

「僕はさ、斜陰と一緒にまたテレビに出てほしい」

「……」

しかし、奈瀬は顔を伏せたままだった。

斜陰は内心想う。

今の格好じゃ、ただの他人。名前も知らない少年Aでしかない。

そんな初対面の人の話を普通、聞くだろうか。

答えは否だ。私が説得するにはアイドルの格好じゃないとダメだ

！

しかし、正体をバラすわけにもいかない。

斜陰はどうすればいいかと、悩んでしまう。

「ごめんね、そう言ってくれたのは嬉しいけど……私じゃプロにならないみたいだから」

やはり言葉は響いていない。

どうしようもないのか――

そう思ったとき、奈瀬の悲しそうな横顔が目映った。

同時に当たり前の事実気付く。

奈瀬のプロになりたい気持ちは、本物だ。

そして同時に、プロを諦めようとしていることに。

なら大丈夫。

「ちよつと待ってっ!!」

斜陰はメモ帳とペンを取り出して、何やら書く。

そして、その紙を渡す。

「ほらー」

「えっ」

奈瀬はその紙を見た。

そこには日時と場所が書かれていた。

「もし、まだ諦められない気持ちはあるなら、ここにきて」

「それって……」

斜陰は真つすぐに奈瀬の目を見る。

奈瀬と斜陰の目が合った。

「一応貰つとく。けど、たぶん行かないよ」

「それでも待ってるから! 絶対にプロになれるから!」

そして、奈瀬は去っていった。

『奈瀬、来ますかね?』

その後ろ姿を見ながら、佐為はひよつこりと尋ねた。

「来るよ、もちろん」

明日美先生の囲碁への気持ちは、佐為にだって引けを取らない。

だから、絶対に来る。

斜陰はそう思ったのだった。



\*

奈瀬は、悩んでいた。

辛く苦しい日々。

結局のところ、それから逃げ出したかっただけなのだ。

プロへの気持ちを諦めるために、和谷と打った。

そして、完敗を喫した。

これで辞められる、そう思った。

でも、知らない男の子に渡された紙。

この切符があれば、もしかしたらまだプロを目指せるのかもしれない。そう思ってしまったら、プロを目指すための灯（ともしび）が消せやしない。どうしても残ってしまう。

奈瀬は悩んだ。

しかし、結論は決まっていた。

一週間後、その場所に向かうのだった。

\*

その場所は煌びやかな場所だった。

都心のだ真ん中のあるビルの中、エレベーターで高層階へ向かう時からなぜか緊張してしまうような、そんな場所だった。

とある高級レストランっぽいところ。

その入り口で、本当にここで正しいのかな、と思い、でも紙に書いてある通りだし、と何度も繰り返す。

そんな風にグダグダしていると、感じの良い店員がやってくる。

「お客様、どうかされましたでしょうか」

「えっと……ここで待ち合わせをしているんですけど」

「お名前を伺ってもよろしいでしょうか」

「奈瀬です」

「奈瀬様ですね、お待ちしております」

そして奥の個室へと案内された。

「明日美先生！ 待ってたよ！」

「……え？」

奈瀬は目を見開いた。

そこにいたのは、大人気アイドル、溝口斜陰、その人だったのだから。

「え、えっとお久しぶりです」

「明日美先生固いよ！ 私の方が年下なんだし、敬語なんて使わないでください〜」

「あ……うん。でもびっくり。まさか来てみたら斜陰ちゃんがいるとは思わないでしょ。もしかして、あの子って弟とか？」

「あー、うんまあそんなとこ」

高級そうな椅子に座る前に、奈瀬は言わなければならないことがあったことを思い出した。

「あの、ごめんなさい！ 私、ひどいことをしちゃって。あんな弱いものいじめみたいな碁……」

「でも私は楽しかったけどね〜」

「……本当に？」

「うん、もちろん！」

「そうなんだ……でも、やっぱり悪いことをしたから、ちゃんと謝らせてください！ ごめんなさい！」

「あ、全然大丈夫」

「ありがとうございます！」

「こつちこそ、来てくれてよかったよ」

「それは、だって、プロになれる可能性があると思っちゃったから。せっかく引導を渡してもらったのに、希望を見せられたら、諦めきれないよ」

奈瀬は悲しそうに、そう言った。

「大丈夫、明日美先生はプロになれる！」

「え、でも……というか、私をここに呼んだ理由って何？ もしかしてまたテレビに出てほしいとか？」

「違うよ。理由は1つしかないでしょ？」  
「え？」

「明日美先生がプロになるための会議に決まってるじゃん！」  
「いや、でも斜陰ちゃん1人だけで？」

「この個室には斜陰と奈瀬だけだ。」

「もちろん、私が明日美先生を強くできるわけじゃないよ。でもやれることはある」

「というと？」

「最高の師匠に鍛えてもらいます！」

「え？ 最高の師匠？ 誰？」

「きつと明日美先生も知っている人だよ？ 人かな？ 人ではないかもしれないけど」

『ひどいです！』

(だって幽霊だし)

「……人ではない？ なのに、私の師匠ができるくらい強い人？」

奈瀬は、疑問をそのまま口にする。

「そう、そして私が知る限り世界最強でもある！ その師匠は、じやかじやかじちゃん、じゃん！ shineです！」

「え？ 斜陰？」

「私じゃなくて、ネットの死神とか呼ばれてるやつ。私としてはそんな可愛くない呼ばれ方は好きじゃないけど」

「あー、そっちの方かあ〜ってええっ!? あの shine!?! 人ではないかもしれないってそういう」

「そうそう」

「斜陰ちゃんは知り合いなの？」

「まあ、そんなとこかな。生身では会ったことないけど」

『ううう……ユウコさんがいじめます』

(いやでも事実だし)

「もしかして碁を始めたのも」

「否定はしない」

「でも、斜陰ちゃんって私の時で2局目って言ってたけど……打って

もらっていたわけじゃないんだ」

「私はずっと観戦。たまに佐為に聞いたりするけどそれくらい。で、この話どうかな?」

斜陰は奈瀬に尋ねた。

「本当ならこれ以上ない話だけど……でも本当に、そんなすごい人が私の師匠をやってくれるの?」

「喜んでやってくれるよ!」

(ね、佐為?)

『ええ、もちろんです!』

そして、メールアドレスを交換した。

「ネット碁でしか打てないし、時間も不定期になっちゃおうと思うけど、佐為と打つ時間は前もって連絡するから」

「あ、さっきも思ってたけど、s a i呼びなんだね」

「sh i n eじゃ私の名前だし」

少し間があって、奈瀬はトーンを落として言う。

「あのさ……斜陰ちゃんに聞くようなことではないかもしれないけど、s a iが師匠になってくれたら、私はプロになれるのかな」

「絶対なれるよ!」

(そっか?)

斜陰は自信をもって聞いた。

『いえ、絶対ではありません。奈瀬が自ら努力することが一番大切です。私にできるのは、正しい方向に導くことだけ』

(そっか……)

佐為はそう答えた。

「ごめん、明日美先生。プロになれるかどうかは、明日美先生次第かな」

「そりゃそうだよね、でも最後にもう少し頑張ってみるよ!」

そうして、佐為と奈瀬の師弟関係がスタートしたのだった。

## 奈瀬とアイドル

メールで指定された初めての対局。

現在のワールド囲碁ネットには、レート制が導入された一方、レートのやりとりのないフリー対局も今まで通りできるシステムとなっていた。

夜遅くの自室。

コップを横に置き、準備は万全だ。

奈瀬はパソコンの前で、フリーで対局を待っていた。

「時間はそろそろだけど……」

あのネット碁最強——いや、ネット碁最強どころか、世界最強や歴史上最強とまで言われ始めた『shine』。

そして4年前に現れたsaiと同一人物であることは、和谷などのネット碁の猛者の間では共通認識だった。それにアイドル斜陰も、『サイ』と言っていた。2年前、当時5冠王だった塔矢行洋に勝ち、以後姿を消したあのsaiだ。

そんな生ける伝説と、今——

——ピロリン。

「対局の申し込みっ！……名前は『shine』っ！」

手合いは、4子局。

すべての隅の星に黒石が置かれた状態で対局はスタートした。

shineの……いやsaiの白石は、奈瀬から見ても、変な手はなかった。あつと言いたくなるような手もあつたが、それも打たれてみれば納得だし、自分でも考えれば思いつきそうなものでもあつた。けれど、最初持っていたはずの貯金はガリガリと削られていく。

奈瀬がどれだけ必死に食い止めようと思っても、まるでどうしようもない。

「終局間近……形勢は……私が少し悪い？」  
気付けば、形勢はやや不利というところまで来てしまっていた。  
当然、そんな状態から逆転などできるはずもない。  
ピロリン——

——奈瀬は投了した。

力が抜け、背もたれに体を預ける。

奈瀬はぼんやりと、パソコンの画面を見ていた。

しかし、感慨にふける暇はないらしい。

『Assumiさん、このまま検討します』

shineからのチャット。

今まで一度もチャットに応じたことのないshine。

sai時代には、数度あったようだが、shineとして復活してからは一度もなかったチャットが表示されていた。

『お願いします』

奈瀬はとりあえず、そうチャットを返した。

しかし、shineの対局だ。

世界中から数多の碁打ちたちが観戦している対局だった。

『Wow, shine is chatting?!』

『Hey, what does he say?』

突然の英文。

韓国語や中国語も流れて始めた。

一瞬で場はお祭り状態と化す。

「うわ……チャット1つしただけで、やっぱりsaiはすごい……」  
改めて、奈瀬は今戦った相手が世界中から注目される存在であることを再認識した。

プルルルルル

携帯が鳴った。

電話がかかってくるようだ。

「もしもし?」

『明日美先生、ちよつとこれは想定外だったよ』

「あはは……って、斜陰ちゃん!？」

その声、そして明日美先生と呼ぶのは一人だけ。

「なんで斜陰ちゃんが!？」

『メール交換したときに一緒に電話番号も教えてくれたじゃん』

「えーつと、そつちじゃなくて、なんで突然電話なんかかけてきたの？」

もしかして斜陰ちゃんも観戦してた？」

『まあ、そんなとこ』

斜陰ちゃんからの電話に驚きつつも、平静を保とうとする。

「でも、すごいよね。たった1つチャットしただけで、すごい盛り上がり」

観戦者は爆発的に増え、チャット欄は高速で流れている。

『うーん、チャットはダメそうだから、電話で検討するよ。と言ってもあんまり長くするつもりはないけど』

「アイドルのお仕事で忙しいもんね?」

『そうなんだよ、本当に長くて、短くなるように交渉しようかと悩んでるくらい……』

「やっぱり、大変なんだね……それで検討? って、斜陰ちゃんがしてくれるの? わざわざ?」

『そうそう。佐為は私がいないと何もできないし……え、でも事実じゃん? 私にしか見えない幽霊だから』

後半は小声で言っていたので、うまく聞き取れなかった。

「え? 今なんて?」

『あ、ごめんごめん、こつちの話』

「でもそうじゃないかって言われていたけど、s a iは病気で一人では碁は打てないって本当だったんだ」

『……うんまあ、だいたいそんなとこ、かな』

奈瀬は、どうしてそのs a iが斜陰ちゃんと一緒にいるのか、とかいろいろ聞きたいことはあったが、深入りしてほしくなさそうな感じだったので、詮索するつもりはなかった。

気になるか気にならないかで言えば、もちろん気になるが、s a iと打ってもらえるだけでこれ以上ないことだと分かっていたから。

そして、碁の検討が行われた。

『だから、そこはそうじゃなくて、10の3に打った方がよかつたって  
佐為は言ってるよ』

『全然考えてもいなかった。ここはその一手かと……』

そんな感じで検討が終わった。

なお、佐為は、軽めでもお願いされたので、一番重要なところを数  
点指摘するに留めたのだった。

『あく、でもよくこんな何の何、みたいな言い方で分かるね？ 少しく  
らいならなんとか追えるけど、十手とか進むともうわけわかんないよ  
〜』

『あはは、これは慣れれば誰でもできるようになるって』

『ん？ ……明日美先生』

少しの沈黙の後、斜陰は少し改まった感じで言っていた。

『どうしたの？』

『佐為が、師匠として伝えたいことがあるって』

『え!?!』

奈瀬に緊張が走る。

そして電話から、伝えられるsaiの言葉。

『佐為曰く、明日美先生に足りないのは、格上との対戦経験だつて。で  
もこうやって自分と戦うだけじゃ、十分な量の経験は得られない。だ  
から、自分と打てない時は格上と戦って、経験を積んでほしいって』  
『それはそうだけど、でもどうやって?』

『ネット碁で少なくともレートが200離れた相手に挑戦し続けて。  
離れている分にはどれだけ格上でもいいけど、少なくとも200以上  
の格上の相手をやるように、だって』

『わ、分かった。やってみる』

そうして、奈瀬は、最強の師匠と超人気アイドルとの日々が始まっ  
たのだった。

\*



ワールド囲碁ネットのシステムでは、格下と戦った方がレートが上がりやすいと言われている。

これは言い換えると、格上と戦うとレートが下がりやすいということ。

そういう状況もあって、奈瀬が対戦相手に困ることはなかった。

奈瀬は四六時中、ネットの猛者——それも明確な格上、つまりプロ級の碁打ち相手にしのぎを削った。

当然、奈瀬のレートは下がる。

しかし、自分のレートが下がりすぎれば、格上狙いを一時的にやめて、レートを適正に戻せばいい。

そして再び格上に挑戦し続けた。

奈瀬は、s a iと斜陰というすごい人たちに力を貸してもらっている。

そう思ったら、手なんて抜けなかった。

今までの人生で間違はなく一番真剣に碁に取り組んでいたのだった。

\*

「で、これはどういうこと?」

佐為に弟子入りして、一か月が過ぎた頃。

奈瀬は、テレビ局のスタジオにいた。

そこは照明が眩しくて、無駄に天井の高い部屋だった。

「囲碁のレギュラー番組を作ってもらったんです」

「それは分かるけど、なんで私?」

「そもそも、明日美先生。どうして私が明日美先生を囲碁の道に留めたか、分かります?」

斜陰はにやりと笑いながら、そう言った。

そんな笑顔でも、すごくかわいらしいんだね、と奈瀬は若干、現実逃避気味の思考をした。

嫌な予感しかない。

「つまり、一緒にテレビ番組を盛り上げましょう！」

斜陰はアイドルスマイルで、腕を掲げた。

「あのーですね、ご存じかもしれませんが、囲碁ってインドア系の遊びなのよ。そんなゲームにハマる私は、当然インドア系であって……こういう場所は苦手なのよ」

「そっくりそのまま！ そっくりそのままだよ、明日美先生！ 囲碁にハマった私も当然、陰の属性！ でもこんなに頑張っているんだよ？ それに慣れれば、スタッフを風景の一部と思えるようになるよ」

「それはそれでどうなわけ?? スタッフを風景の一部って……」

「でもそのくらいの境地に達しないと、心がパンクしちゃうよ?」

「冗談で言ってる? 本気?」

「私は嘘はついたことないから」

「じゃあ冗談ってことね?」

「そうとは言っていないけど?」

奈瀬は自分がいつの間にか笑顔になっていたことに気付いた。

まだ一か月なんだ。

でも世界の見え方は、全然違っていきようだった。

奈瀬の日常は、いつの間にか闇から抜け出し、光り輝くものになっていた。

アイドルモチベ0%? 100%?

時系列は少し戻り、佐為が奈瀬の師匠になった頃。

「私、やっぱりおかしいと思う」

『おかしい? なんのことですかユウコさん?』

「私の休みのこと。私の休みてやっぱり少なすぎると佐為も思うでしょう!」

基本は週休1日というブラック労働。

もちろん、毎日の労働時間も8時間を余裕でオーバーしている。

完全にアウトなんですけど……

『アイドルという職業は大変なんですネ』

「予定詰め込みすぎなんだよ」

ということだ。

斜陰は、1つ決心した。

休みを増やしてもらおうと。

「てか、なんならアイドル辞めてもいいんだけど? 佐為もそっちの方がいいでしょ?」

『……私は今でも十分に感謝していますよ。ただ和谷は悲しみそうですが』

「あー」

『それにユウコさんはまだ、辞める気はないのでしょうか?』

佐為は、斜陰に聞いた。

「まあね。ちよっと、アイドルの間にやっておきたいことができちゃったから」

そして。

人気アイドル溝口斜陰は、事務所でマネージャーと話していた。

「休みを増やしたい?」

そう。

斜陰は交渉していた。

「そう！ 私の休みが少なすぎるから！」

「人気絶頂の今頑張らないでどうするの？」

「それ半年前にも聞いたんですけど？」

「あー、はは、いやあ、まさかこのレベルの人気がこんなに続くとはね……」

マネージャーも、斜陰の圧倒的な人気がこんなに続くとは思っていなかった。

今や、国民的アイドルとしておじいちゃんやおばあちゃんまで知っているようなアイドルになりつつあるのだ。

「とはいえ、確かに今、斜陰ちゃんに倒れられたりしたらヤバいし、休みを一日増やすくらいなら私の力でもなんとかできるとは思うわ」

「え!?! 週に一日ですか!?!」

「いえ、月に一日」

「……」

「……」

沈黙が流れる。

とそこで、社長が現れた。

「話は聞かせてもらったよ」

「社長！ 勝手に休みを一日増やす約束をしてしまったのですが……」

「いいよいいよ。休みを増やすこと自体は問題ないよ。ただ、恋愛だけは今の間だけはやめてほしいかな。今が斜陰というイメージを世間に浸透させているところだからね。このタイミングのスキキャンダルはやめてほしいかな」

「もちろん、恋愛なんてするわけないよ」

斜陰は素で答える。

「私は、碁をやりたんです。だけど、今の休みじゃ十分にやれないから」

「あー、そういうことね。それならむしろウエルカムだよ。碁のできるアイドル路線は、意外と反応が悪くないっぽいかな？」

『アイドルが碁を嗜む時代……私も誇らしいです』  
と佐為は言うが――

「――特に年齢層の高いところの男性に刺さっているっぽいよ」という社長の言葉に、佐為はガクツとうなだれた。それはつまり、碁を主にやっているのが年齢層の高い男性ということ。

次の時代を背負う子供たちには、碁は一般的なものではないということでもあった。

――しかし、ユウコさんに願うべきではないのでしょう。もっと子供たちに広まって欲しいとは思いますが、これほどネット碁をさせてもらっているのに、さらに碁を世界に広めることなど……

佐為は、斜陰を覗き見る。

その立ち姿は、きらきらと輝いているように見えた。

「それで社長！ 相談があるんです！」

「……ほう、何かな？」

斜陰は、社長に言う。

「私、囲碁番組をレギュラーでやりたいです！」

『ユウコさんっ……！ まさか！』

（佐為、これは別に佐為のためってわけじゃないよ。私がやりたいからやっているんだ）

斜陰は、心の声で佐為に言った。

社長は、あごに手を当てて、

「囲碁番組、か……」

と考えている。

『……いけますかね？』

（大丈夫、このくらいは大丈夫なはず）

そして、社長が口を開く。

「斜陰ちゃん。碁をやるのは社長としても賛成だから、囲碁番組のレギュラーは大賛成だよ」

その言葉に、斜陰と佐為はハイタッチする。

もちろん、佐為の見えないマネージャーと社長は困惑していた……  
「……………ほん、えー。そうだな、いつそ、毎週碁をやる日を作るっていうのはどうだ？ 毎週囲碁番組をレギュラーで作って、さらに毎週囲碁をやっているNHK杯？ とかいろいろの司会にもなるか？」

「え？ 囲碁をやる日!?!」

斜陰の輝きがより一層強くなったように見えた。

「ぜひやりたいです!」

「あはは、まさか斜陰ちゃんがこんなに碁にハマるなんて思わなかったよ。突然趣味に碁って言い始めたときはどうなるかと思っただけ……」

「碁は面白いからハマるのは当然だよ?」

その大人気アイドルは、心の底からそう言うのだった。

——もしかしたら、あなたなら世界を変えてくれるかもしれないかもしれませんね。

佐為は碁がもつと人気になる未来を、期待してしまうのだった。

\*

とある囲碁イベントの会場では、通常では考えられないほどの混雑をしていた。

「アイドルってこんなにすごいのか。最近イベントもすごい人って聞くし、今回も」

あまりイベントに参加しないタイプの棋士である伊角も、今日は囲碁イベントに駆り出されていた。

「……………そうだな」

「どうしたんだ、和谷。珍しく元気がないのか？」

「ちげーよ、ちよつと考えてただけだ」

「なんだ、また斜陰のことか?」

「そつちじゃねーよ、最近s a iが奈瀬と打っているらしいことだ」

「そうなのか!?! ネットの死神と奈瀬が!?!」

「ああ、まず間違いねえ。奈瀬の方は『Assumi』って名前だし、棋力や打ち筋も俺たちの知っている奈瀬そのままだ」

「……でも、まだ碁を続けているんだね。引導を渡した側でこんなことを言うのもあれだけど、やっぱり一緒に切磋琢磨した仲間として、同じプロになって欲しいからね」

伊角はそう言うが、和谷の考えていることは違った。

「……俺たちはプロを諦めてきた奴を何人も見てきた。家庭の事情とか、周りの環境とか……純粋な碁の実力や才能だけでプロになれるか決まるわけじゃねー」

「つまり？」

「あのときの奈瀬に引導を渡したのは、別に間違っただけのことだ」

和谷は不満顔でそう言った。

「和谷、お前奈瀬を羨ましがっているだろ」

「うっせー!! そりゃ、俺だってsaiに教えてもらえるなら、弟子入りでもなんでもするさ!!」

と和谷は言った。

思った以上に大声だったことに気付いて、周りを見回す。

「……あ、これ師匠には内緒な」

「あ、ああ、もちろん」

「だが、ありえねーのは、奈瀬の方だ。saiと奈瀬の初対局のときに、saiがチャットをしたんだ」

「saiがチャットを? 確か、新しいアカウントになってからはチャットは一度もしていないんじゃないのか?」

「ああ。しかもその内容が『Assumiさん、このまま検討します』だ。もちろん、世界中の観戦者がコメントできるところで、まともな検討ができるわけがない。奈瀬は『お願いします』と返したが、それからsaiはチャットをしていない」

「つまり？」

「おそらく、電話かメールか何かは分からないが、チャットとは別の方法で検討している。その証拠に、いつも対局が終わった後、奈瀬とsaiはすぐには退席せずに留まっている。これは対局終わりに検討

しているからだ」

「それが本当なら、俺たちにも聞かせてほしいね」

「それはそうだが、伊角さん。一番重要なのは、そこじゃねーよ」

和谷は真剣な顔つきをする。

「どうやって奈瀬はs a iと知り合ったのか？ それに奈瀬はあのとき、俺が引導を渡して帰るところだった。あのままなら、奈瀬は碁をやめるはずだった」

「いや、引導を渡しても簡単にやめられるとは限らないんじゃないか？」

「それはそうだ。俺たちから碁を取ったら何も残らないし、息を吸うように碁をやってしまうからな……だが、それだけじゃねー。あの時、ユウは奈瀬を追いかけた」

「その可能性もあるって言いたいのか？ ユウは初対面だったからわからないが、もしかしたらs a iと関わりがある？ 確かに棋風が似ているとは思ったが」

「……伊角さん。前に話したことあったよな。s a iの仮説。s a iは何らかの理由で一人では碁を打てない。ネット碁をやるには協力者Xが必要なんだ。そして、4年前はXが進藤だった」

「ああ、それは聞いたよ」

「今のXに一人心当たりがある」

和谷は、そして言った。

「今のXは、ユウの可能性がある」

和谷の勘の良さ。

特に囲碁に対する勘の良さは、ユウの秘密にまで届いていた。

そして、同時に、和谷の脳裏にありえない可能性がよぎった。

もしかしたら、ユウはXなんかではなく、s a i本人なんじゃないか、とも。

ユウが飛び出していった時、俺も伊角さんも気付かなかった一手を指摘した。あれが偶然起きたとは考えにくい……だとするとユウがs a i自身の可能性も……普段は手を抜いているのか？

いや、それはない。あの生意気なユウが、s a iとつながるように



は思えない。それに棋風が似ていることも、却って違和感がある。s a i クラスなら、棋風すら変えて違和感なく演技することくらい造作もないはずだ。

やはり、あの一手だけでユウ || s a i とするのは無理がありすぎる。

だが、本当にそうなのか？

あの瞬間だけ、ユウの棋力は確実に s a i 並みだったように感じる。

そこだけが、和谷の中で大きな違和感となっていた。

だから和谷は最後、付け足すように言った。

「……Xがユウというのは、もしかしたら間違っているかもしれないけど、ユウには何かあるのは間違いがねーぜ」と。

## ワールド囲碁ネットを手に入れよう①

「やっぱり、これじゃあ嫌だよ！」  
夜。

shineとAsumiのネット碁が終わり、電話での検討をしていた時、斜陰はそう言った。

『え？ 斜陰ちゃん、急にどうしたの？』

電話越しで奈瀬が心配する。

「だって、私だけのけ者にされること多いし……長々と符号言われても、ついていけないって」

斜陰は言う。

局後の検討でついていけないことが多いと。

というのも、電話で検討すると、どうしても符号のやり取りになっ  
てしまう。

その符号を、脳内に並べなければならない。

奈瀬と佐為にとっては何ら問題はなかった。符号でのやりとりでも、正確に脳内にイメージできていた。

けれど、斜陰は違った。符号を言われて、なんとか会話についてい  
くだけで精一杯。おいて行かれること多々あった。

棋力の高い奈瀬や佐為には問題ないことでも、斜陰には問題大あり  
という状況が発生していたのだ。

『……確かに。これからは斜陰ちゃんもついていけるようにゆっくり  
やるね』

「違う」

『えっ？』

斜陰の頭の中では、すでに解決策まで浮かんでいた。

「そうじゃない。変えるべきは、明日美先生じゃない」

『えっと、じゃあ……saiとか？』

「それも違う。まあ私の実力が伸びればそれが一番いいとは思うけ  
ど、いつになるか分からないし……」

斜陰は言う。

「変えるべきは、ワールド囲碁ネットだよ」

『え!?!』

「それに……地味に、過去の棋譜がなくなってしまうのも嫌だったんだよね。明日美先生の野良対局も、今はわざわざ見たいときは明日美先生にメールを打ってもらっているし」

『別にそれくらいはなんでもないけど……』

「それにもう1つ、一番の理由はこれかも？ 絶対にこれだけは直してほしいっていうのがあるし！」

『え？ そんな変なものってあったっけ?』

「あるよ、誰からでも対局申し込みができるっていうシステムだよ！」

「これのせいで申し込みを拒否しても、またすぐ別の人から挑戦が来て……っていうループに入ることがあるから！ 私がレートが一番高い人とかやらないって知らないのかなっていつも思っている」

『あー、なるほどね。s a iになら、ダメ元でも挑戦したくなる気持ちはわかるかも』

「でも、結構めんどくさいんだよねー。特に2局目とか3局目とか、連続で打つ時は結構なるんだよねー」

『確かに、それは直したいね!』

「明日美先生、分かってくれる!?!」

『ええ、私はそんな状態になったことないからイメージだけど……でもめんどくさいよね』

「うんうん、めんどくさいんだよ……とということで、明日美先生に指令を渡す！」

『指令?』

「明日美先生は、ワールド囲碁ネットの管理者？ みたいな人に連絡取って、機能向上をお願いして！」

『え？ 私が？ そんなことやったことないよ?』

「でも私もやったことないし……わ、た、し、は、忙しいし！」

『……ニートでごめんなさいね』

一応、週1程度バイトをしている奈瀬だが、実態はほぼニートと変

わらないのは、本人が一番よく分かっていた。

いや、就職活動中とか、試験勉強中とか言うのも、見方によっては不可能ではないが……

『じゃあ、私頑張ってみるよ、結果は期待しないでね』

「うん、期待して待ってるよ」

『期待しないでよね……』

そうして、奈瀬にミッションが与えられたのだった。

\*

次の日の朝、今日は待ちに待った休日だった。

斜陰が目を覚ますと、佐為が話しかけてきた。

『それで、今週の休みは、また和谷のところへ行くのですか？』

「……いや？ いかないけど」

斜陰は答える。

「一か月くらい、休日はちゃんと休もうかなって思ってるんだ。最近  
は佐為が満足できる対局も少なかったかなって思うし」

『いえ、奈瀬と打つのも楽しいですよ』

「まあ、佐為は関係なく、最近なんかいろいろあったような気がする  
し、ちよつと休もうかなって思ってたよ」

斜陰は自室の高級ベッドで寝そべりながら、携帯を開いた。  
ふわあ、とあくびをしながら、来ていたメールを確認した。

~~~~~

From: 和谷

お前、今度はいつ来るんだ？

~~~~~

斜陰は返信する。

~~~~~

ＴＯ：和谷

ちよつと忙しいから、一か月くらい会えないかも？

~~~~~

「私が忙しいのは本当だし……つてことで今日はひきこもるぞー！」

『休むことも人間には必要ですからね』

「佐為には必要ないかも？」

『どうなんでしょうね……あんまり考えたことがなかったですが』

そうして久しぶりに、斜陰は一日中、s a iでネット碁に明け暮れるのだった。

\*

『斜陰ちゃん、今日は暇だったみたいね……ずっとs a iが対局してたからびっくりした』

「今日は休日だったからね」

『……まあ、お休みはなくて、毎日仕事してたらそれはそれで問題だけ』

「そうそう」

夜になり、いつものように一局打った後、電話で話していた。

『それで、さっそく管理人さんに連絡してみたよ』

「どうだった？」

『それがダメだって言われちゃって……時間がないからできないって』

奈瀬は言った。

「そっかー……というか今更だけど、明日美先生って英語できたの？」

『え？　なんで急に？　英語なんてできないけど。学校で習っただけだし』

「じゃあメールって何語で？」

『日本語だけど？』

「……それで返事も日本語？」

『ええ』

「変なところなかった？ 管理人は海外の人かと思ってたけど、もしかして日本人なのかな？」

『あつー。そういうこと!? 確かに、日本語に変なところはなかったから、日本人なのかも』

「でも、時間がないからっていうけど、そもそもお金ってどうしてるんだろう？ こういうサイトって私たちは無料で使っているけど、作るのってお金いらなのかな？」

『詳しくないけど、いるんじゃない?』

2人とも、コンピューターのことは全然知らないので憶測で話すことしかできなかった。

もちろん、佐為も知っているはずがない。

「お金が必要って話なら、私がお金を出してもいいけど?」

『え? いいの?』

「少しくらい……数百万くらいなら大丈夫だから」

『……斜陰ちゃんがトップアイドルだって思い出したわ』

「でもせっかく、日本人なら会ってみてもいいかもね」

『え!? 斜陰ちゃんが!』

「私がお金をあげないでしょ! 明日美先生が会うんだよ」

『ええ……あんまり……そういうのは苦手だし』

「明日美先生ならできるよ! まあ会わなくてもいいけど、お金は払ってもいいって言って、交渉してみてくださいい」

\*

そして数日後。

『お金が出せるならやってもいいけど、その前に一度顔合わせをしたって』

いつものように電話で、奈瀬が報告した。

斜陰は言う。

「会えるんだね! でもやっぱり、ネット上だけでお金のやり取りを

するのは、普通は怖いよね〜」

『そういうもの?』

『ごめん、適当言った』

『でも確かにそうかも。それで、その管理人も東京に住んでるらしいから、すぐ会えるみたい』

奈瀬の朗報に、斜陰のテンションが少し上がった。

「それでいつ会うの? 明日美先生は明日は暇なはずだから、明日?

明日もって言った方がいいかもだけど」

『えーと、ちよつとまだ決めてない』

「え? なんで?」

『だって、斜陰ちゃんも一緒にどうかなって……私、一人で会うの?』

「いやいや、私はまずいって!」

『うん、わかってる。斜陰ちゃんも一緒に顔合わせするのは無理なのは分かってる。けど、近くから見えてくれているだけでもいいから、一緒にいけないかな?』

「えー」

あんまり行く気はしない。面倒そうだし、楽しくもなさそうだし。

と斜陰は思った。

『ユウコさん、奈瀬はおそらく、知らない人とたった一人で会うということが不安なのでしょう』

「なるほど、でも、う〜ん……」

確かに、不安になる気持ちは分かる。

しかし、せっかくの休日を潰すようなことはしたくないのだ。

それに私が近くにいるだけで、何の意味がある?

「それなら、明日美先生のホーム的な場所で会えばいいんじゃない?」

『え?』

「例えば、よく行った碁会所とか」

『なるほど、確かに、それならいいかも』

その後、奈瀬と管理人との間で何度かやり取りし、実際に会う日時は決まった。

そして奇しくも、その日は斜陰の休日でもあった……

## ワールド囲碁ネットを手に入れよう②

今日は、奈瀬とワールド囲碁ネットの管理人が会う日だ。

『それで何で、来たんですか？』

佐為が尋ねた。

ここは、待ち合わせの場所——碁会所であり、そんな場所で男装斜陰は、おじさん相手に碁を打っていた。

（まあ、休みも増えたし、今日くらいはギリギリ許容できるかなって思ってた）

そもそも、斜陰は奈瀬に今日が休日と教えたわけじゃない。

完全に偶然、斜陰の休日と、会う日が被ったというのが発端だった。

（それなら、来てみるのも面白いかなって）

『ですが、もし奈瀬に見つかったらどう言い訳するんですか？』

佐為から突っ込まれる。

一応、今は入口からは死角になる場所で対局を行っているが、バレてしまう可能性は十分にあるだろう。

（ていうか、ユウと私の関係ってどうなっているだっけ？ 明日美先生は和谷には言っていないと思うけど、明日美先生はどう思っているんだっけ？）

『ええっと、確か、ユウの時に待ち合わせの日時を指定して、その場所に奈瀬が来たらユウコさん——アイドルとしてのユウコさんがなぜかいたっていうのが、奈瀬視点だと思います』

（ユウと私との関係性みたいな話ってない？）

『それは一度もされたことがないかと……』

（なるほど……）

碁をぱちぱちを打ちながら、斜陰は考える。

（一番それっぽいのはなんだろう？ ユウを私の弟っていう設定にするとか？）

『ですが、和谷には高校生って言っていないませんでしたっけ？ そうなるとユウコさんに同学年の弟がいるということに……』



(じゃあ、実はユウは中学生ってことにして、和谷には嘘をついていたっていうことでよくない?)

『確かに、それなら矛盾はないですか』

パチリ、斜陰は脳内でしゃべりながら、碁を打つ。

対戦相手のおじさんは、苦い顔をした。

「ひやあー、坊主、強いね。中学生かい？」

「……そうです」

「いやー、こりやまいったまいった」

そう言いながら、おじさんは逆転のための一手を盤に打ちつける。

「だが、おじさんも、そう簡単には負けるつもりはないぞ。しぶとさばっかり、上達するからいけねーや」

おじさんの放った一手は、確かに簡単な一手ではなかった。

盤面、確実に優勢なのは斜陰の方だ。

しかし、具体的にどの手を打てばいいかとなると、なかなか難しい。すつきりしない。どの手でも良さそうに見えるし、けれど、大きなトラップが潜んでそうでもある。

——この者、自分で言うだけはある。なかなか上手い勝負の仕方をしてきましたね。

佐為は内心、そう思った。

だが、しかし。

斜陰の心は違った。

(佐為、この一手は甘いよね)

『……さてどうでしょうか』

(こころは、こうでしょ！)

斜陰は、的確に咎める一手を放った！

「ん？ なんだそりゃあ」

おじさんは斜陰の手の意味が分からない。

「こうして……たらどうなる？」

パチリ、パチリ、パチリと数手進み、斜陰が打ったところで、盤が止まった。

「まさか……！」

『ユウコさん、また一段と強くなりましたね』

(これはこの前の明日美先生との検討で、出てきた筋でしょ?)

局面としての、難易度はAssumiとshineとの対局の時よりもずっと低い。

しかし、この場面で、しっかりと斜陰は読み切り、この手を打った。一見すると、手が広そうで、勝つだけなら実際、いろいろな手が考えられた。

その中で、最短で勝ちを決めると考えた場合——斜陰の一手はなんとなくで打てば、奈落に落ちる危険もはらんでいた。その中でしっかりと、斜陰は見切り、最善の一手を放ったのだ。

——やはり、ユウコさんの才はヒカルに並ぶ、もしくはそれ以上……かもしれない。

佐為は内心思ったのだった。

そして終局した頃、

「私、奈瀬明日美って言います！ ああ、本日はよろしくお願ひします！」  
そんな声が聞こえてきたのだった。

\*

斜陰は手短に感想戦を行った。

そして、一時休憩の旨を受付に伝えて、盗み聞き——もとい、観戦のための場所を確保する。

奈瀬たちがいるのは部屋の壁際だったが、奈瀬はちょうど観葉植物を背にしており、その向こう側には休憩スペースがあった。

これはちょうどいい。

斜陰は休憩スペースのソファでくつろぐふりをしながら、奈瀬と管理人の会話の様子を盗み見る。

『管理人の方は30くらいの男性ですね』

(囲碁は強そう?)

『それは見たただけでは何とも……』

(佐為でも分からないの?)

『さすがにそこまでは……』

もし仮にできる人がいたとしたら、桑原本因坊くらいだろう。

2人の会話が聞こえてきた。

「しかし、まさか、あの奈瀬明日美さんと会うことになるとはなあ」

管理人の声だろう。

「あの、って私、有名人じゃないですよ? 一回、斜陰ちゃんとテレビに出たくらいで」

「いや、そっちじゃなくて、ここんとこ、最近、ネットの死神と打っているだろう? それでネットの碁打ちでは有名人さ」

「え、ああ、確かに、私とはバレますよね」

そして、少し間があつた後、管理人が言った。

「……さつきも言ったかもしれないが、ワールド囲碁ネットで稼ぐ気はないんだ。ただ純粋に世界中の人が気軽に碁をできる場所を作りたかっただけなんだ。だから、広告も最小限にしているんだ。維持するにはサーバー代とかかかるからね。その費用分の最小限だけ広告を置いている。本当はゼロにしたいんだけどね」

管理人は続ける。

「僕もよりよくしたいという気持ちもある。けれど、仕事とかいろいろ忙しくて、なかなか手が出せないんだ……だから、仕事の代わりにやれたらという意味でお金を出してくれたらやれると言ったのはそういうことだ」

管理人はさらに、言う。

「けれど、悪い意味で捉えないでほしいんだけど、お金を出すと云つても、奈瀬さんが出せる金額じゃあ大した額じゃないと思う」

「……いえ! あ、私が出すわけじゃなくて、別の人のお金つていうか! 具体的な金額はいつてなかったですけど……くらいは出せます」

金額のところは、小声で聞こえなかったが、斜陰が言った金額と同じ、数百万と言ったのだろう。

「そんなに出せるのかい? それはもしかして、ネットの死神 s h i

neと関係があるのかい？」

「えつと、それは……」

「いや、言いづらいことなら別にいい。ネットの碁打ちたちはみんなshineの正体を知りたがっている。けれど誰も知らないということは隠したい事情があるのだろう。それは詮索しない」

「……」

「でも、奈瀬さん、提案がある」

管理人は少しトーンを落として言った。

「それだけのお金が出せるのならいっそ、起業してみても面白いんじゃないか？」

「え？　え？　え？」

話は予想外の進んでいくのだった。

## ワールド囲碁ネットを手に入れよう③

『つてなわけで、起業してみたら？　つて言われちゃって〜』  
夜。

いつもの佐為と奈瀬との対局が終わった後、斜陰は奈瀬と電話をしていた。

結局、男装斜陰に奈瀬が気付くことはなかった。

斜陰は、今日の内容はほとんど知っていたが、知らないフリをして報告を受けていた。

『でも、ワールド囲碁ネットは慈善事業だと思ってやっているんだって。よくわかんないけど、広告費とサーバー代でトントンなんだとか……』

「うん」

『なんか、個人で運営しているのも良くないって思っているらしいよ？　管理人さんがいなくなったら、ある日突然使えなくなっちゃうって』

「……なら、囲碁の組織？　プロになるところに、あげるっていうのは？」

『日本棋院は、嫌だって、管理人さんは言ってたよ』  
「なんで？」

『トップが古い世代の人たちだからだって』

奈瀬は続ける。

『古い人たちが、トップの組織が、ワールド囲碁ネットを大切にしてくれるとは思えない。よくて現状維持だと思ってる』

「ふ〜ん」

『ふ〜んって、他人事だね……それで、起業するの？』

「ん〜、いろいろ改善したいところもあるし……突然、佐為が打つ場所がなくなったら嫌だし。やってみてもいいかも」

斜陰は好意的な反応だった。

しかも、それ以外にも理由はあるようだ。

「それに……」

『それに?』

「私あと少しは、辞めない気がするから」

『辞めないって何を?』

「アイドル」

斜陰は言った。

『えっ?』

「半年くらい前は、ある程度お金稼いだら、アイドルなんて辞めてやるって思っていたんだ」

斜陰は、過去を思い出しながら言った。

「でも——」

——視界に、烏帽子の幽霊が映る。

「ううん、正確にはまだ半年も経ってないなんて信じられない」

『それって囲碁を始めてから?』

「うん」

斜陰は、頷く。

「私、今は、アイドルでやりたいことができちゃったから、今すぐは辞めるつもりはなくなった。だから、お金はむしろあまるかも?」

『じゃあ……』

「うん、お金は私が出すから、起業やってみない?」

斜陰は最後に付け加えるように言う。

「明日美先生が」

『え、私が起業するの!?!』

「そりやそうでしょ? 提案されたのは明日美先生なんだよ?」

『でも、お金を出してくれるのは斜陰ちゃんなんだし、斜陰ちゃんが起業してよ! 私が実際の運営……って何するかわかんないけど、それはするから!』

\*

次の日。

タワマンを降りた斜陰の目の前に、いつものようにマネージャーが立っていた。

そして、いつものように黒塗りの車に乗り込んだ。

「休日を楽しめたかしら？」

「うくん、楽しかったは楽しかったけど、もうちよっと休みたかったよ……」

「また碁をやったの？」

「そうそう、碁会所に行ってきたよ」

「でも、天下のアイドルが男装しただけでよくバレないものね」

マネージャーは呆れながら、言ったのだった。

「でも、次の休みからは私もついていくから」

「……え？」

マネージャーからの予想外の言葉に驚く斜陰。

「いくら男装しているからって、あなただってバレる可能性はあるし、万が一の時のためにも、私がついて行って、守るから」

「な、なんでいきなり?！」

「それだけ、あなたの価値が上がったということよ。いくら日本で治安がすごくいいといっても、可能性はゼロじゃないのよ。そのリスクをほんの少しでも下げた方がいいって判断ね」

「え……」

斜陰はバカじゃない。

だから、マネージャーの言うことは理解できた。

しかし、それは困ったぞ、と斜陰は思う。

(つまり、和谷のアパートには行けなくなっちゃった?)

『残念ですが、そうでしょうね。ですが、碁会所なら大丈夫だと思いますよ』

(それはそうだけど……)

斜陰の表情を見るマネージャー。

「あら、不満そうね」

「別に、そんなことはないけど」

斜陰はそう言って、車の窓から、流れる景色を眺める。

「そうだ、起業ってどうやってやるか知ってる？」

ふと、言った。

「……え？ 起業自体は、役所に届け出を出せばできるけど……」

「それって誰でも、簡単にできる？」

「ええ、起業するだけなら、簡単よ。まあ実際に事業を軌道に乗せるのは大変だと思うけど……って私も、別にやったことないし、人づての情報だけど」

「へ〜」

なら、とりあえず、事業を軌道に乗せるとか、そんな気持ちはなく、ただ慈善事業をやるくらいの気持ちの斜陰にとっては簡単ということか。

そう斜陰は、思った。

しかし。

「あ、でも、斜陰ちゃんが起業するのは難しいかもよ？ だってほら未成年だと、親の同意とか必要なんじゃない？」

「……え？」

親。

それは斜陰にとって、タブーの1つだった。

「ていうか、ここまで答えといてあれだけど、斜陰ちゃん、起業するの？」

マネージャーが疑問を発するが、斜陰には聞こえていなかった。

(親……親……)

斜陰にはいいイメージがまるでない。

『ユウコさん……』

(や、やっぱり、私が起業するのは無理だ。明日美先生にやってもらおう)

\*

「ってことで、私には起業は無理です！」



『え、じゃあ私がやるってこと？　って私も19だし、未成年だけどね……』

『でも明日美先生は、両親との関係は良好でしょ？』

『確かにそうだけど……』

そして、奈瀬は言う。

『でも、そうだとしても、どうやって斜陰ちゃんはお金を払うの？』

「え？」

『調べてみたけど、単純に私にお金をくれる場合、数百万円も払っちゃうと税金かかるみたいだし』

「え、そうなの？」

『うん。別の方法だと、投資って形にするのは、やっぱり親の許可が必要みたいだし……』

……。

なかなか、法律というのは面倒だと、斜陰は思った。

そして、今日の佐為による奈瀬の指導も終わり、あとは寝るだけだった。

斜陰は、扉を開けて、スリッパを履いた。

タワマンのベランダ——いや、バルコニーと言った方がいいかもしれないが、そこに足を踏み出した。

「うわ、やぶ……」

季節は冬に差し掛かっている。

夜風は寒かった。

そんな中、斜陰は夜の東京を眺めてみた。

『改めて、人の進歩はすごいですね。こんな高いところに住んでいるなんて』

「……でも、私の心は……いや、なんでもない」

斜陰は眺めていた。

そして、言った。

「やっぱり、私が起業するべきかもね」

『なぜ、とお聞きしても？』

佐為が尋ねる。

「……なんでだろう？」

斜陰は、なぜそう思ったのか自分でも分からなかった。

「せっかく、私のお金で起業するんだから、私が持つべきって思ったのかな」

『確かにそうですね』

「私アイドル辞めたらニートかなって思ってたけど、それよりは社長の方がいいかな？ っつのもあるかも」

『ふふ、それもそうですね』

「でも——」

斜陰は言った。

「——どうせ親に許可がいるのなら……っつて思ったのが一番、だと思  
う」

斜陰は携帯を開いた。

そこには親と家の番号が書かれていた。

嫌だ、やりたくない。

けれど、斜陰は電話をすることに決めた。

ずつと背を背けてばかりもいられない。

そんな気持ちだが、斜陰にはあった。

そして、決めたら、なるべく早い方がいい。嫌なことは早く終わら  
すべきだ。斜陰は、嫌いなものは先に食べて、好きなものを最後に  
とっておくタイプなのだ。

電話をかける。

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

待ち時間、嫌に緊張する。

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

しかし、無駄に緊張しただけで、家の電話は出なかった。

ならばと、親の携帯電話にかける。

p l l l l l l l l

p l l l l l l l l

「あ、もしもし?」

出た。

少し、ノイズが大きいのが、確かに親——父の声でした。

「もしもし、ユウコだけど」

斜陰——いや、溝口ユウコは、言った。

『あ、ユウコか! 久しぶり!』

意外にも朗らかな声だった。

「……久しぶり」

『いやー、元気してるか? まあ、テレビで元気な姿は見ているけどな』

「そっか」

『見たくなくても勝手に視界に入ってくるからなく』

……それはどういう意味なんだと言いたくなかったが、斜陰はすべきことをすることにした。

「あの、今回はやって欲しいことがあって」

『やってほしいこと?』

「私、起業しようかと思ってて、それで親の許可が必要だから……」

『ああ、そういうことか! なるほどなく、ユウコが電話かけてくるなんて、おかしੀと思っただが、そういうことだったか!』

……本当に、この男は、私をどう思っているのだろうか。

いや、昔はこうじゃなかった。

少なくとも私がアイドルをする前は普通の家庭だったのに。

『それで、具体的にはどうすればいい?』

「そっちに書類を送るから、印鑑とかしてくれればいいと思う。ちよつと細かいことは後で、伝えるから……」

『ああ、わかったわかった。でも、家に帰るのはあと一週間は先だから、その後になるけど、それでもいいか?』

「え、あ、うん、大丈夫だけど」

『今、俺たちはハワイに来ているから、ごめんな。冬のハワイもなかなかオツなもんだぞ〜、あ、ママとお姉ちゃんも一緒だぞ〜』  
……。

もちろん初耳だったし、その旅行資金も、私が中学に稼いだお金だろうが、別にいい。

「お願いね」

『おう、任せとけ！』

「じゃあ、ね……」

『おう、またな！』

斜陰は、電話を切った。

結局、パパという言葉も、お父さんという言葉も出なかった。

『ユウコさん……』

「佐為、明日も仕事だから、もう寝ようか」

『はい』

斜陰は、寒いベランダから、暖かい部屋に戻った。

そして、大きなベッドにダイブしたのだった。

## ワールド囲碁ネットを手に入れよう④

それから。

斜陰の休日になった。

とある高級レストランの個室に、奈瀬とワールド囲碁ネットの管理人の2人がいた。

「それで、起業しようかという話にはなっているんですけど……私が起業するつもりはなくて」

「……というのは？」

「やっぱり、私はお金を出すわけじゃないですし、お金を出す本人が起業するのが一番いいかなと思います」

「本人？」

「はい」

「まさか……本人というのは、ネットの死神shineだったりするのかい!？」

管理人は、少し興奮した様子で言った。

奈瀬は首を振る。

「違います。でもきつと管理人さんも知っている人です。そもそもこうやって、ワールド囲碁ネットをもつと良くしたいと言ったのも、実は私じゃなくて、彼女なんです。彼女が、私に依頼したんです」

「……彼女？ となると、女性の方。女性のプロ棋士とかですかね？」

「いえ、プロ棋士ではないです」

「え、じゃあ……誰だろ？ 僕は囲碁界には詳しいですが、それ以外のことはあまり知らないの……もしかしたら知らないかもしれないかもしれません」

管理人は言った。

その時、扉が開いた。

「よっ」

現れたのは、黒髪の美少女。

右手を小さく立てて、気楽な挨拶を奈瀬とかわした。

そう『彼女』とは、今を時めくアイドル、溝口斜陰、その人だった。奈瀬は苦笑しながら言った。

「知ってます?」

管理人は目を大きくしたまま、固まっていた。

斜陰は、奈瀬の隣に座った。

「こんにちは! ワールド囲碁ネットの管理人さんですよ、話は明日美先生から聞いてます」

「え、しゃ、斜陰!? あの斜陰!?!」

「はい、そうです」

「な、なんでこんな有名人がここに!?!」

「それは、私がワールド囲碁ネットをより良くしたいから、ですよ?」

「……まさか、あなたが奈瀬さんの言う『彼女』なんですか!?! ワールド囲碁ネットを良くしたいって言いでした!」

「この流れで、それ以外ある?」

斜陰は笑顔で言った。

管理人は、状況を理解する。

この目の前にいる斜陰こそが、件の相手なのだ。

「……斜陰の囲碁趣味は、そういう戦略なのかと思ってました。ギャップ萌えを狙うような戦略なのかと。でも、違うんですね。わざわざ、起業しようと思うくらいに、囲碁に傾倒しているんですね」

「ん、まあ囲碁って面白いし」

「なるほど……できれば一局打ってもらっても?」

「え?」

「囲碁への情熱を確かめたい。ワールド囲碁ネットを渡すに値する相手か、確かめたいのです」

管理人は、折り畳みの碁盤をバッグから取り出した。

「時間があれば奈瀬さんに打ってもらおうかと思って持ってきたのですが、ちょうどよかったです」

碁笥も2つ取り出す。

管理人はフタを取り、白石を握った。

何も言わずにそんな行動をした管理人に、斜陰は尋ねる。

「……やるんですか？」

「やりませんか？」

「……ま、せつかくだしやることにするよ」

斜陰は、黒石を2つ置く。

管理人が手を開くと、白石の数は偶数だった。

斜陰の黒番、管理人の白番となり対局が始まった。

「よろしく願います」

斜陰の初手は、右上隅小目。

そして布石が進行していく。

序盤の進行。

途中で、斜陰は、小目への力カりに秀作のコスミを放った。

——秀作のコスミは、現代ではやや甘いと言われる打ち方。しかし、局面によつては有力な手になるのも事実。この局面でのコスミはなかなか良いセンス。

佐為は思った。

——しかし、この者。不思議な箱で、碁をできるようにした者と聞く。さすがに、碁への情熱は高い。この布石の数手を見ただけでもわかる。今のユウコさんでは分が悪いか。

パチ、パチ。

パチ、パチ。

局面は進行していく。

序盤はなんとか五分を保ったが、中盤の折衝でスキを突かれてしまった。

(そっか……ここを手抜いて、そっちにいけるなんて)

斜陰はなんとか喰らいつこうとする。

しかし、佐為の読み通り、管理人の棋力は高く、徐々に差は広がっていく。

パチ、パチ。

パチ、パチ。

石が盤を埋めていく。

もう、大きなところは残っていない。

ヨセに入ろうかという段階だった。

どうみても逆転の余地はないと、斜陰は理解した。

「……ありません」

「ありがとうございます。いや、斜陰さん、本当に強いですね。びっくりしましたよ」

「でも、管理人さんに比べたら……」

「はは、ありがとうございます。けど、奈瀬さんほどではないですけどね。奈瀬さん、どうでしたか？」

管理人は奈瀬に振る。

「管理人さんもすごく強かったですけど、私は斜陰ちゃんの実力に驚いたよ。テレビで打った時も強いと思ったけど、あの時より、確実に強くなっている」

「でも、私、負けちゃったよ？」

「じゃあ、少し検討しよう？ たまには私から感想戦をしたいし」

そうして、奈瀬がアドバイスする形で感想戦を行った。

斜陰と管理人の良い手、悪い手を指摘しながら、楽しく感想戦を行った。

「それで、私はどうでしたか？」

斜陰は聞いた。

そもそもこの対局は、斜陰の囲碁への情熱を確かめ、ワールド囲碁ネットを渡すに値する相手か、判断するためだったからだ。

だから、その判断を聞いた。

管理人は言う。

「……その前に、1つ聞きたいことがあって。気になったのは、ネットの死神 shine との関係です。奈瀬さんと打ち始めたのもそうですし、名前も斜陰と shine だから、偶然とは思えないんですが」

管理人の指摘は正しい。

しかし、斜陰と shine の関係は、隠されたものだ。奈瀬でさえ詳しくは知らないのだ。

奈瀬はまずいんじゃないの？ と思いつつ、斜陰の方を見る。

『どうもどうもどうも』



佐為も、まずいと思ったのか慌てだした。

でも、斜陰は慌てなかった。

どうすればいいか知っていた。

左目を閉じて、人差し指を口に当てる。

「ひみつですっ」

アイドルスマイルで、答えた。

きつと。

アイドルは、秘密があるくらいがちょうどいい。

斜陰はそのことをなんとなく理解していた。

「……そうか」

管理人は深く頷いた。

「いいでしょう、あなたに全面的に協力します」

\*

その後、いろいろな手続きをしたり、斜陰の実家に書類を送ったりした。

そして無事、斜陰は親からの許可も取れて、役所への手続きも終わらせた。

「いやあ、思ったより大変だったね」

「斜陰ちゃんも頑張ったとは思うけど、私の方が100倍大変だったんだからね?」

いろいろ面倒なことは基本的には奈瀬がやった。

一部は管理人がやってくれたが、大半は奈瀬だった。斜陰は本当に一部のことしかやらなかった。

「今日も泊りでいい?」

「……別にいいけど、明日も仕事だから」

「分かってるって」

ここは、斜陰のタワマンの自室。

いろいろ手続きするのに、紙で準備しないといけないので、リアルで会う必要があったのだが、いちいちどこかで待ち合わせていたら面

倒なので、斜陰は自宅に呼ぶようになっていた。

なお、自宅に呼んだ日は、A s u m iとs h i n eとの対局はなくなってしまうが、仕方がない。

「いやーでも本当に起業しちやっただね」

奈瀬は書類を眺める。

そこには、たった3人の会社の情報が書かれていた。

「シャインの碁株式会社、社長は溝口ユウコ……ふふっ、面白い」

「……ネーミングセンスないって言いたいの？」

「ううん、すごくいいと思う。でも、これって、世間にバレたりしないの？」

奈瀬は疑問を口にした。

「うーん、私の本名は知られていないはずだから、大丈夫だと思うけど……」

そうして、ひっそりと天下のアイドルは起業したのだった。

クリスマスは誰と過ごす？

起業した。

でも、日常は何も変わらないみたいだ。

「斜陰ちゃん、そろそろ本番始まるから」

「……」

「斜陰ちゃん？ そろそろスタジオに」

マネージャーに言われる。

いつも通りに見える。

「あの、最近の私、どう思います？」

「どう思いますって……」

「どう思います？」

「……今まで以上に、女性的な魅力が出てきたように思うわ」

マネージャーは答えた。

「他には？」

「別に……囲碁への熱は冷めてないみたいねってくらいで」

「それ以外には、どう思います？」

「え……どうしちやっただの？」

困惑するマネージャー。

「本当に他には何も無い？」

「そうだねえ、他には……少し前からだけど、楽しそうな雰囲気になっ

たってこととか？ 前はもつと暗かった気がするから」

マネージャーは答えた。

起業のキの字も出てこなかった。

(……これは、やっぱり本当に知らないってことかな)

『そうじゃないでしょうか』

佐為も同意する。

「早く、行くわよー！」

「はーい、行きますよーっと」

斜陰はダルそうに、スタジオ入りした。

入るとすでに、斜陰の所属するアイドルグループの子数人が席に座っていた。

「斜陰ちゃんは、その席にお願いね〜！」

プロデューサーに言われて、席につく。

隣には、人気No. 2の春奈もいた。

「あ、斜陰ちゃん！ 最近、あんまり会えてない気がする〜」

そう言っつて、春奈が抱き着いてきた。

「……先週も、会ったよね？」

「そうだっけ？」

もにゅもにゅ、ぼいんと、胸の暴力が押し付けられる。

「……撮影前だよ？ 服にしわがついちやう」

「あー！」

春奈はぱつと離れ、手で服を伸ばす。

「えへへ〜、大丈夫大丈夫」

斜陰も自分の服を見下ろすが、特に問題なさそうだ。

「……もう、春奈の天然はずつと変わらないね」

「それが私の魅力なんだよ☆」

春奈は、ウインクしながら、ピースした。

いつにも増して、テンションが高いような……

いつもこんなもんだっつたっけ？ いや、さすがにここまでではな

かった、はずだ。

「……テンション高い？」

「えへへ〜、分かっちゃう〜？」

「なんか、いいことあった？」

「違うよ、これからいいことがあるんだよ？」

「え？」

春奈の言葉の真意が分からず、聞き返そうとした。

が、その時。

「では、みなさん！ 『クリスマスに何をする!?』を時めくアイドル

の聖夜を聞いてみた！』の撮影を始めます」

撮影開始になってしまった。

てか、これだ。

春奈は、斜陰をキラキラした目で見てきている。

この番組の内容が楽しみなのだろう。

……恋愛禁止の私たちに、何を期待しているのだろうか。

この番組も、春奈も、私からは何も期待した答えは出てこないからね？

斜陰は内心、大きな疑問を抱く。

そして、番組の最初は、クリスマスに予定があるかをアイドルの子どもたちに聞く、という内容になった。

「では次、斜陰ちゃんには予定はありますか？」

「たぶんあると思うけど」

「……な、なにーっ!? 画面の前のファンが、絶望の表情を浮かべていることでしょう!」

「いや、仕事があると思うって話」

と答えると、マネージャーが腕をクロスさせて、大きくバツを作っている。

「え? ないの?」

マネージャーは大きくマルを作った。

そして、決め顔で親指を立ててきた。

「だとしても、みんなが期待しているようなことはないからね?」

「しかし、斜陰ちゃんのクリスマスに予定がないというのは、世の男たちには、朗報ですよ! 今からでも斜陰ちゃんにデートを申し込んでも遅くないかもしれません!」

司会のお笑い芸人出身のおっさんは、斜陰の前にひざまずく。

どこから取り出したのか、花束を持って、斜陰に差し出した。

「ということで、僕とデートしてくださいっ!」

「何が、ということで、なんだよっ!」

お笑い芸人の相方が出てきて、司会の方の頭をはたく。

「あはは……今は恋愛する気はないっていうか、余裕がないかな?」

斜陰は、一応答える。

「それに私、一人で外出禁じられているから、マネージャーも一緒に

なっっちゃうし」

「それでもいい！ 相方合わせて、4人でダブルデートにしよう！」

「お前はまだ、諦めてなかったんかい！」

また相方が司会を叩く。

「はいはいはい！ 斜陰ちゃんの予定が空いているなら、私と遊ぼうよ！」

春奈が入ってきた。

なんでアンタまで入ってきた？

と斜陰は思いつつ、「クリスマスは一人でゆっくり〜」などと適当に答えておいた。

そして、番組は、次の質問のターンに映った。

その内容は……気になる相手がいるか、という話になった。

「と、いうことで！ 斜陰ちゃんには、いるんですか!?! 気になる相手があっ!?!」

「なんで、春奈が司会役になっているの？」

「まあまあ、そこはいいじゃないですか〜」

「はあ……まあ、私に気になる相手なんているわけないけどね」

「じゃあ、今までにいたことは？ ちよつといいなって思ったくらいの、淡い恋心でもいいから〜」

春奈は引き下がらない。

「うくん、あんまりない気がするけど……でも、ちよつといいなって思っくくらいはあるけど」

斜陰は今までの人生を振り返る。

かつこいいなって思っくことはある。

けれど、淡い恋心？

なにそれって感じ。そんなこと一度でもあっただろうか。

一瞬、茶髪の碁打ちのことを思い浮かべそうになったが、あれはアイツからの一方的な好意だから、全然違うし。

「……うくん、本当に、恋心とか一度もない気がする。かつこいいなって思っくことはあっただけど。そもそも、あんまり恋心とかわかんない、かな？」

「ほんとに？ それなのに恋愛ソング歌ってるの??」

「一日中あなたのことを考えているとか、病気？ って思いながら歌ってる……あー!」

「あ!? 斜陰ちゃん、まさか心当たりが!」

「……うん」

斜陰が頷いた。

春奈の目が輝く。

他の司会のお笑い芸人や、他のアイドルメンバーたちも、注目する。

斜陰の口が開く。

「最近、割と、碁は一日中考えているかも」

「碁かいつ!!」

春奈がツツコむ。

周りの人たちも、みんなズツコケた。

「じゃあ、斜陰ちゃんの恋人は碁ってことで、クリスマスも囲碁しててください!」

「ぶつきらぼうに言われてしまった。

「……言われなくても、碁をすると思うけど」

\*

撮影が終わり、ソファに腰かける斜陰。

（はあー、疲れた）

『ユウコさん、お疲れ様です』

（なんか今日の撮影は、ほとんどずっと座ってただけなのに、すごく疲れた感じがする）

立ったのは、理想のデートとか言って、デートのシミュレーションをした時くらいなのに。

『いろいろ、盛り上がりましたからね』

（……春奈が楽しそうだったから、そこだけはよかったけど）

斜陰はぼーっと、天井を見上げる。

すると、脳裏に盤が現れて、勝手に碁石が踊り始めた。

どんな展開なのかもわからないし、碁盤の全体ではなく一部分だけの小さな盤上で、黒石と白石が高速で並んでは消え、並んでは消えを繰り返している。

(佐為。さっきの撮影で、春奈に聞かれて気付いたけど……私ずっと囲碁している)

斜陰は心の中で、言った。

(ずっと碁盤が近くにあつて、気を抜くとすぐに考えている。今もそう。撮影終わったと思ったら、いつの間にか、碁を考えていた)

『ユウコさんも碁打ちになってきたということですね』

佐為は微笑んで、答えた。

(みんな、こういうものなの?)

『どうでしょうか。ただ、脳内で考えるのは、プロを目指すものならば誰でもできることです』

越智は、対局に負けた後は、トイレでこもって脳内で振り返りを行っていた。

越智に限った話じゃない。

院生レベルなら誰でもできる。

『ふとした時に考えてしまうのは、碁打ちにはよくあることかと』  
(そっかあ)

そもそも、今まではこういう暇な時間は何を考えていたんだっけ？

……ま、いつか。

囲碁を考えるのは楽しいから。



レギュラー囲碁番組、はじまります！

「アイツ、全然来ねー」

和谷はぼやいた。

「アイツって、ユウのことかい？」

「ああ。アイツ、連絡しても、忙しくて〜とか、家から出る気が起きない〜とかで、全然来ないんだよ。せつかく俺が碁を見てやるって言ってるのにな」

和谷は早くユウから聞き出したかった。

絶対に何かある。

和谷は確信していた。

それはおそらく、s a iをネットの死神s h i n eの名で蘇らせた張本人、という可能性が高いとは思っている。ただそうじゃなくとも、何か絶対にあるというのは、もう和谷の中では決まったことだった。

「あ、そういえば、s a iが斜陰のファンっていう説あったよな？ 絶対にシャインがライブの時とかに、現れないっていう」

「ああ、前に和谷が言ってたことだろ？」

「俺気付いたぜ……もし、ユウがXなのだとしたら——ユウも斜陰の大ファンってことになる！」

「……それって重要なのだろうか」

「……いや、アイツが碁をしに来なくても、ライブには行ってるんじゃないのか？ なら、一緒に斜陰のライブを見に行こうと誘えば、アイツも来る！ それで、ネットの死神のことも聞き出してやる！」

和谷は名案とばかりに、メールを打つ。

次のライブ、握手会でもいい。何かしらのファンイベントがある時に、誘えばいい。

次は——ライブが来週にある。

これしかない！

和谷はメールを打つ。

~~~~~

From:和谷

To:ユウ

お前って、斜陰のファンだろ？

来週のライブ一緒に行かぬーか？

~~~~~

返信はすぐに返ってきた。

~~~~~

From:ユウ

To:和谷

斜陰のファンじゃないし、ライブに見に行ったこともないよ

あとちなみに、その日は予定があるし

~~~~~

と返信が来た。

和谷には分からない。

斜陰本人なのだから、斜陰のファンではないということに。

ライブをする側なのだから、ライブを見に行くことはないということに。

「……返信来たけど、斜陰のファンじゃないってさ。ライブも行ったことないって」

和谷は、完全にその可能性に気付かないのだった……

\*

囲碁のレギュラー番組を作るということになったものの、時期というのがある。

通常、テレビ番組が変わるタイミングとして一番多いのは4月であ

り、季節の節目節目、7月、10月、1月ということも多い。

逆に言うと、それ以外の中途半端な時期に新番組が始まるということとは稀だ。

斜陰の囲碁番組も、その例に漏れず、1月から始まることになった。

その初回の撮影は、年明け前に行うようで……

「ついに始まってしまふのね……」

テレビ局に奈瀬はいた。

「明日美先生！ やつと一緒に働けるね！」

「……はあ」

「楽しくない？」

「いえ、ちよつと不安で……ほら、私、前回の撮影の時は、ほとんどしゃべらなかつたじゃない？ けど、これからはいろいろ喋らないといけないだろうし」

「大丈夫！ 好きに喋れば大丈夫だから！」

「そりゃ、斜陰ちゃんはそうだろうけど、普通の一般人はテレビで緊張するからね？」

奈瀬は言った。

「でも、斜陰は否定する。」

「そうじゃないよ？ だって、私たちアイドルも、トークの修行とかしているわけじゃないからね？ なのに、バラエティ番組出たり……みんな初めは、そんなもんなんだよ」

「そっか」

「それに明日美先生は美人だから大丈夫！」

「……どういう意味よ」

「美人だから、面白いこと言わなくても大丈夫！ すべっても大丈夫！ ほとんど黙ってても大丈夫！」

「だいじょうぶ、だいじょうぶって、テキスト言つてない？ 大丈夫って言われすぎて、大丈夫じゃなく感じてきたんだけど……？」

奈瀬は首を傾げた。

「ま、実際のところはどうか分からないけどね」

「やっぱりテキストじゃん！」

「でも、トークがうまい人が受けるとも限らないのがこの世界だから。人気が出て、すぐに消える人もいれば、人気がつつと続く人もいる。番組だって、人気が出ないで終わることもあるし、予想以上に人気が出ることもある」

「……でも、斜陰ちゃんは大人気アイドルじゃん？ やっぱりコツとかあるんじゃないの？ 人気も全然落ちているっていうよりも、今もまだ伸びているでしょ？」

「うーん、それが私にもよく分からないし」

斜陰は心の底から言った。

「囲碁とかやり始めたのも、別に人気のためじゃないし。というか、普通に考えたら囲碁なんてジジ臭い遊び、私のファン層に刺さると思えないし」

『ジジ臭い……』

斜陰の何気ない一言は、佐為に刺さって、しくしく泣かせてしまったようだ。

ただ斜陰にはよくあることなので、スルーする。

「つてことで、ウケとか気にせず、楽しくやろう！」

「た、楽しく……と、とりあえず早くテレビに慣れたい……」

奈瀬は力なく、そう言った。

「あ、でも明日美先生は、司会も兼ねているっぽい」

「え、」

撮影が、始まった。

スタジオに行くと、もう一人、男の人がいた。

固定は斜陰と奈瀬の予定だが、今回は初回のスペシャルゲストが登場しているようだ。

「えー、では、初回である今回はスペシャルゲストとして、塔矢行洋元名人に来ていただいております……」

奈瀬は緊張しながら言った。

緊張しないはずがなかった……

テレビとか関係なく、この状況は緊張せざるを得なかった。

奈瀬にとって、塔矢行洋は一番のスターだ。  
子供のころからの憧れだ。

そして、もう一人。

劇的な反応を見せる者が――

『塔矢行洋っ!!』

今は斜陰の中に住んでいる、佐為が叫ぶように言った。

『私と同じく神の一手を極めんとする者っ！ その眼光を見ただけで分かる。私がいなくなった後も、研鑽を怠ってはいなかったということに』

佐為が言った。

(私と同じくって……佐為、もしかして、神の一手をまた目指す気になった?)

『あ、いえ、私はもう、神の一手を目指してはいないんでしたね……』

佐為はしよんぼりと答えた。

塔矢行洋は、そんな斜陰と佐為の様子に気付くことなく話しかける。

「斜陰さん。私はアイドルには疎いが、君のような子が碁をやってくれるのは、囲碁界にとっても非常に有益だろう。まずは、そのことに感謝申し上げたい、ありがとう」

塔矢行洋は、頭を下げた。

「え!? 頭を上げてください! 別に囲碁が好きでやってるだけですから!」

「囲碁が好き……か。その気持ちを大切にしてほしい。強さばかりを求めるプロの世界にいますと、時として、自分が囲碁が好きなのかどうか分からなくなってしまうことがある。囲碁がっらく苦しいと思うようになってしまうことがある」

「そう……ですね」

明日美先生のような状態になってしまうということだろう。

「えー、では、塔矢元名人と、斜陰ちゃんの対局を、行いましょう」

奈瀬はガチガチに緊張ながら、言った。

「ということ、斜陰さん。始めようか」

「はいっー」

『……』

スタジオに、わざわざ畳の間が準備されており、そこに高級そうな足つきの碁盤が置かれていた。

塔矢行洋と斜陰が入室し、盤を挟んで向かい合う。

「どうかな？ 4子くらいでいいかい？」

「は、はい！ お願いしますー！」

斜陰も、塔矢行洋のことは佐為から聞いている。

佐為クラスの手相手だと知っている。

実は、斜陰は佐為と対局したことはない。

だから今まで戦った中で一番強い相手と戦うことになる。

「よろしくお願いします」

『……』

佐為が黙って見守りながら、その対局は始まった。

## V S 塔矢行洋

それは指導碁だった。

そのことは、初めから分かっていた。

斜陰と元名人の力の差を考えれば当然のこと。

多少囲碁を知る者であれば、元名人に本気を出されたら、4子では勝負にならないことは理解している。

奈瀬はもちろん、塔矢行洋も、斜陰自身も、そう思っていたし、全員、指導碁だと思っていた。

いや、実際、指導碁だ。

斜陰の棋力が予想以上に高く、塔矢行洋は内心驚いていたが、それは所詮アマレベルの話。

いくら急成長しているとはいえ、塔矢行洋相手に4子では勝ち目がない。ただ、テレビの指導碁として、塔矢行洋は全国に見せても恥ずかしくないような碁を打っていた。

——ふむ、持碁狙ってみても面白いか。

塔矢行洋は、内心そのようなことを思いながら、斜陰の石の運びを導いていた。

一方の斜陰。

(指導碁なのは分かる。塔矢さんは、私の本来の実力以上の力を引き出してくれている……)

美しい石の流れ。

碁を知らぬ者が見ても、美しいと感じるような碁だった。

布石がひと段落したところで、戦いが勃発。

少しずつ黒が損をしながらも、大きく損をすることはなく、斜陰は切り抜けた。

しかし、その直後の、塔矢行洋の打ち込み!

この対応を間違えて、4子の貯金、その多くを吐き出してしまった。

——ふむ、しかし、まだ10目は残っているか。なかなかの打ち手だ。

塔矢行洋は内心思った。

だが、斜陰と塔矢行洋の棋力差を考えれば10目程度なら、ヨセだけでもひっくり返るだろう。

一方、斜陰。

(つ、強い！ 実力以上の力を引き出してもらっているという感覚はある！ それなのに、その上から押しつぶされる！)

まだ局面は中盤だが、貯金は残っている。

けれど、斜陰はもう自分が勝つ可能性は塔矢行洋のさじ加減ということが分かってしまっていた。

(頭では分かっていたけど、4子じゃまるで勝負にならない。こんなに圧倒的な差があるんだ……私だって強くなってきたと思っていたのに)

そのとき。

『——ユウコさん』

佐為が言った。

(佐為?)

『私に……』

(どうかしたの? 佐為?)

『私に……』

(私に?)

『……いえ、なんでもありません』

佐為は何を言いたかったのだろうか。

斜陰は少し、不審に思ったが、再び盤に集中する。

この一手が大事だ。

手は広い。

局面は一段落したところで、いろいろな手が考えらそうに思う。

何を選択するか。

下手な手を打てば、簡単に碁が終わってしまうだろう。

もちろん、指導碁として見られるものにはしてくれるだろうが、斜陰の心はまだ、諦めたわけじゃなかった。

見えた。



そこだっ！

斜陰は碁笥から黒石を取り、その地点に打ち付けようとした。

『——そこじゃないっ!!』

佐為が叫んだ。

斜陰の手が止まる。

「……………む？」

黒石は盤に打ち付けられることなく、斜陰の腕が、盤の上空で静止していた。

塔矢行洋は、その様子に、わずかに反応をする。

(……………佐為?)

斜陰は体が固まったまま、聞く。

『ユウコさん、私に——』

佐為は言う。

『私と代わってください!!』

(……………え?)

『今から、この続きだけでいい！ 私に打たせてください!』

(ど、どうしたの、佐為?)

佐為は扇子をふわりと、塔矢行洋に向けた。

『私は今ここにいますと、あの者に伝えたいのです。そして聞きたいのです。あれから——あの時のネット碁の時から、どれだけ神の一手に近づいたのかを』

(え、でも……………佐為はもう神の一手を目指していないでしょ?)

『私だって……………』

佐為は叫ぶように言った。

『——私だって、許されるのならっ!!』

佐為は続ける。

『……………許されるのなら、神の一手を極めたかった。極めるために研鑽を積み続けたかった。けれど、神は許さなかった。私はヒカルのために——ヒカルのためだけに、私は千年の時を生きた』

(え? でも私に取り憑いているのは……………)

『それはおそらくユウコさんが碁を……………いえ、分かりませんが、また別

の理由でしょう。私が神の一手を極めるためではないことは、確かです』

佐為は断定的に言った。

斜陰は腕を引つ込め、石をカシヤリと碁笥に戻した。

(うーん、そんなこと気にしなくていいと思う)

『……え?』

(本当に神がいて、佐為が何かをしないといけないとしても、佐為は自由によっていいと思う。神の一手を極めるためじゃなくても、神の一手を極めたいならそうすればいいよ。だって、ヒカルさんの時もそうだったんでしょ?)

『それはそうですが……』

(だから、やりたいようにやればいいよ。神の一手を極めたいのなら、そうすればいいよ。私もできる範囲で協力するし……と言っても、今やっている以上に碁をやるのは厳しい気もするけど)

『……神の一手を極めようとしても、いい? 本当に?』

(宿主である私が許可する!)

斜陰は左に立つ、佐為の方を見て笑った。

それはちょうどテレビカメラのアンクルで笑顔になっていた。

『私は……神の一手を指すためならば、しかしなおさら、今この場であの者と戦いたいです』

(え、それは……佐為が打ったら、絶対におかしいってなっちゃうよ?)

今までとは違って、今回は囲碁番組なんだし、盤面もちゃんと映すから言い逃れできないし)

盤面はまだ中盤。

まだまだ手数はある。

『ですが、神の一手を極めるのなら、あの者と研鑽を積まなければならぬ』

斜陰は周りの様子を見渡す。

奈瀬がこちらを心配そうに見ていた。

流石にダメだ。ここから佐為に打たせるということは、佐為の存在を公表するくらいの覚悟がなければならぬ。

斜陰は塔矢行洋を見た。

やはり、佐為並みの実力があるのだろうか。そうだとしたらそれが一番問題だ。相手が弱ければまだなんとか言い逃れできるかもしれない。けれど、相手がこれでは、言い逃れなどできるはずもない。

斜陰は佐為を見た。

佐為はまっすぐに塔矢行洋を見ていた。

神の一手を目指せばいいとは言ったけど、それは私ができる範囲の話だ。

残念だけど、今ここで佐為に打たせるわけにはいかない……

そう考えていると、塔矢行洋が口を開いた。

「ふむ、アイドルというのも大変なのだね。確かにずっと碁を打っているだけでは、アイドルとしてはいささか地味すぎるのだろうか」

「……あはは」

気が付けば、カメラの方向を向いて悩んでいる変な人になってしまっていた。

「それで、次の手は決まったかい？」

問われる。

斜陰には、1つの妙案が浮かんでいた。

こっから全部を打たせてあげられないのなら、次の一手だけなら？

それなら、バレることはないはずだ。

「……塔矢さん、無理を言います。今までは指導碁だつていうのは分かっています。けど、次の一手、次の一手だけでいいんです。本気の一手を打つてくれませんか？」

斜陰は言った。

「本気の一手……か。私はいつだって全力のつもりだが、いいだろう。本気の一手を、元トップの棋士として、恥じない一手を放つことを約束しよう」

塔矢行洋は、威厳を持って答えた。

『ユウコさん……』

（佐為、ずっと打つことはできない。けれど、今この場で一手だけなら、打つてもいいよ）

『……』

(この盤面の次の一手。佐為は打ちたい手があったんでしょ?)

『……ユウコさん、ありがとうございます』

斜陰は盤の前に座りなおした。

佐為は斜陰の後ろから、盤を睥睨する。

「……なんだ?」

塔矢行洋は、突然の強大なプレッシャーに目を見張る。

目の前に座っているのは、ただのアイドルの女の子のはずだ。

なのになんだ、この圧倒的な重圧は。

突然周りの音が消え去り、色も消え去り、世界がぼっかりと、この盤を囲む小さな世界になったような。そして盤上の巨大な宇宙だけになったような錯覚に、元名人は襲われた。

そして、その重圧の主は、アイドルの女の子に、次の一手を指し示す。

アイドルの女の子は――

「――本気で打つって、約束ですからね?」

と言って、黒石を、打ち付けた。

星が生まれた。

そう見紛うほどの、重い一撃。

塔矢行洋は、一目見ただけで、すぐには答えが出せないと思った。

長考に沈む。

考えていなかった手だ。

そして、読んでみると、なるほど。深い。深い一手だ。

ならばこちらも深く潜るしかない。

碁の深いところまで、もっと深いところまで潜っていくしかない。

深い暗闇。

その奥へと進んでいくと、烏帽子をかぶった人の影が見えたような気がした。

誰だ、と問うても、何も反応がない。

しかし、かつて、会ったことがあるか、と聞くと、その人影は少し

笑ったように見えた。

——そうか、これは新初段シリーズの時の……そして、これは……

「s a i」

塔矢行洋は、ぽつりと呟いた。

「いや、詮索はしないという約束だったか。だが、そちらから来ると言うのなら、受けて立とう」

そうして、塔矢行洋はさらに深い場所へと、潜っていった。